

福岡市

羽根戸原C遺跡群Ⅲ

—野方・金武線新設・改良工事に伴う調査—

(3)

福岡市埋蔵文化財調査報告書第188集

1988

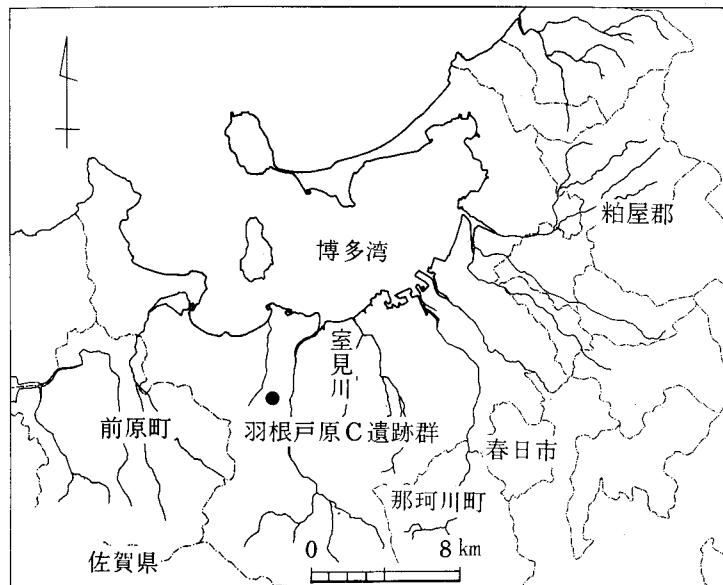
福岡市教育委員会

福岡市
羽根戸原C遺跡群Ⅲ

—野方・金武線新設・改良工事に伴う調査—

(3)

福岡市埋蔵文化財調査報告書第188集



遺跡略号 HNC
遺跡調査番号 8526

1988

福岡市教育委員会

序 文

福岡市は、最近発掘調査され話題を呼んでおります「鴻臚館跡」に代表されますように、埋蔵文化財の宝庫として知られております。本市ではこのような文化財の保護に努めるとともに、開発行為が止むなき場合には発掘調査による記録保存を行っております。

今回報告する羽根戸原C遺跡群は、西区の基幹道路整備事業である野方・金武線新設改良工事に伴い昭和60年に調査した遺跡で、弥生時代中期の拠点的な集落跡であることが分かりました。

本書が市民の皆様に広く活用されることを願うとともに、発掘調査・資料整理に関わられた方々の御協力に対し深い感謝を表します。

昭和63年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 佐 藤 善 郎

例　　言

1. 本書は昭和60年10月28日～61年4月7日に福岡市教育委員会が行った、西区羽根戸所在の羽根戸原C遺跡群4次調査の報告書である。
2. 発掘調査は、福岡市土木局道路計画課が計画した市道野方・金武線新設改良工事に伴う3次調査として実施した。
3. 遺構・遺物の実測・撮影・製図は調査担当者の他に、横山邦継・松村道博・大庭友子・田中稿二・藤村佳公恵が行った。
4. 本報告書に関する記録・遺物は、整理後、福岡市埋蔵文化財センターで収蔵・管理する予定である。
5. 本書に使用する方位は全て磁北である。
6. 本書の執筆・編集は吉武が行った。

遺跡調査番号	8526		遺跡番号	H N C	
調査地地籍	西区羽根戸		分布地図番号	092-A-6・105-A-9	
開発面積	10,240m ²	調査対象面積	2,256m ²	調査面積	1,562m ²
調査期間	1985年10月28日～86年2月1日、3月5日～4月7日				

本文目次

I.	はじめに	1
1.	調査に至る経過	1
2.	調査の組織	1
II.	遺跡の位置と環境	2
III.	調査の記録	5
1.	調査の概要	5
2.	弥生時代の遺構と遺物	5
(1)	堅穴住居跡	5
(2)	土壙	30
(3)	溝状遺構	56
(4)	掘立柱建物	58
3.	その他の遺構と遺物	59
(1)	1号河川 (SD-01)	59
(2)	81号河川 (SD-81)	65
(3)	古墳時代・古代の遺構	65
(4)	ピット・包含層出土の遺物	65
IV.	おわりに	67

挿図目次

Fig. 1	周辺遺跡分布図 (福岡市文化財分布地図・西部 I 1/16,000)	3
Fig. 2	調査区位置図 (1/3,000)	4
Fig. 3	弥生時代遺構配置図 (1/1,000)	4
Fig. 4	19号住居跡 (SC-19) 実測図 (1/40)	6
Fig. 5	19号住居跡 (SC-19) 出土遺物実測図 (1/4)	6
Fig. 6	20号住居跡 (SC-20) 実測図 (1/40)	7
Fig. 7	20号住居跡 (SC-20) 出土遺物実測図 (1/4)	8

Fig. 8	23号住居跡 (SC-23) 実測図 (1/40)	9
Fig. 9	23号住居跡 (SC-23) 出土遺物実測図 (1/4)	9
Fig. 10	24号住居跡 (SC-24) 出土遺物実測図 (1/4)	9
Fig. 11	24号住居跡 (SC-24) 実測図 (1/40)	9
Fig. 12	36号住居跡 (SC-36) 実測図 (1/40)	10
Fig. 13	36号住居跡 (SC-36) 出土遺物実測図 (1/4)	11
Fig. 14	53号住居跡 (SC-53) 実測図 (1/40)	12
Fig. 15	56号住居跡 (SC-56) 実測図 (1/40)	14
Fig. 16	53・56号住居跡 (SC-53・56) 出土遺物実測図 (7のみ1/2 他は1/4)	15
Fig. 17	59号住居跡 (SC-59) 実測図 (1/40)	15
Fig. 18	65号住居跡 (SC-65) 実測図 (1/40)	16
Fig. 19	68号住居跡 (SC-68) 実測図 (1/40)	16
Fig. 20	79号住居跡 (SC-79) 実測図 (1/40)	17
Fig. 21	140号住居跡 (SC-140) 実測図 (1/40)	18
Fig. 22	68・79・140号住居跡 (SC-68・79・140) 出土遺物実測図 (1/4)	19
Fig. 23	141号住居跡 (SC-141) 実測図 (1/40)	20
Fig. 24	141号住居跡 (SC-141) 出土遺物実測図 (1/4)	21
Fig. 25	142号住居跡 (SC-142) 実測図 (1/40)	21
Fig. 26	142号住居跡 (SC-142) 出土遺物実測図 (1/2)	22
Fig. 27	144号住居跡 (SC-144) 実測図 (1/40)	22
Fig. 28	155号住居跡 (SC-155) 実測図 (1/40)	23
Fig. 29	155号住居跡 (SC-155) 出土遺物実測図 (1/4)	23
Fig. 30	158号住居跡 (SC-158) 実測図 (1/40)	24
Fig. 31	169号住居跡 (SC-169) 出土遺物実測図 (1/4)	24
Fig. 32	169号住居跡 (SC-169) 実測図 及び東壁土層断面実測図 (1/40)	25
Fig. 33	170号住居跡 (SC-170) 実測図 及び東壁土層断面実測図 (1/40)	26
Fig. 34	174号住居跡 (SC-174) 実測図 (1/40)	27
Fig. 35	176号住居跡 (SC-176) 実測図 (1/40)	28
Fig. 36	83号住居跡 (SC-83) 実測図 (1/40)	29
Fig. 37	9・10・21号土壙 (SK-09・10・21) 実測図 (1/40)	30
Fig. 38	9・10・21号土壙 (SK-09・10・21) 出土遺物実測図 (1/4)	31
Fig. 39	30号土壙 (SK-30) 実測図 及び西壁土層断面実測図 (1/40)	33

Fig. 40	30号土壤 (SK-30) 出土遺物実測図・I (1/4)	34
Fig. 41	30号土壤 (SK-30) 出土遺物実測図・II (1/4)	35
Fig. 42	34・41・46・62・63号土壤 (SK-34・41・46・62・63) 実測図 (1/40)	37
Fig. 43	34・41・46・62・63号土壤 (SK-34・41・46・62・63) 出土遺物実測図 (1/4)	39
Fig. 44	91・103・112号土壤 (SK-91・103・112) 実測図 (1/40)	41
Fig. 45	103号土壤 (SK-103) 出土遺物実測図 (1/4)	42
Fig. 46	128号土壤 (SK-128) 実測図 (1/40)	44
Fig. 47	128号土壤 (SK-128) 出土遺物実測図 (1/4)	44
Fig. 48	134号土壤 (SK-134) 実測図 (1/40)	45
Fig. 49	134号土壤 (SK-134) 出土遺物実測図 (1/4)	46
Fig. 50	145号土壤 (SK-145) 実測図 (1/40)	48
Fig. 51	145号土壤 (SK-145) 出土遺物実測図・I (1/4)	49
Fig. 52	145号土壤 (SK-145) 出土遺物実測図・II (22・23は1/6 他は1/4)	50
Fig. 53	152・154・160号土壤 (SK-152・154・160) 実測図 (1/40)	52
Fig. 54	154号土壤 (SK-154) 出土遺物実測図 (1/4)	53
Fig. 55	160号土壤 (SK-160) 出土遺物実測図 (1/4)	54
Fig. 56	181号土壤 (SK-181) 実測図 (1/40)	55
Fig. 57	95号溝状遺構 (SD-95) 実測図 (1/80)	56
Fig. 58	95号溝状遺構 (SD-95) 出土遺物実測図 (1/4)	57
Fig. 59	各溝状遺構出土遺物実測図 (1/4)	57
Fig. 60	184・185号掘立柱建物 (SB-184・185) 実測図 (1/80)	58
Fig. 61	1号河川 (SD-01) 土層断面実測図 (1/80)	(折り込み)
Fig. 62	1号河川 (SD-01) 位置図 (1/1,000)	59
Fig. 63	1号河川内 杣列及び遺物出土状況実測図 (SA-109・82は1/40、SA-110は1/20)	60
Fig. 64	1号河川 (SD-01) 出土遺物実測図・I (1/4)	61
Fig. 65	1号河川 (SD-01) 出土遺物実測図・II (1/4)	62
Fig. 66	1号河川 (SD-01) 出土遺物実測図・III (1/4)	63
Fig. 67	1号河川 (SD-01) 出土遺物実測図・IV (1/4)	64
Fig. 68	ピット・包含層出土遺物実測図 (1/4)	66

付図. 羽根戸原C遺跡群周辺地形図 (縮尺1/1,000)

羽根戸原C遺跡群4次調査遺構配置図 (縮尺1/150)

表 目 次

Tab. 1	羽根戸原C遺跡群4次調査 遺構一覧表・I	68
Tab. 2	羽根戸原C遺跡群4次調査 遺構一覧表・II	69
Tab. 3	羽根戸原C遺跡群4次調査 遺構一覧表・III	70

図 版 目 次

PL.1	1. 羽根戸原C遺群遠景 東南から	2. I a区全景 南から
	3. I b区全景 北から	
PL.2	1. II a区全景 北から	2. II b区全景 南から
	3. III区全景 北から	4. IV区北半部 南から
PL.3	1. VI区全景 北から	2. VII区全景 南から
	3. VIII区北半部 北から	4. VIII区南半部 南から
PL.4	1. 19号住居跡(SC-19) 西から	2. 20号住居跡(SC-20) 西から
	3. 23号住居跡(SC-23) 西から	4. 24号住居跡(SC-24) 東から
	5. 36号住居跡(SC-36) 北から	6. 56号住居跡(SC-56) 南から
PL.5	1. 140号住居跡(SC-140) 西から	2. 141号住居跡(SC-141) 東から
	3. 142号住居跡(SC-142) 東から	4. 155号住居跡(SC-155) 西から
	5. 169号・170号住居跡(SC-169・170) 北西から	
	6. 176号住居跡(SC-176) 西から	
PL.6	1. 30号土壙(SK-30) 東から	2. 128号土壙(SK-128) 西から
	3. 145号土壙(SK-145) 西から	4. 134号土壙(SK-134) 西から
	5. 154号土壙(SK-154) 西から	6. 160号土壙(SK-160) 西から
	7. 110号杭列遺物出土状況 北から	
PL.7	出土遺物-1 (1/3)	
PL.8	出土遺物-2 (1/3)	
PL.9	出土遺物-3 (1/ 4.5)	
PL.10	出土遺物-4 (1/2)	

I. はじめに

1. 調査に至る経過

福岡市では西区の基幹道路整備事業として、野方・金武線の新設・改良工事を計画し、施工している。福岡市教育委員会埋蔵文化財課では、それに対応して、計画域内の埋蔵文化財発掘調査を事前に行っており、昭和63年度までに既に6次にわたる調査を重ねている。

今回報告する発掘調査は、西区羽根戸地内を南北に縦走している既存道路の拡幅に伴うものであり、野方・金武線新設改良工事に伴う3次調査にあたる。開発工事にかかる部分は、南北640mの既存道路の両側4mであり、福岡市文化財分布地図上では、羽根戸原C遺跡群の中央部を南北に縦断することになる。昭和58年11月28日～12月3・6日の試掘調査の結果、南側では台地が削平されて遺構は残っていないが、北半部には土壙・溝状遺構・住居跡などが密集していることが分った。よって本調査の範囲を対象地の北半部分、及び、南端部分の計2,256m²とし、昭和60年10月28日～昭和61年4月7日に本調査を実施した。

2. 調査の組織

調査委託 福岡市土木局道路計画課・西区役所土木農林課

調査主体 福岡市教育委員会 教育長 佐藤善郎

調査総括 埋蔵文化財課長 柳田純孝

埋蔵文化財第一係長 折尾学

調査庶務 埋蔵文化財第一係 岸田隆

調査担当 文化財主事 二宮忠司

埋蔵文化財第一係 佐藤一郎・吉武学

調査補助 田中稿二（明治大学）、大庭友子 整理補助 藤村佳公恵

調査・整理作業員 牛尾豊・尾崎達也・榎太郎・榎光雄・柴田大正・広田義美・真名子時雄・結城弥澄

・伊藤みどり・牛尾秋子・牛尾シキヨ・牛尾奈美枝・牛尾二三子・大内文恵・尾崎八重・大穂朝子・金子ヨシ子・菊地栄子・正崎由須子・惣慶トミ子・榎スミ子・典

略初・多田映子・鍋山千鶴子・西島初子・西島タミエ・林嘉子・平野ミサヲ・細川

ミサヲ・平田政子・真名子ユキエ・山西人美・結城シズ・結城千賀子・結城信子・

吉岡アヤ子・吉岡員代・吉岡竹子・吉岡蓮枝・有吉千栄子・飯田千恵子・太田頼子・

戸渡洋美・北島藤子・南里三佳・浜野年代・藤崎洋子・尾崎京子・斉藤美紀枝・真

名子順子・青柳恵子・大江美和子・平田ミサ子・山野住実恵

II. 遺跡の位置と環境

早良平野の西を限る山塊の一つである飯盛山からは、西に向かって扇状地が広がっており、それらは小河川によっていくつかに分断されている。羽根戸原C遺跡群はそのような分断された扇状地の一つに立地する複数の遺跡の集合体である。遺跡は東西約1,200m、南北約500mに及び、この周辺では吉武遺跡群と並んで最も広大な地域を指す遺跡名である。遺跡の北を限るのは道隈川、南を限るのは日向川とその支流である。

周辺遺跡の調査

太田遺跡は日向川の支流を挟んで当遺跡に南接する。道路建設や圃場整備事業に伴い、3次の調査が行われている。弥生時代後期の溝状遺構・甕棺墓、古墳時代前期の生活遺構、中世^{注1}集落跡などがある。

吉武遺跡群は10次の調査を数えている。先土器時代～中世の集落跡・墓地跡である。総数1,200基を越える弥生時代前期末～後期初頭の甕棺墓・木棺墓の調査が著名であるが、弥生時代～古墳時代の集落跡や、古代寺院関係の遺構・遺物などが検出されている。^{注2}

羽根戸古墳群は当遺跡群の西方の丘陵上にあり、砂防ダム建設・墓園建設などに伴って、D群・E群など5世紀～7世紀の古墳計22基が調査されている。^{注3}

この他、道隈川を挟んで北接する**戸切遺跡群**で古墳時代～歴史時代の集落跡が調査された。^{注4}また、**羽根戸原B遺跡群**では宅地造成時に甕棺墓が破壊されている。

羽根戸原C遺跡群の調査

1次調査（1983年） 農業用水路付け替えに伴う試掘調査で、東西100mほどの道路沿いに幅0,5mの範囲を調査した。弥生時代中～後期、中世の遺物などが出土している。^{注5}

2次調査（1984年） 中学校建設に伴う調査で、先土器時代包含層、縄文時代晚期の土壙、弥生時代中期の甕棺墓10基、弥生時代終末～古墳時代初頭の土壙、6世紀～11世紀の竪穴住居跡・掘立柱建物が検出された。^{注6}

3次調査（1985年） 墓園の進入路建設に伴って2次調査地点の西側を調査した。弥生時代終末～古墳時代の竪穴住居跡、中世の掘立柱建物・河川などが検出された。今年度に報告書刊行予定である。

4次調査は以上に続いて1985年に行い、弥生時代中・後期の集落、古墳時代の溝状遺構、弥生時代～奈良時代の河川の発掘調査を行った。



1. 羽根戸原C遺跡群 2. 野方久保遺跡 3. 戸切遺跡群 4. 次郎丸遺跡群 5. 羽根戸原B遺跡群
 6. 羽根戸畦津遺跡 7. 太田遺跡 8. 飯盛谷A遺跡 9. 飯盛谷B遺跡 10. 吉武遺跡群
 11. 吉武高木遺跡 12. 七反田遺跡 13. 都地遺跡 14. 都地南遺跡 15. 田村遺跡群 16. 四箇遺跡群
 17. 稲渡古墳 18. 金武古墳群吉武K群(熊山) 19. 都地城址

A:1次調査 B:2次調査 C:3次調査 D:4次調査

Fig. 1 周辺遺跡分布図（福岡市文化財分布地図・西部 I 1/16,000）

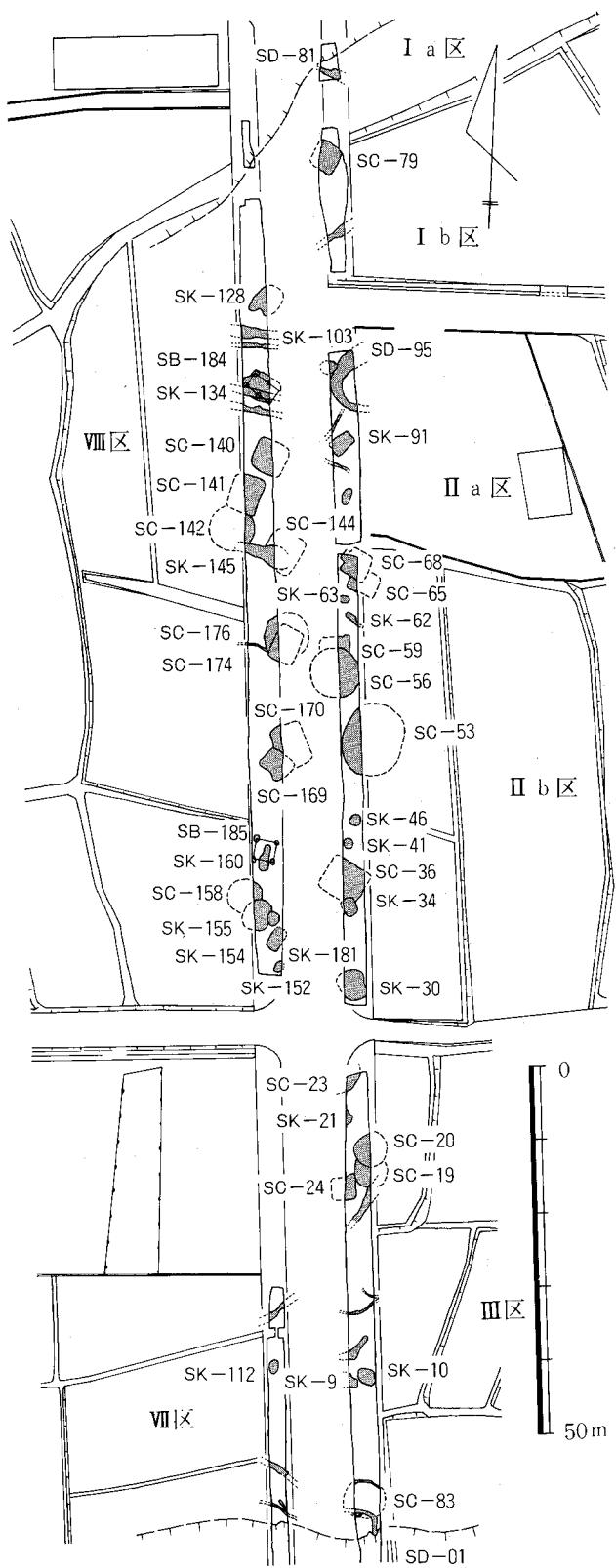
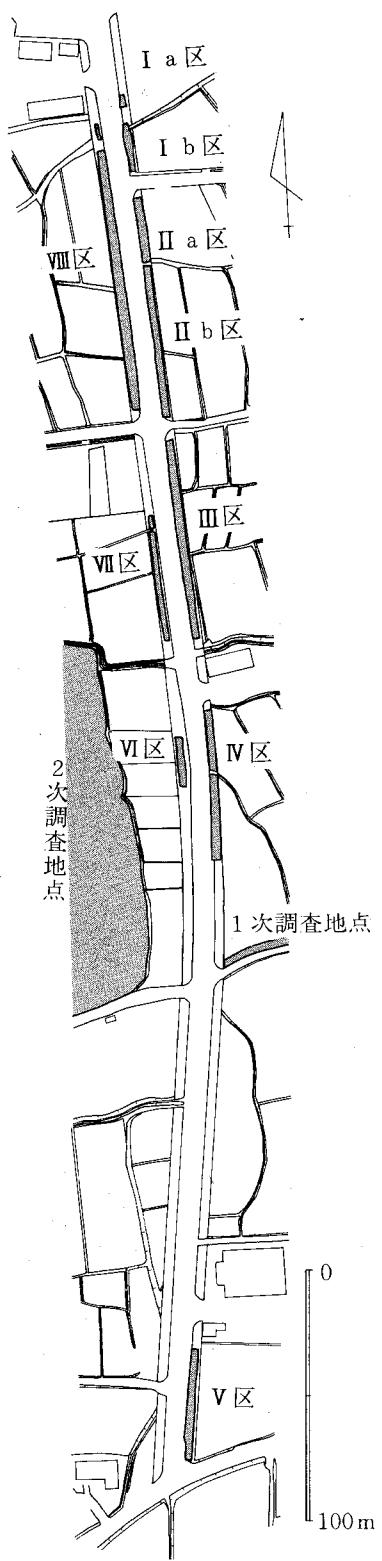


Fig. 2 調査区位置図 (1/3,000)

Fig. 3 弥生時代遺構配置図 (1/1,000)

III. 調査の記録

1. 調査の概要

今回の調査は羽根戸原C遺跡群のほぼ中央部を南北に縦断する大掛かりなトレンチ調査のようなものである。調査は、まず試掘調査の結果を受けて、北半部分と南端部に調査区を設けた。調査区は既存道路などで寸断され、8区画に分かれるため、東側の区を北から順にI～V区、逆に西側は南から順にVI～VIII区とした。また遺跡の北限をつかむためにI区の北を追加調査し、これをIa区とした。またII区は工事工程の都合で二回に分けて調査したため、これも北からa・b小区と呼称した。

V区を除く北半部の調査区でも、南側ほど開田時の地下げが著しく、床面まで削平された住居跡などがあり遺構の残りが悪い。これに対し北側では一部に包含層を残すなど、遺構が良く遺存している。

調査区内に検出された遺構には弥生時代中期～後期の竪穴住居跡22棟、土壙30基、掘立柱建物2棟、溝20条、古墳時代・古代の溝8条がある。これらはIa～III、VII、VIII区に集中してみられ、これらの遺構群を挟むようにして、北側と南側に谷状の旧河川がある。そのうち南側の河川は二次調査（昭和59年）で検出された河川の下流部にあたり、弥生時代中期～古代の遺物を含んでいる。

遺構には、その性格を問わずに検出順に連番号を与えた。またその表記には、遺構を表す記号としてSを用い、次に遺構の性格を表す記号として、杭列をA、掘立柱建物をB、竪穴住居跡をC、溝・河川をD、土壙をKとし、「SD-01」（1号河川）のように表した。但し、調査時の誤認で、包含層や大きめのピット等にも遺構番号を附していくため、報告書作成時にかなりの番号が欠番となっている。また土壙等はかなりの数を検出したが、調査区が狭いため全容を捉え難いもののがかなりあり、今回それらの説明は省略した。

2. 弥生時代の遺構と遺物

（1）竪穴住居跡

竪穴住居跡は22棟を検出した。平面プランが円形を呈すもの10、方形を呈すもの12であるが、調査区内に全体が収まるものは無く、すべてその一部を調査したのみである。

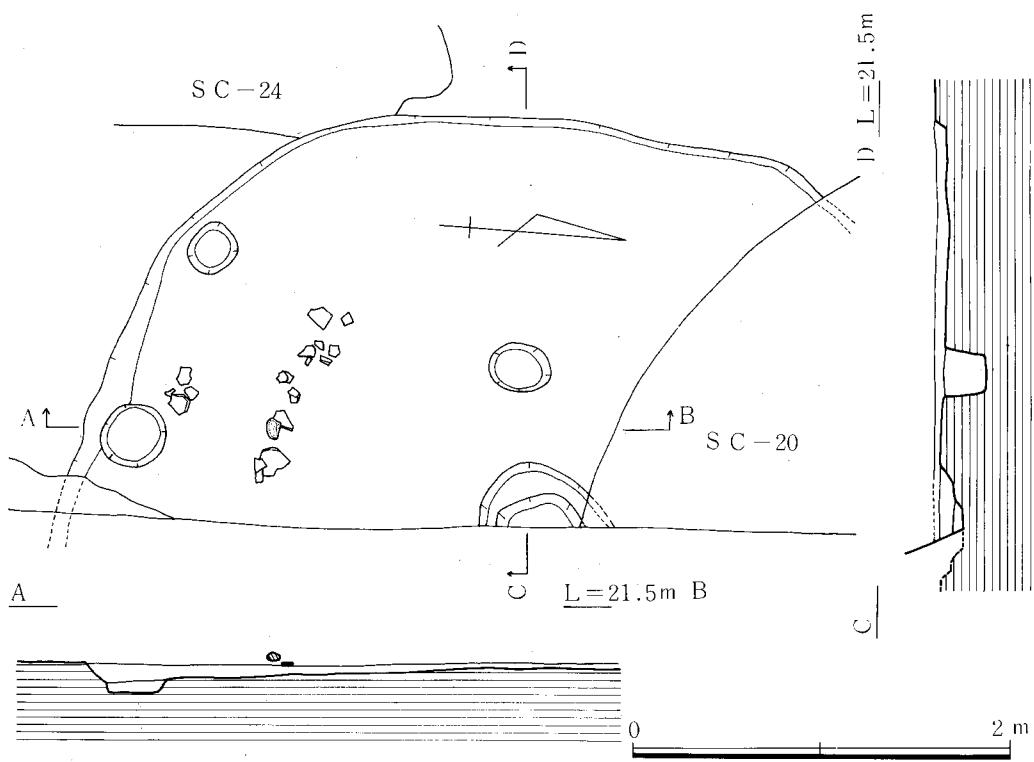


Fig. 4 19号住居跡 (SC-19) 実測図 (1/40)

19号住居跡 (SC-19) Fig. 4 PL. 4

III区北側に検出した直径5m前後を測る円形ないしは隅丸方形プランの竪穴住居跡である。東半分は調査区外に伸びており、更に北半分を20号住居跡(SC-20)によって切られている。住居跡は著しく削平されており、床面までの深さは10cmに満たない。床面中央部に深さ12cmの小土壙を堀り込んでいる。他にピット3個が見られるが、中央部よりの1個を除き浅い。遺物はコンテナ箱にして約1/3ほど出土した。

〈出土遺物〉 Fig. 5

1・2は甕形土器の口縁部片、3は同

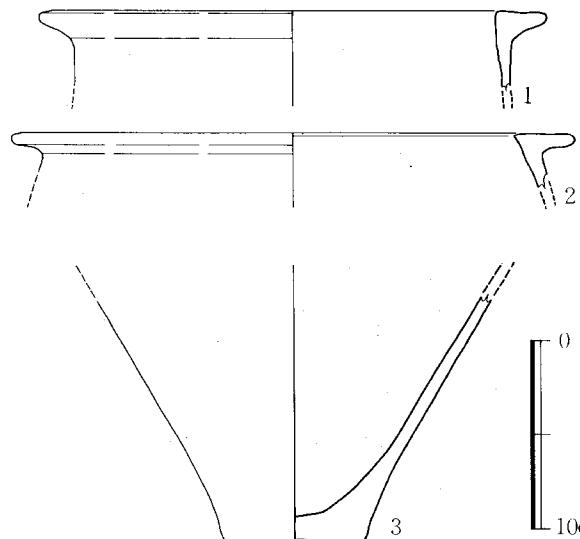


Fig. 5 19号住居跡 (SC-19) 出土遺物実測図 (1/4)

底部片である。1・2とも口縁が逆L字形に屈曲し、口縁上面が水平に伸びる。2は口縁内端が若干突出している。3は安定した平底で、胴部は外反気味に立ち上がる。調整手法は、1～3とも器面が剥落しており不明である。1～3とも胎土には砂粒を含む他、3には雲母粒を含む。焼成は良好である。

20号住居跡 (SC-20) Fig. 6 PL. 4

19号住居跡 (SC-19) の北隣にあり、これを切っている。19号と同様に東半分は調査区の外にある。直径4.4mの円～隅丸方形住居跡で、やはり著しく削平され壁高は5cm前後しかない。住居跡床面には計5個のピットが検出されたが、北側と西側の大きめのピットを除き皆浅く、この二つが主柱穴の一部になるものと思われる。

コンテナ箱にして1箱の弥生土器が出土した。

〈出土遺物〉 Fig. 7

いずれも甕形土器の口縁部片である。口縁は逆L字形に屈曲し、口縁上面が水平である。内

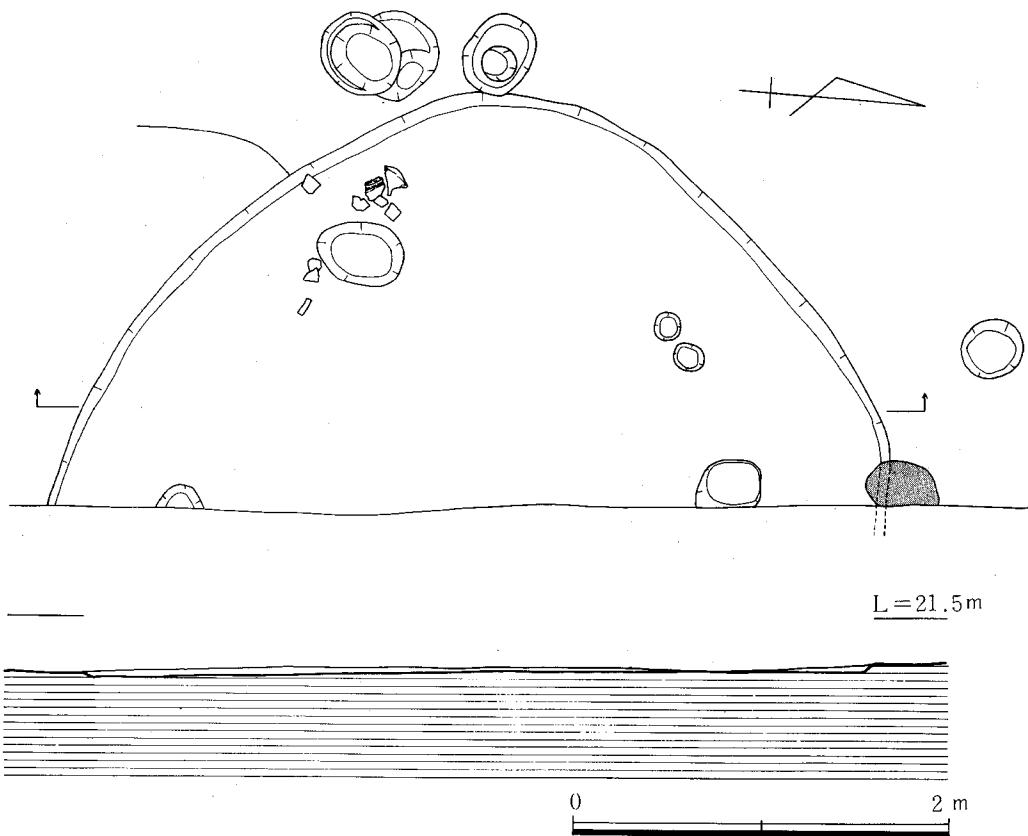


Fig. 6 20号住居跡 (SC-20) 実測図 (1/40)

端が若干張り出す傾向にある。いずれも胴部が張り出さずに、そのまま底部へ移行するものと思われる。1・2・4は口縁直下に断面三角形の凸帯を貼り付けている。1～5とも器面が剥げ落ちており、調整手法は不明である。胎土には砂粒を含む他、2以外のものが雲母粒を、また1・5には赤色の粒子（ベンガラか）を含んでいる。焼成はいずれも良好である。

以上の土器は、弥生時代中期中頃の特徴を持っている。

23号住居跡 (SC-23) Fig.

8 PL. 4

III区北端に検出した住居跡である。調査区にはそのほんの一端がかかったのみだが、竪穴住居跡の一部であろうと判断した。壁は6cmの深さを残している。住居跡床面には3個のピットが見られる。古代の溝に切られており須恵器が混入している。

〈出土遺物〉 Fig. 9

底面が凸レンズ状になる不安定な平底である。器面が著しく磨滅しており、調整は不明である。胎土には砂粒を含んでおり、焼成は不良である。

24号住居跡 (SC-24) Fig. 11 PL. 4

19号住居跡 (SC-19) の南西側に位置する。西側は調査区外に隠れるが、張り出し部を持つ方形プランの竪穴住居跡となろう。南北長3.7m、東西長は現況で1.5m以上を測る。床面までの深さは5cmを測る。床面には張り出し部にピット1個が検出されたのみである。

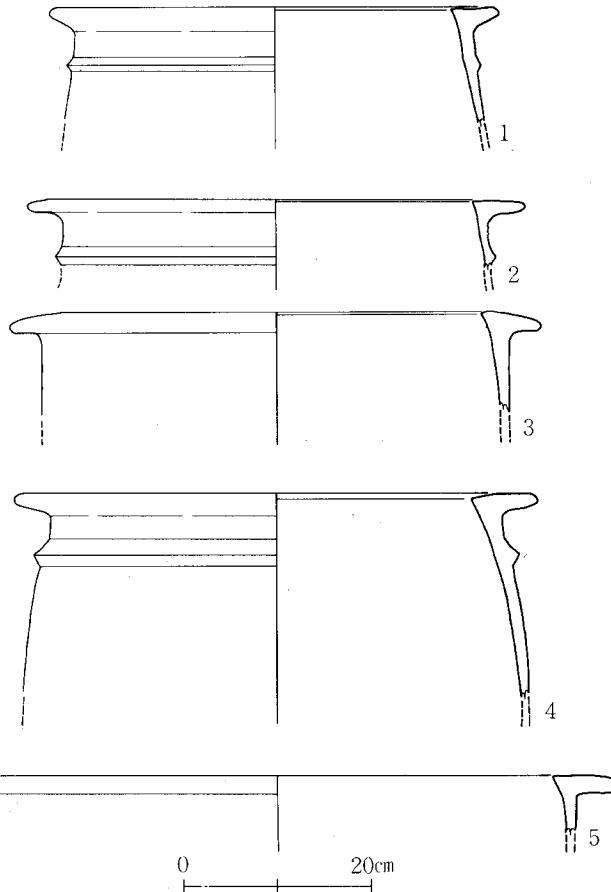


Fig. 7 20号住居跡 (SC-20) 出土遺物実測図 (1/4)

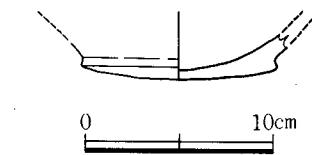
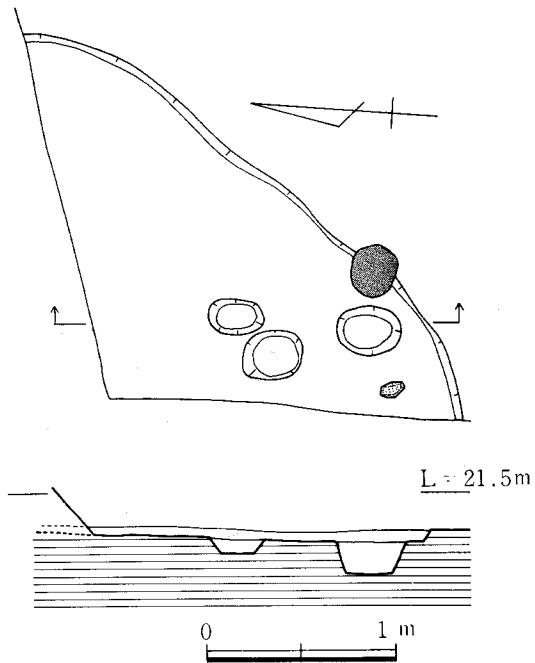


Fig. 9 23号住居跡 (SC-23)
出土遺物実測図 (1/4)

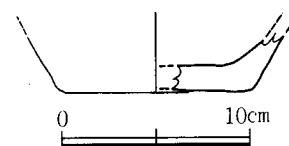
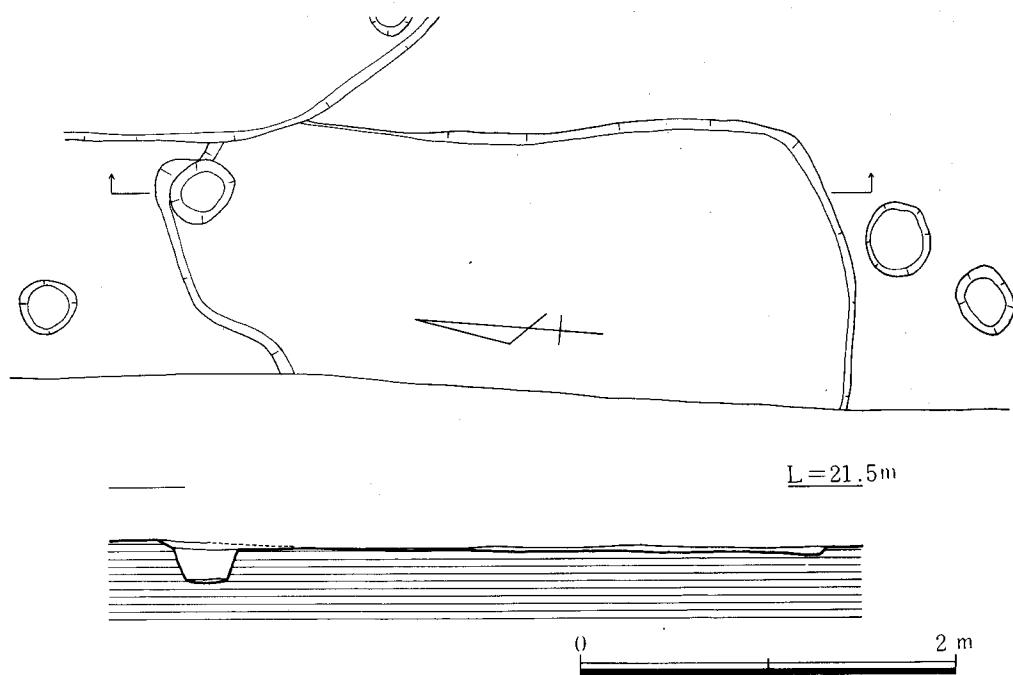


Fig.10 24号住居跡 (SC-24)
出土遺物実測図 (1/4)



〈出土遺物〉 Fig. 10

甕形土器の底部片か。平底。器面が剥げ落ちて調整は不明である。胎土に砂粒・雲母を含み、焼成はやや不良である。

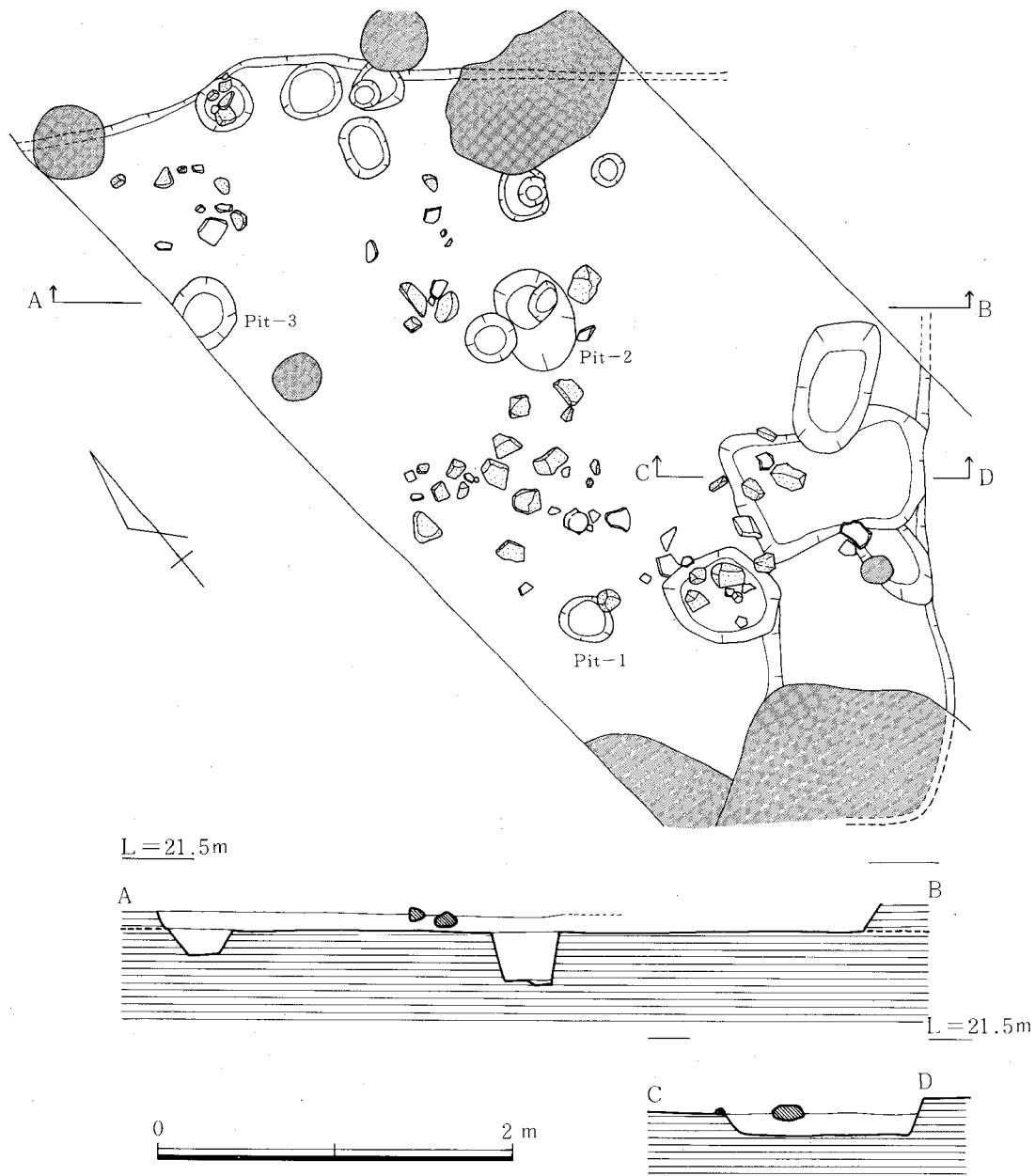


Fig.12 36号住居跡 (SC-36) 実測図 (1/40)

36号住居跡 (SC-36) Fig. 12 PL. 4

II b 区中央部やや南よりに検出した、方形プランを呈する竪穴住居跡である。北東隅と南西側が調査区の外にある。後述する34号土壙 (SK-34) やピットに切られており、コーナー部は確認できない。長辺 5 m 以上、短辺 4 m 以上になり、壁は約 10 cm の深さを残す。住居跡の南東隅に東壁に沿う狭いベッド状の高まりがある。比高差は 7 cm。その北隣りには長方形プランの浅い堀り込みを設けており、床面からの深さ約 10 cm を測る。床面には 13 個のピットがあるが、住居跡中央部の Pit-1 ~ 3 が比較的深く、これを含めた 4 本柱からなる主柱穴が想定できる。住居跡内覆土は黒褐色を呈する自然堆積土で、土器片・礫などが散漫な状態で出土した。出土遺物はコンテナ 1 箱分である。

〈出土遺物〉 Fig. 13 PL. 10

1 ~ 3・5 は底部片である。1・3・5 は平底、2 は凸レンズ状を呈する安定の悪い平底である。5 は内面に刷毛目調整の痕跡が残るが、外面は不明。他のものも器表面が剥落しており、調整は不明である。胎土にはとともに砂粒・石英を含む他、1・2・5 に雲母を含む。焼成は 1 ~ 3 が不良、5 は良好である。

4 は高壠または鉢形土器であろう。体部は内弯して開き、口縁部は緩く屈曲して外反する。内面は刷毛目の後、ナデ調整する。

6 は砥石片である。硬質砂岩製の大型品の一部で、二面に使用痕がある。

この他に、袋状口縁壺の口縁部片、高壠の壠部片などがあり、弥生時代中期中頃～後期中頃のものが混在して出土している。

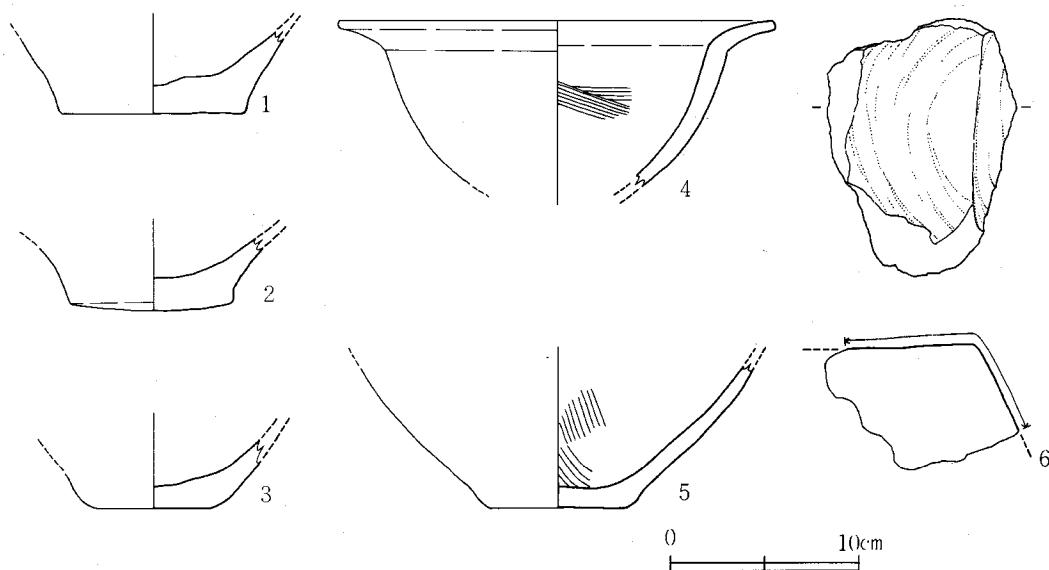


Fig. 13 36号住居跡 (SC-36) 出土遺物実測図 (1/4)

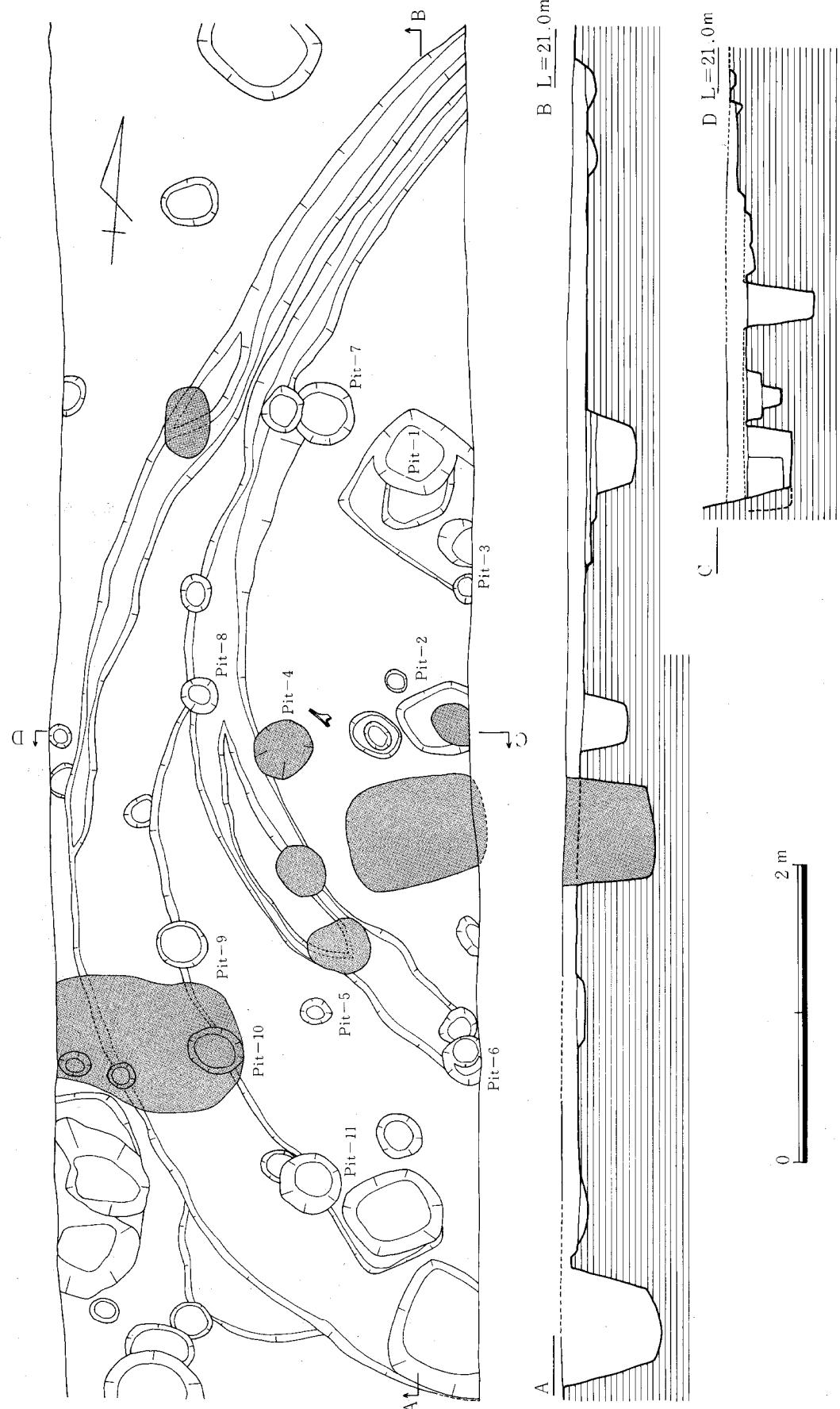


Fig.14 53号住居跡 (SC-53) 実測図 (1/40)

53号住居跡 (SC-53) Fig. 14

II b 区のほぼ中央部で検出した円～隅丸方形プランの住居跡である。調査区の東側へ伸びており、調査区内には全体の約1/3がかかっている。この住居跡には、建て替えを行って住居跡の床面積を拡張した跡が見られる。すなわち、径7.5mの小型の住居跡の廃絶後、これに薄く貼床を施し、南側へ拡張して径10mの大型の住居跡を造り出している。

小型の住居跡の床面には、壁に沿って設けられた壁溝が巡っており、南側ではその一部が二重になる。これもまた、小規模な住居の拡張を示すものであろう。この住居跡の主柱穴としては、Pit-1・2などが考えられるが、これらは床面からの深さ33cm前後を測る。

この小型住居跡を廃し、これを埋め立て更に南方へ大きく拡張することによって、大型の住居跡をつくっている。大型住居跡の床面には、壁際を巡る壁溝と、ベッド状の高まりが見られる。壁溝は住居跡の北半部分を弧状に巡っているが、南半部には及ばない。逆にベッド状の高まりは南半部にのみ設けており、その比高差は3～4cmである。住居跡全体に大小のピットが多く見られるが、主柱穴と思われるものはPit-3～6で、これらの床面からの深さは42～53cmを測る。また、これらの外を巡ってPit-7～11のピットが弧状に並んでおり、これらは補助的な役割を持つ柱穴と見られる。深さは25cm前後である。

〈出土遺物〉 Fig. 16-1・4・8 PL. 10

1は甕形土器の口縁部片である。逆L字形に屈曲して開く。胎土に砂粒を含み、焼成は良好である。4は底部片である。底面がやや窪む。焼成は良好で、胎土に砂粒を含む。8は玄武岩の自然礫を用いた叩石である。下端部のみに敲打痕が見られる。基部を欠いている。

56号住居跡 (SC-56) Fig. 15 PL. 4

II b 区の北半部で検出した円形プランの住居跡である。西側半分と東端部が調査区外にある。直径約6.6mを測り、壁は10cm強の深さを残している。住居跡の南壁ぎわに比高差約10cmのベッド状の高まりを設けている。床面には大小のピットがあるが、主柱穴としてはPit-1～6が考えられる。柱穴の深さは20.5～47.5cmとばらついている。この他、不整形の細長い土壙3基を床面で検出した。

〈出土遺物〉 Fig. 16-2・3・5～7 PL. 7・10

2・3は甕形土器の口縁部片である。「く」字形に屈曲して開くが稜は無い。器表面が剥落し、調整は不明。2は砂粒、3は砂粒と雲母を胎土に含み、焼成はともに良好である。5は土製品である。高壺もしくは器台を模したものと思われる。ナデ調整。胎土に砂粒を含み、焼成は良好。6は器台である。上下端を失っている。器面が剥落し、調整方法は不明。胎土には砂粒を多量に含み、焼成は良好。7は砥石片である。三面を研磨した痕が残る。粘板岩製。

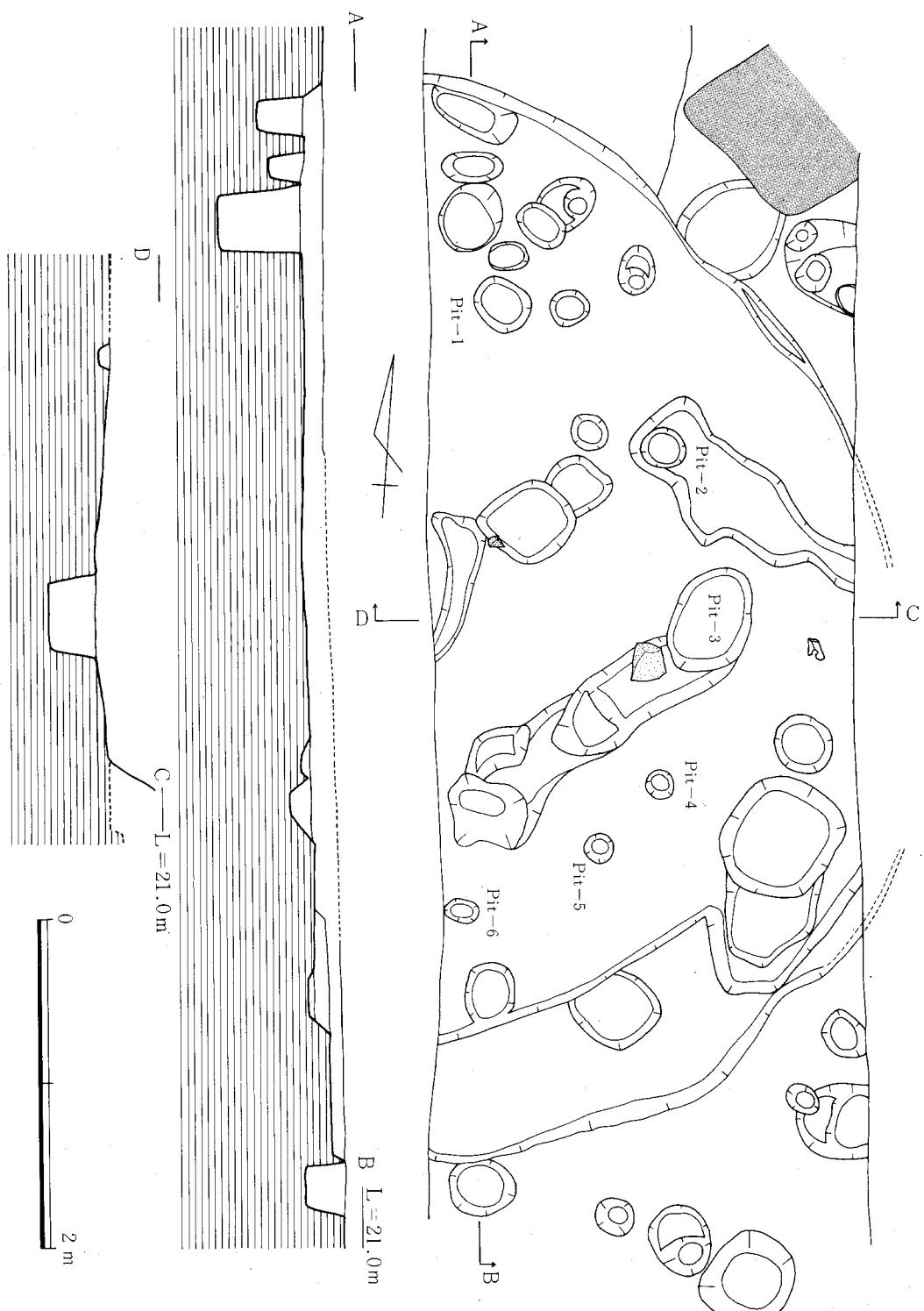


Fig.15 56号住居跡 (SC-56) 実測図 (1/40)

59号住居跡 (SC-59) Fig. 17

56号住居跡の北隣で検出した。調査区の壁際にあり、56号に大きく切られているため全形をうかがい難い。隅丸方形または不整円形プランを呈するものであろう。この住居跡の床面で検出したピットのほか、56号北端で検出したピット群が、この住居跡に伴う柱穴群と考えられる。遺物は、弥生土器片が少量出土した。細片のため図化しえない。

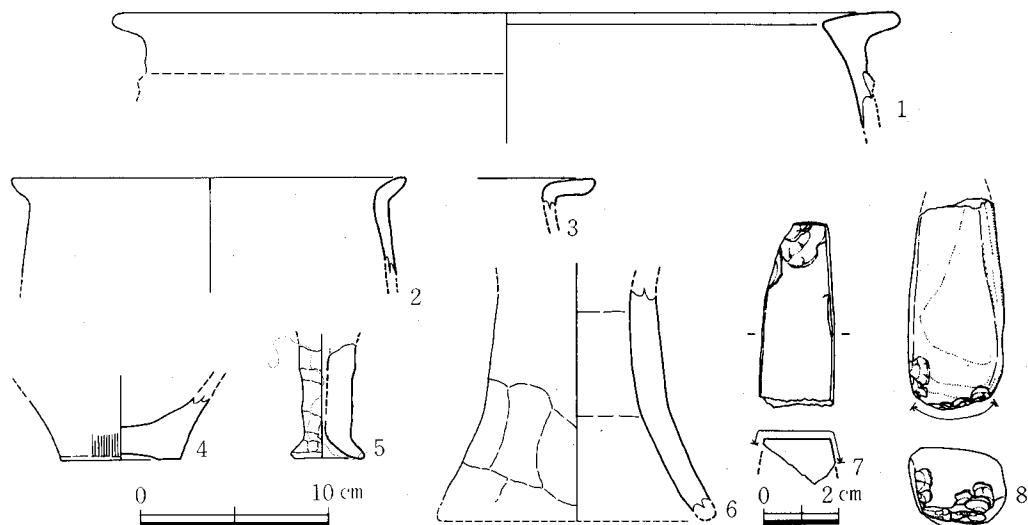


Fig. 16 53・56号住居跡 (SC-53・56) 出土遺物実測図 (7のみ1/2、他は1/4)

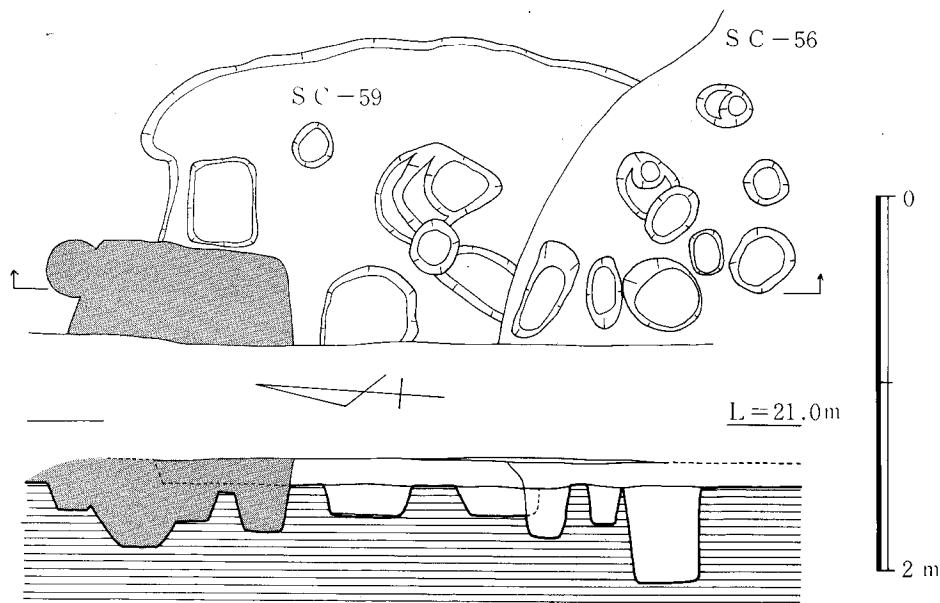
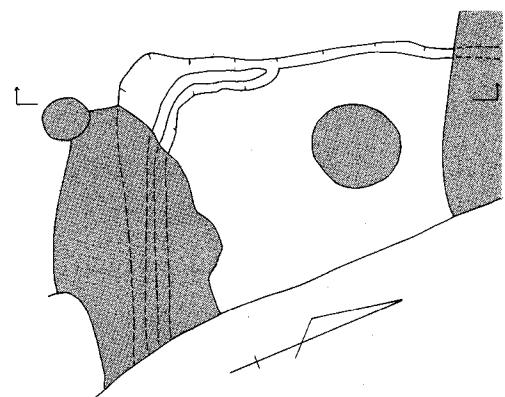


Fig. 17 59号住居跡 (SC-59) 実測図 (1/40)

65号住居跡 (SC-65) Fig. 18

II b 区北端で検出した。その大部分は調査区の外にあり、後述する68号住居跡 (SC-68) やピット群に切られているが、方形住居跡のコーナーにあたる部分と思われる。壁は10cmの深さを残しており、床面には壁溝の一部が見られる。

弥生土器片が少量出土した。



68号住居跡 (SC-68) Fig. 19

II b 区北端にその一部がかかった。張り出しを持つ方形プランの竪穴住居跡であろう。壁は 6 cm の深さを残す。床面には大小のピットがあり、しかも切り合っている。

〈出土遺物〉 Fig. 22-1

1は「く」字形に屈曲する甕形土器の口縁部片

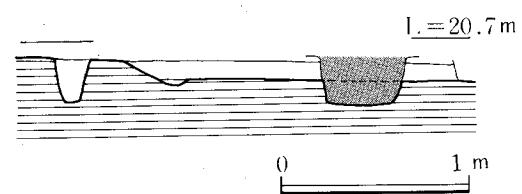


Fig. 18 65号住居跡 (SC-65) 実測図 (1/40)

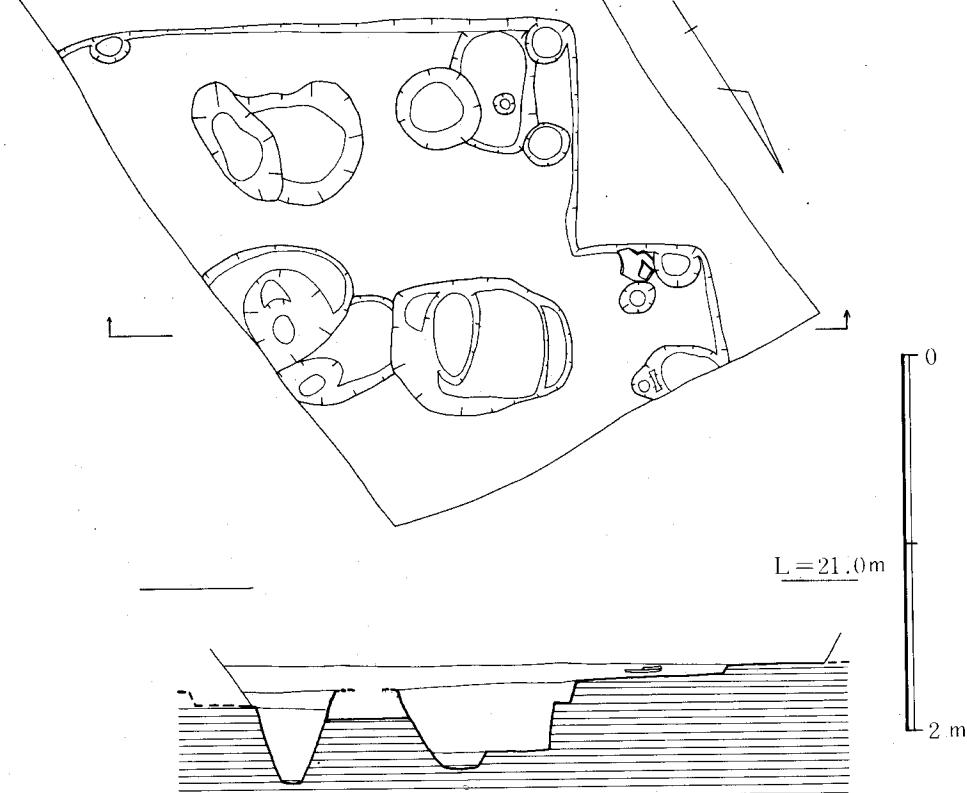


Fig. 19 68号住居跡 (SC-68) 実測図 (1/40)

である。器表面が剥落し、調整は不明。胎土に砂粒・雲母を含み、焼成は良好である。

79号住居跡 (SC-79) Fig. 20

I b 区北半部で検出した長辺4.0m、短辺3.2mの方形プランの住居跡である。壁は10cmの深

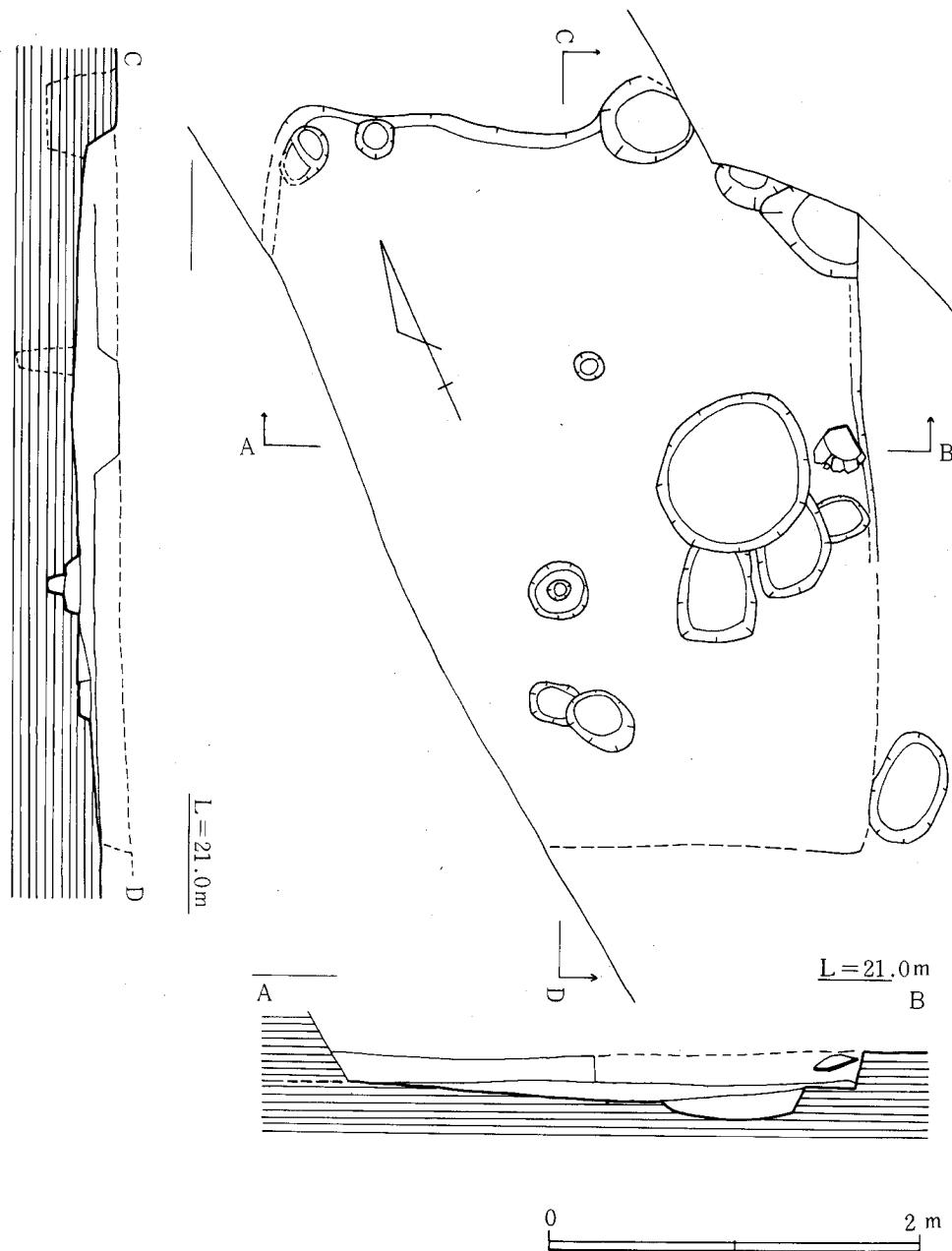


Fig. 20 79号住居跡 (SC-79) 実測図 (1/40)

さを残すが、住居跡の南側壁は調査時に誤ってとばした。床面には径42~16cmの大小のピットが切り合ひながら散在しているが、いずれも浅く、主柱穴とするには疑問が残る。

〈出土遺物〉 Fig. 22-2

2は甕形土器の口縁部片である。「く」字形に屈曲し、内面には稜を有する。ヨコナデ調整。胎土に砂粒を含み、焼成は良好である。

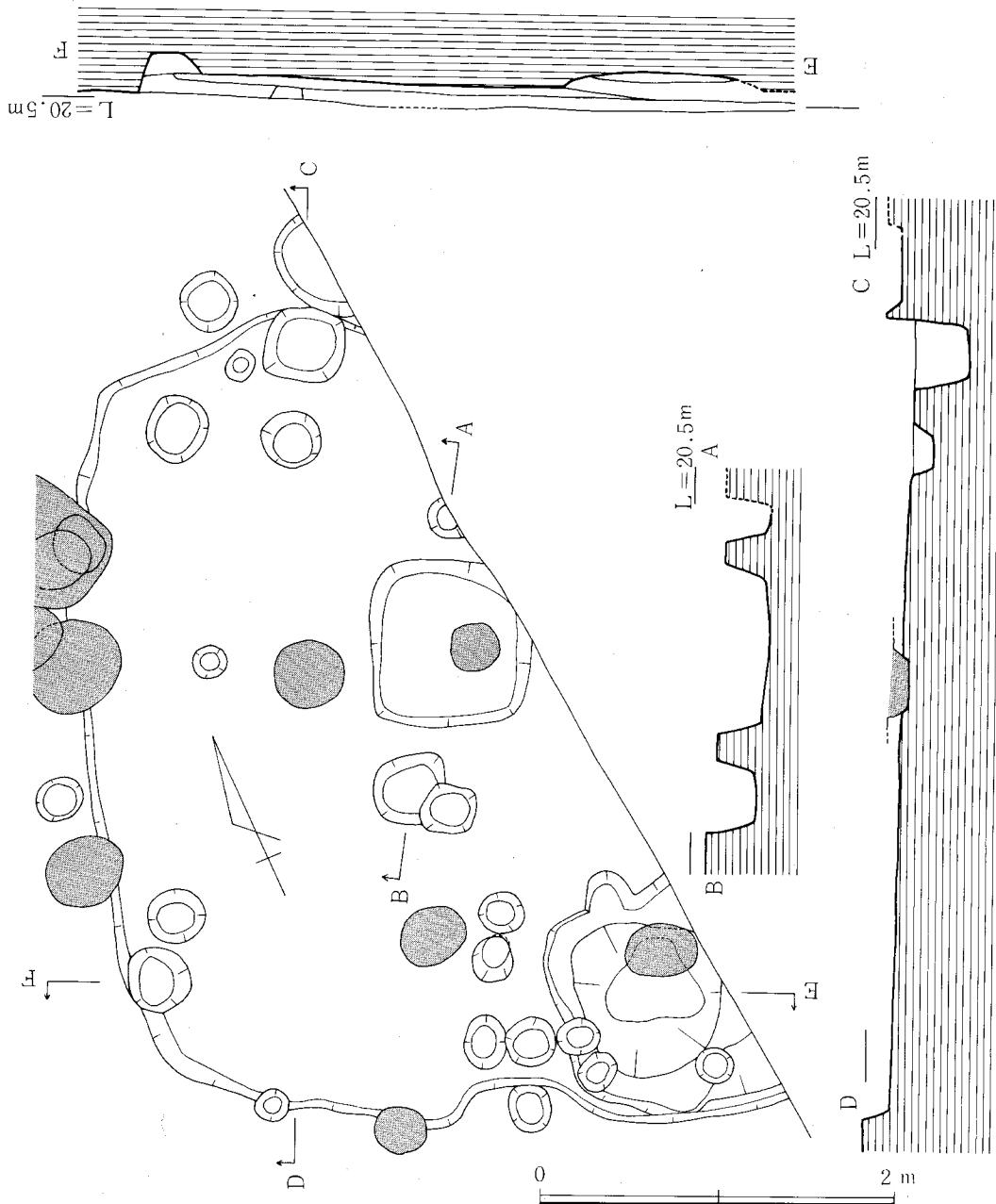


Fig. 21 140号住居跡 (SC-140) 実測図 (1/40)

140号住居跡 (SC-140) Fig. 21 PL. 5

VII区中央部付近に位置する。住居跡の東側が調査区外に伸びるが、ほぼ全容を知ることができる。住居跡は一辺が約4.6mの隅丸方形のプランをなし、壁は約15cmの深さを残す。住居跡には汚れた地山土で床を貼り、中央部と東南隅には土壙を掘り込んでいる。中央部の土壙は一辺が約0.95mの方形プランを呈し、深さ約25cmを測る。覆土は人為的な埋土で、微量の木炭を含んでいる。焼土はない。東南隅のそれは径1.3m前後の不整円形を呈し皿状に浅く、この周囲に浅い小ピットを多數掘っている。住居跡の主柱穴としては、中央の土壙を挟んで対峙するやや浅めのピット2個が想定される。

〈出土遺物〉 Fig. 22-3

3は短頸の壺形土器の口縁部片である。「く」字形に屈曲して開く。外面に化粧土を施し、内外面を丁寧にナデ調整する。胎土は砂粒が少なく精良で、焼成は良好である。

141号住居跡 (SC-141) Fig. 23 PL. 5

VII区中央部に位置する。後述する142号住居跡を切る竪穴住居跡である。全体の西側約2/3が調査区外にある。プランは基本的には方形であるが、住居跡の北辺が大きく外へ張り出す特異な形をとる。南北5.12m、東西は3m以上を測り、壁は10cmを残している。住居跡床面は140号同様、汚れた地山土でならしている。床面には不整形の土壙や大小のピットがある。主柱穴は明らかでないが、柱痕跡を持つ中央部のものがその一部であろう。また住居跡の外には、住居跡の形に沿うように深さ13cm前後の小ピットが並んでいる。上屋を支える施設のひとつと考えられよう。

遺物としては、弥生土器がコンテナに1/2箱出土した。また、住居跡北端部からは花崗岩礫がまとまって出土した。礫は加熱されて変色したものや割れたものが多く見られる。

〈出土遺物〉 Fig. 24

1・2は壺形土器の口縁部片である。ともに口縁部が逆L字形に屈曲し、水平にのびる。1は外面に若干刷毛目が残っている他は器面が剥げ落ちている。胎土には砂粒・石英・長石を含み、焼成は良好である。2は胴部が張らずにそのまま底部へ移行する。調整は不明。胎土には砂粒・雲母を含み、焼成は良好。3は壺形土器の底部片で、底面がやや窪む。外面はヘラナデだが他は不明。胎土には砂粒・雲母を含み、焼成良好。4は壺形土器の底部片で、やはり底面

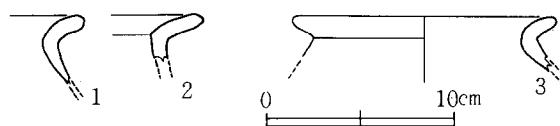


Fig. 22 68・79・140号住居跡 (SC-68・79・140)
出土遺物実測図 (1/4)

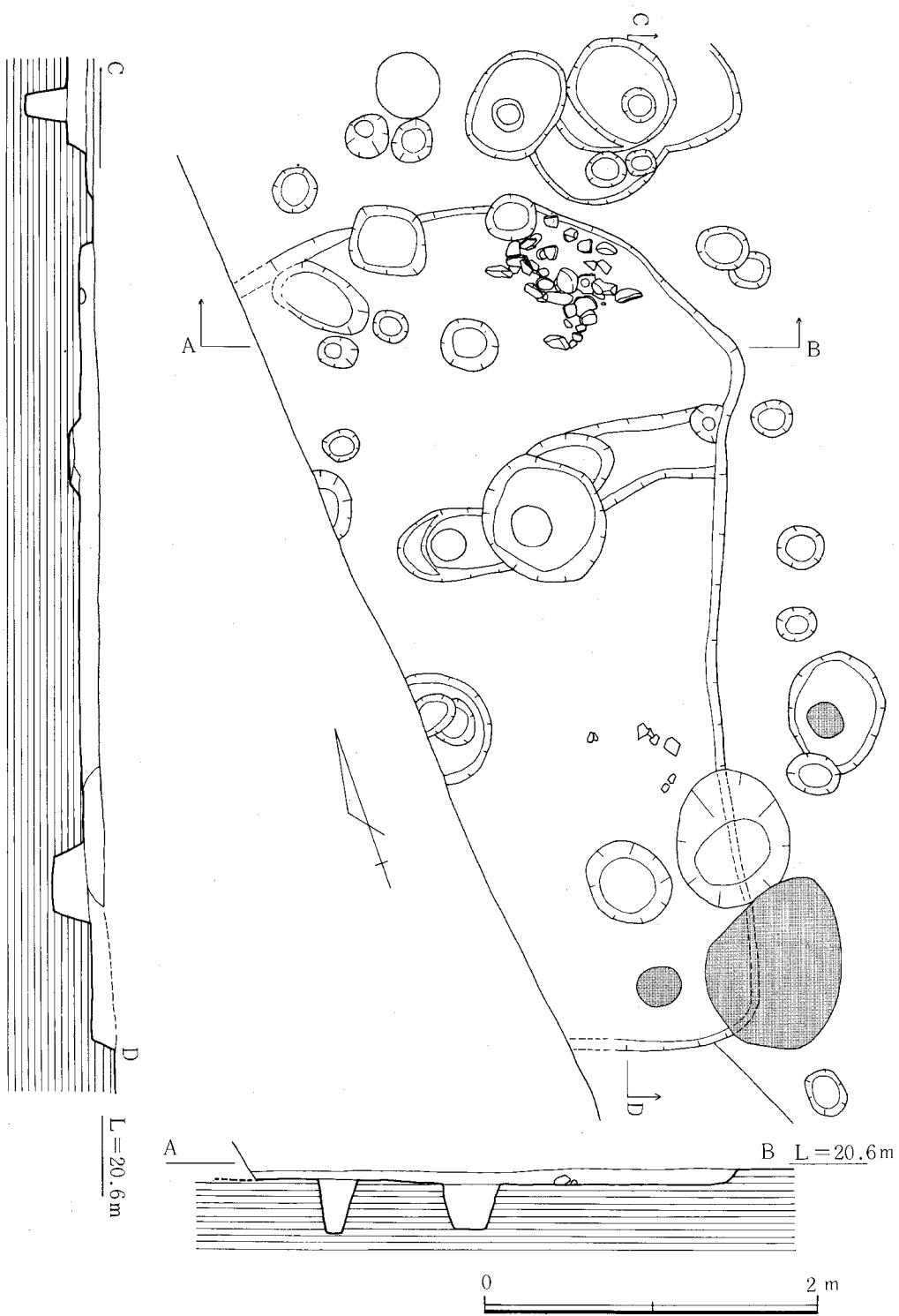


Fig.23 141号住居跡 (SC-141) 実測図 (1/40)

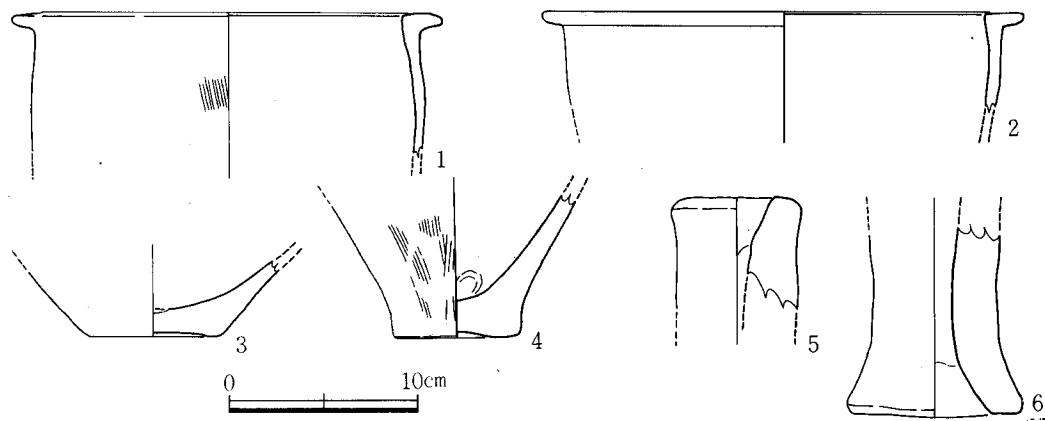


Fig. 24 141号住居跡 (SC-141) 出土遺物実測図 (1/4)

が窪む。外面は縦方向の刷毛目を施し、他はナデ調整である。内底面に指頭痕が残る。5・6は器台である。5は下半部を、6は上半部をそれぞれ失っている。5は内面にヘラ削りを施す。6は内面ナデ調整。5・6とも、胎土には大きめの砂粒を少量含むものの精良であり、焼成は良好である。

以上の土器は、弥生時代中期中頃の特徴を示している。

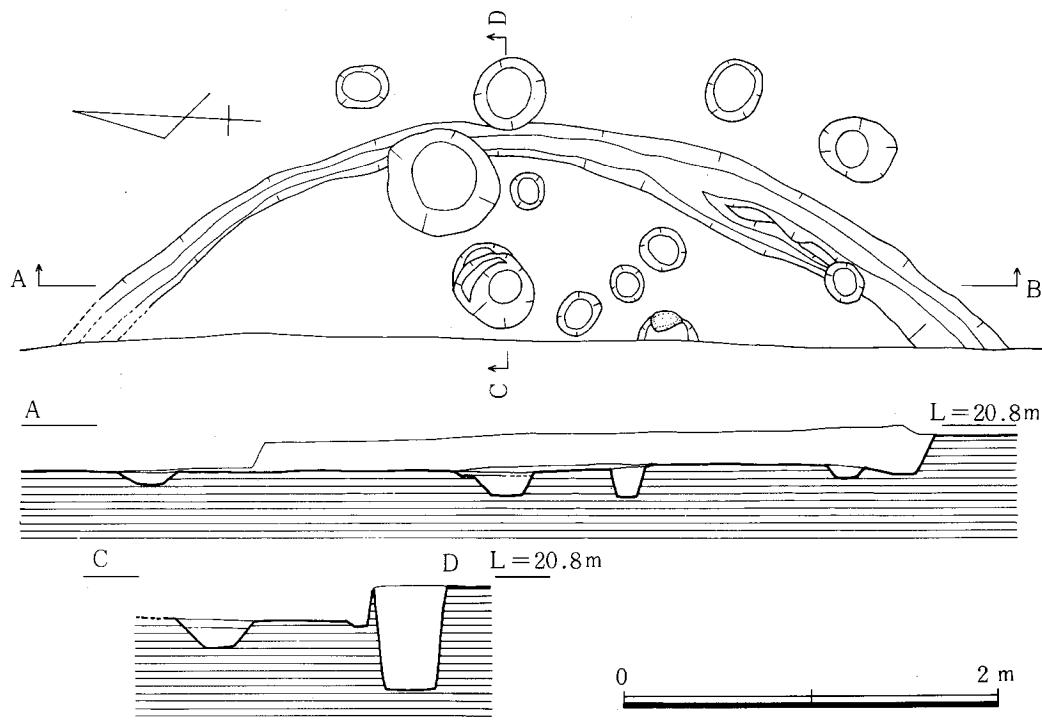


Fig. 25 142号住居跡 (SC-142) 実測図 (1/40)

142号住居跡 (SC-142) Fig. 25 PL. 5

141号の南隣に位置し、141号に北端を切られている。確認できたのはほんの一部分であり、住居跡の中心部分は西方の調査区外にある。直径6.6mの円形住居跡で、壁は20cmの深さを残している。住居跡床面を汚れた地山土で均している。壁に沿って浅い壁溝が巡るが、南側では一部二重になっている。住居跡内及びその外にピットが掘られているが、主柱穴は明らかにし難い。

〈出土遺物〉 Fig. 26 PL. 10

小型の偏平片刃石斧である。長5.0cm、幅3.5cm、厚さ1.1cmを測る。成形は打ち欠きと研磨による。頁岩製。完形品。

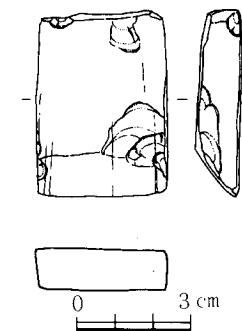


Fig. 26 142号住居跡 (SC-142)
出土遺物実測図 (1/2)

144号住居跡 (SC-144) Fig. 27

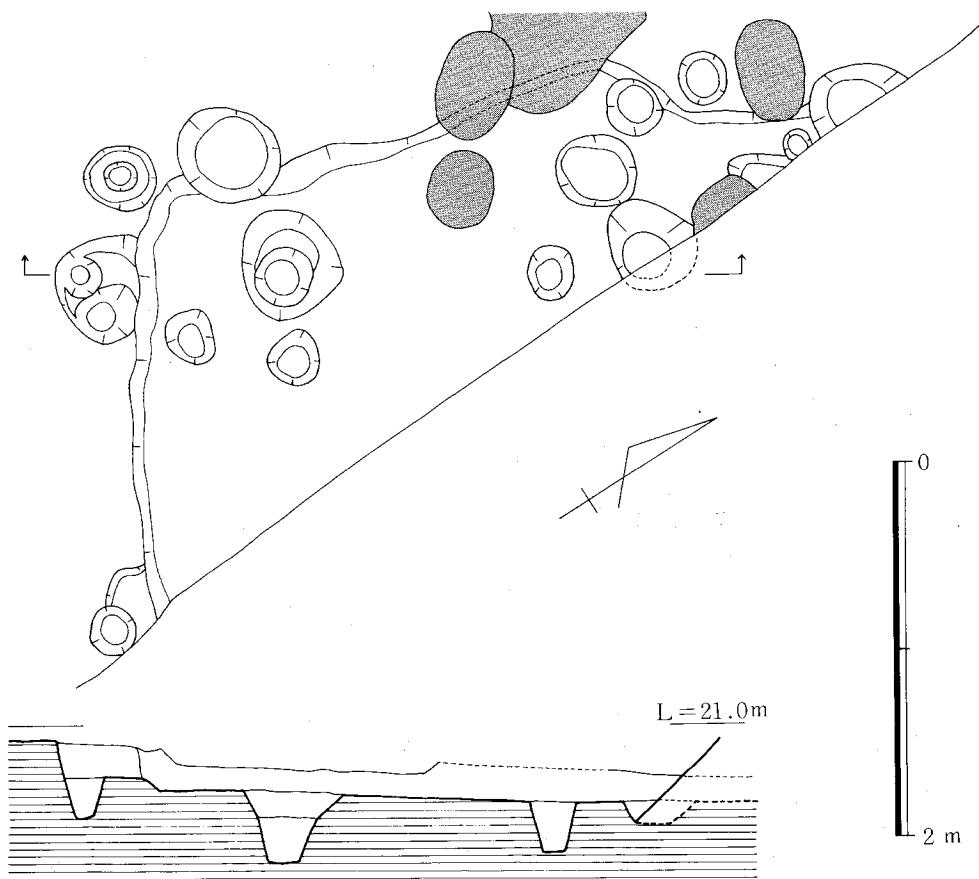


Fig. 27 144号住居跡 (SC-144) 実測図 (1/40)

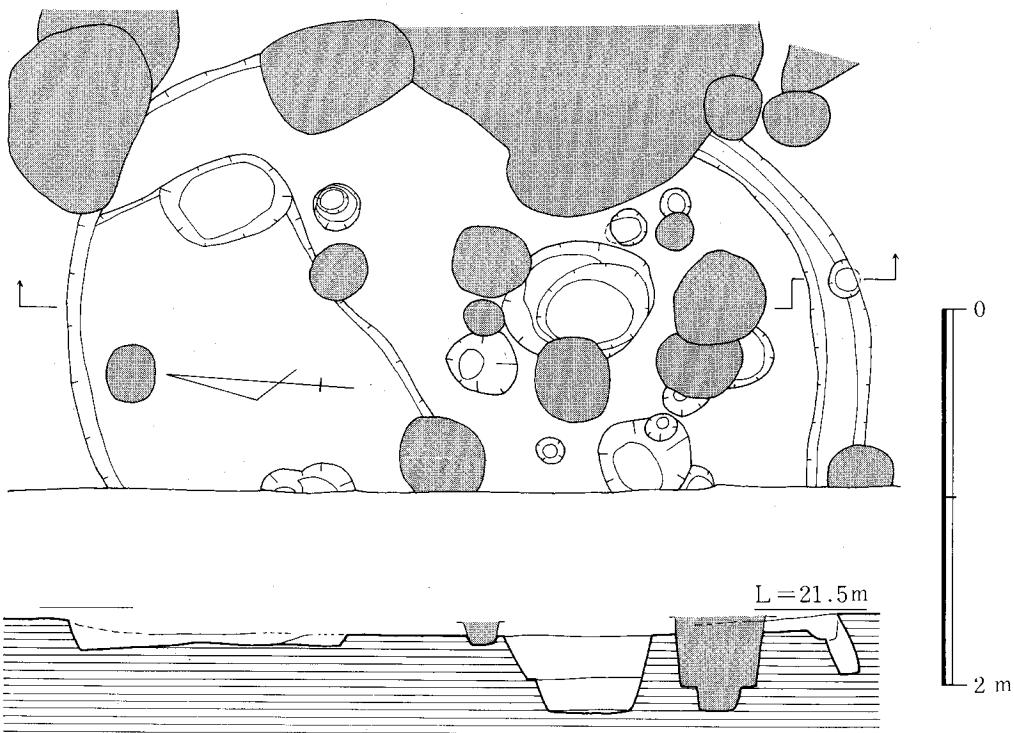


Fig. 28 155号住居跡 (SC-155) 実測図 (1/40)

142号住居跡 (SC-142) の東隣に位置する。調査区には住居跡のコーナー部がかかった。また後述する145号土壙 (SK-145) に切られている。方形プランの竪穴住居跡であろう。
弥生土器の小片が少量出土した。

155号住居跡 (SC-155) Fig. 28 PL. 5

VIII区の南端部付近で検出した。西側は調査区外におよび、東辺は土壙・ピットなどによって切られている。直径4.3mを測る円形プランの竪穴住居跡である。壁は深さ10cm前後を残している。住居跡の南壁に沿って壁溝を巡らせるが北辺部には及ばない。住居跡の北半部には浅い不整方形の掘り込みがある。床面全体に大小のピットが散在するが、中央部にある二つのピットを除いていずれも浅い。また南側の壁溝内には住居跡の外方へ向けて斜めに掘り込まれたピットがある。

〈出土遺物〉 Fig. 29

甕形土器である。口縁は逆L字形に屈曲して上向きに開く。調整は不明。胎土に砂粒・雲母を含み、焼成は良好である。

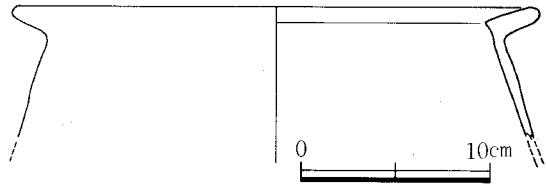
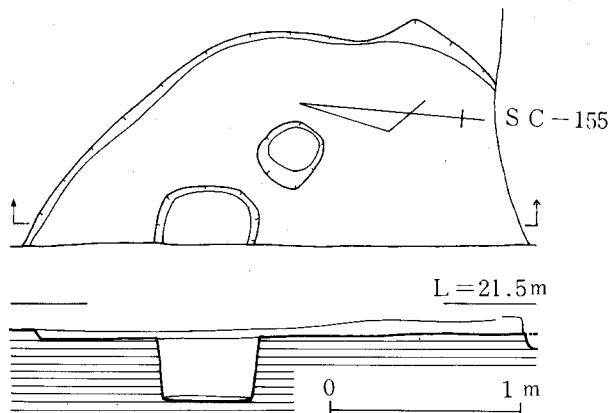


Fig.29 155号住居跡 (SC-155)
出土遺物実測図 (1/4)

158号住居跡 (SC-158) Fig. 30

155号住居跡 (SC-155) の北隣に位置し、155号に先行する。中心部は西側の調査区外にある。円形プランの住居跡と思われるが、直径はわからない。壁は5cm弱の深さである。床面にはピット2個を検出した。

弥生土器が少量出土したが、細片のため図化していない。



169号住居跡 (SC-169) Fig. 32 PL. 5

VIII区南半部に位置する方形プランの竪穴住居跡である。住居跡の北東隅が調査区の外にある。短辺3.0m、長辺4.3mを測り、壁は15cm前後の深さである。床面は10cm前後の厚さに土を貼っている。住居跡の西半部には、長径1.2m、短径0.6mの長円形の土壙を掘り込んでいる。ピットは住居跡の西半部に集中しているが、壁に沿うようにして並んでいるPit-1～5などが主柱穴をなすものと思われる。

<出土遺物> Fig. 31

甕形土器の底部片である。底径7.5cmを測る。底面がやや窪んでいる。外面は縦方向の刷毛目、他はナデ調整である。胎土には細砂粒を含み、焼成は良好である。

170号住居跡 (SC-170) Fig. 33 PL. 5

169号の北隣に位置し、169号に先行する竪穴住居跡である。その大部分は調査区外にあるため、ほんの一部を調査したに過ぎないが、おそらく隅丸方形プランをなす大型の住居跡と思われる。北端は土壙によって切られており、壁の高さは約30cmである。床面には、粘性の強い土を用いて、10cm弱程度の厚さの貼床を設けている。この貼床の下に、直径約20cm程の範囲で焼土が見られた。

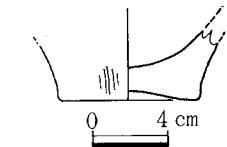


Fig. 31 169号住居跡
(SC-169)
出土遺物実測図 (1/4)

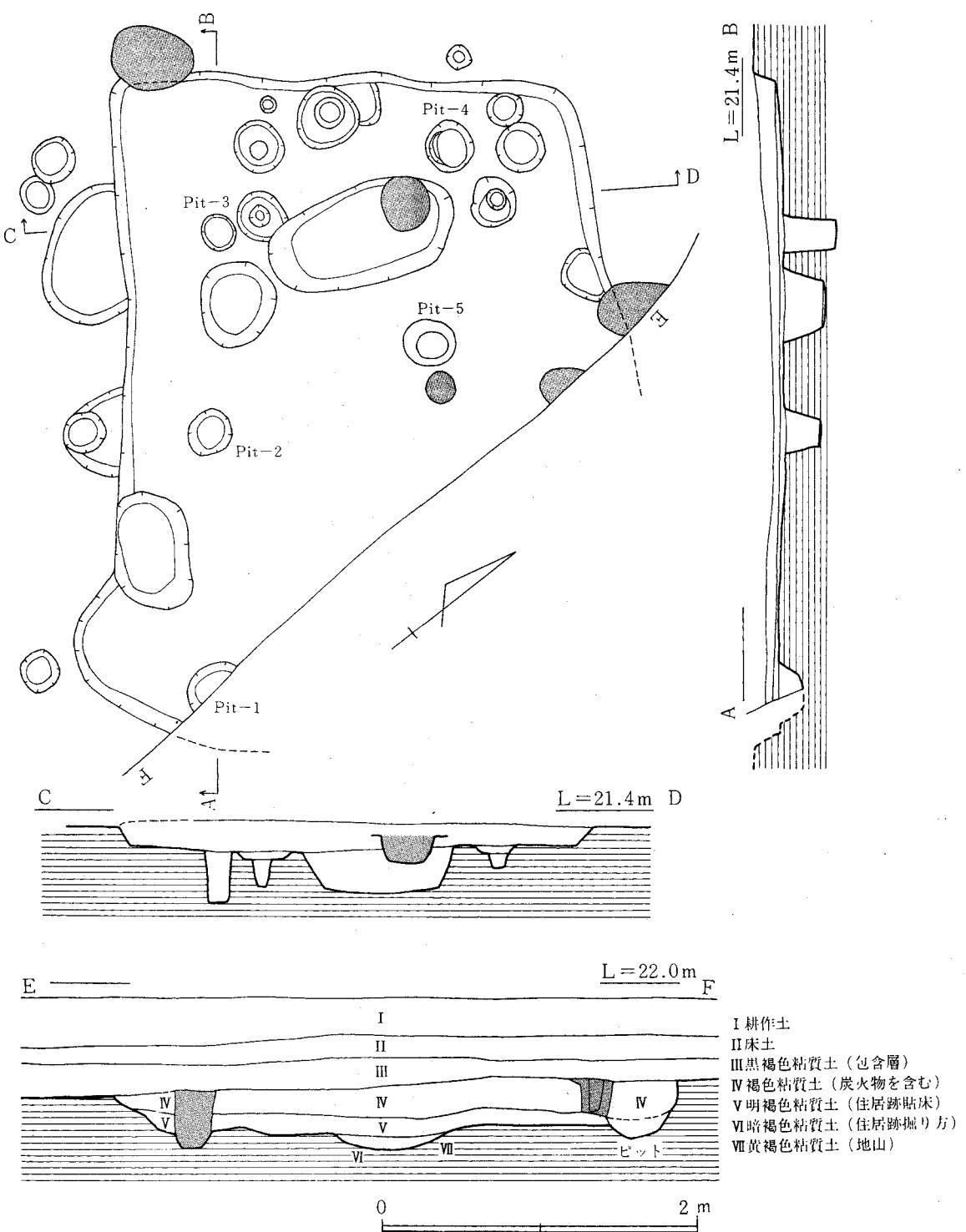


Fig. 32 169号住居跡 (SC-169) 実測図及び東壁土層断面実測図 (1/40)

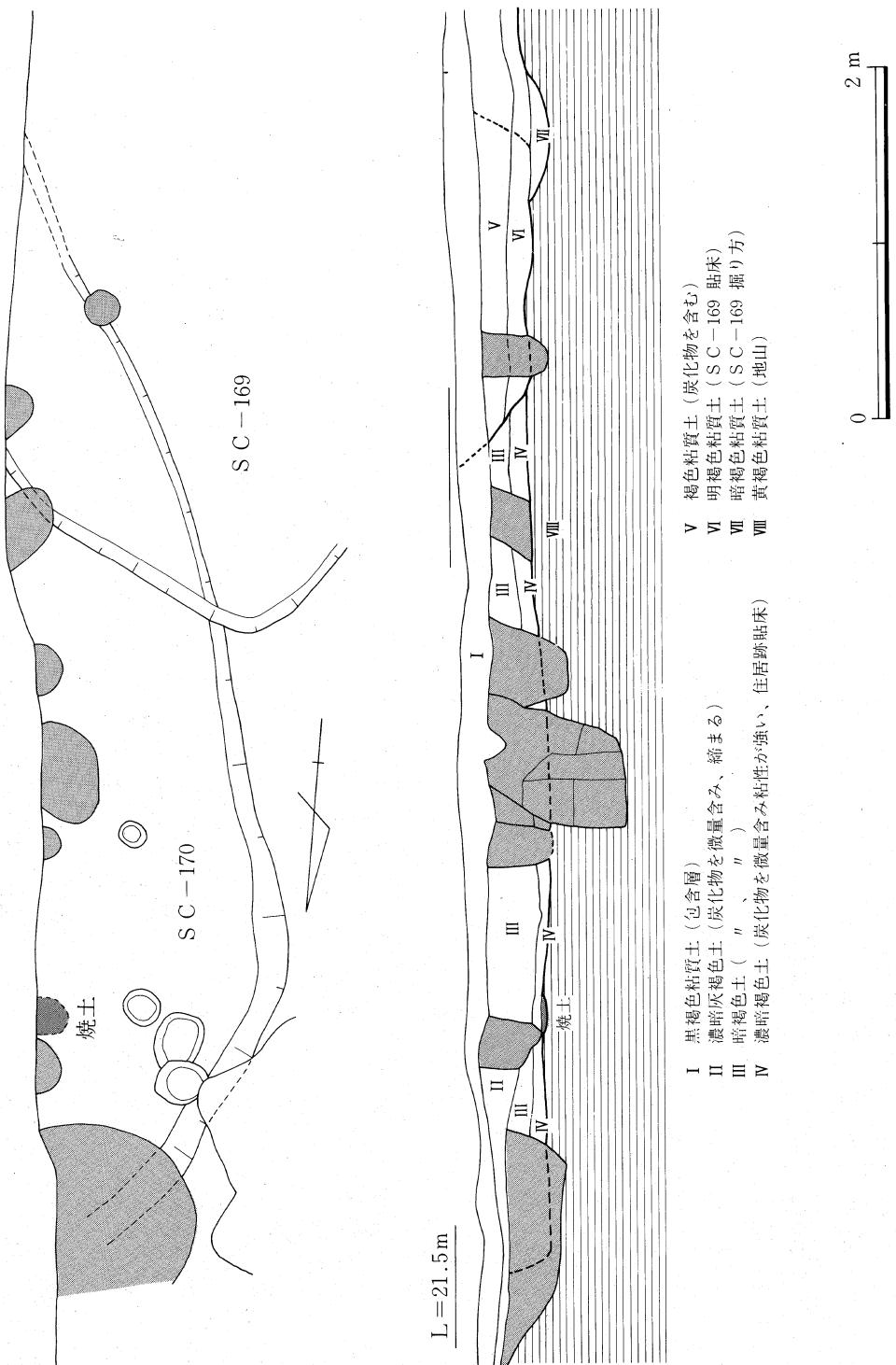


Fig.33 170号住居跡 (SC-170) 実測図及び東壁土層断面実測図 (1/40)

174号住居跡 (SC-174) Fig. 34

VIII区中央部で検出した、方形プランの竪穴住居跡である。調査区には住居跡の西南部分がかかっている。西側壁で一边の長さ約3.0mを測り、比較的小型の住居跡である。壁は20cm強の深さを残しており、遺存状態は良好である。床面には大小7個のピットが検出された。北端の大型ピットの覆土中には、花崗岩の自然礫が多数含まれていた。

遺物はコンテナにして約1/4箱ある。弥生時代中期中頃の土器片等もあるが、細片のため図化していない。

176号住居跡 (SC-176) Fig. 35 PL. 5

174号住居跡 (SC-174) の北隣に位置し、174号に先行する住居跡である。東半部分は調査区外に隠れており、南側は大きく174号に切られている。住居跡の平面形は、円形または円形に近い隅丸方形であろう。円形プランをとれば、その直径は7.2m前後であろう。壁は10cm弱の深さを残している。住居跡は小礫を多量に混じえる粘質土層に掘り込まれており、貼床はない。住居跡の西壁に沿って浅い壁溝が巡っているが、北壁までは至らない。また西壁ぎわは一段高く造り出されているが、これがベッド状の遺構になるのか、それとも住居跡の拡張の跡を示すも

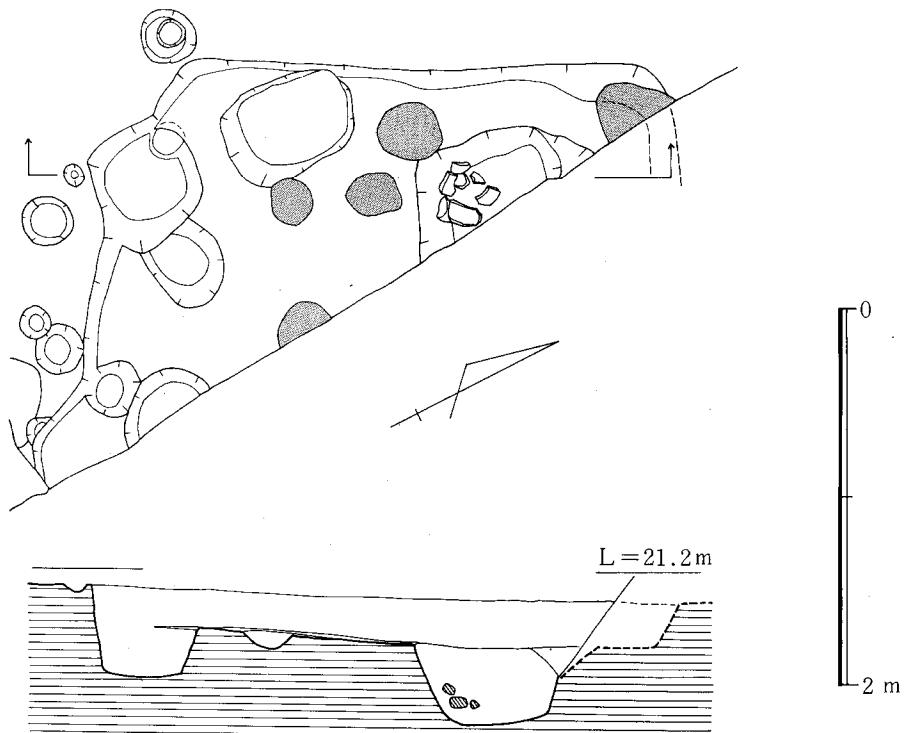


Fig. 34 174号住居跡 (SC-174) 実測図 (1/40)

のなのは明確にしえなかつた。床面にある5個のピットのうち、東壁ぎわの二段に掘りこまれたピットは床面からの深さが50cmあり、この住居跡の主柱穴の一部と考えられる。

83号住居跡 (SC-83) Fig. 36

III区南側の河川の岸に位置している。この付近は後世の地下げが著しい場所であり、この住居跡は床面まで削平されている。調査終了後に図面上で復元したため、最後に説明を加えることにした。住居跡の北端を限る壁溝と、中央に位置すると見られる長円形の大型ピットから、直径が5.2mの円形住居跡を想定しうる。住居跡の床面に相当する部分を見ると、前述の壁溝と対峙する位置にも小溝がある。従って壁溝は北西壁に沿って住居跡を半周する可能性もある。中央部の大型ピットは長径約1.2mを測る長円形で、深さは30cm。東隅にも不整円形の浅い窪みがある。住居跡内には多数のピットが見られるが、そのなかでもPit-71・72・76・137・138などが比較的深い(深さ23~49cm)。これらが中央大型ピットを挟んで対峙し、主柱穴となるのであろう。また北端を巡る壁溝の内外には多数の小ピットが掘られているが、これらは屋根の垂木を受けるためのものであろうか。

遺物は壁溝、ピットから土器の細片が出土しているのみである。

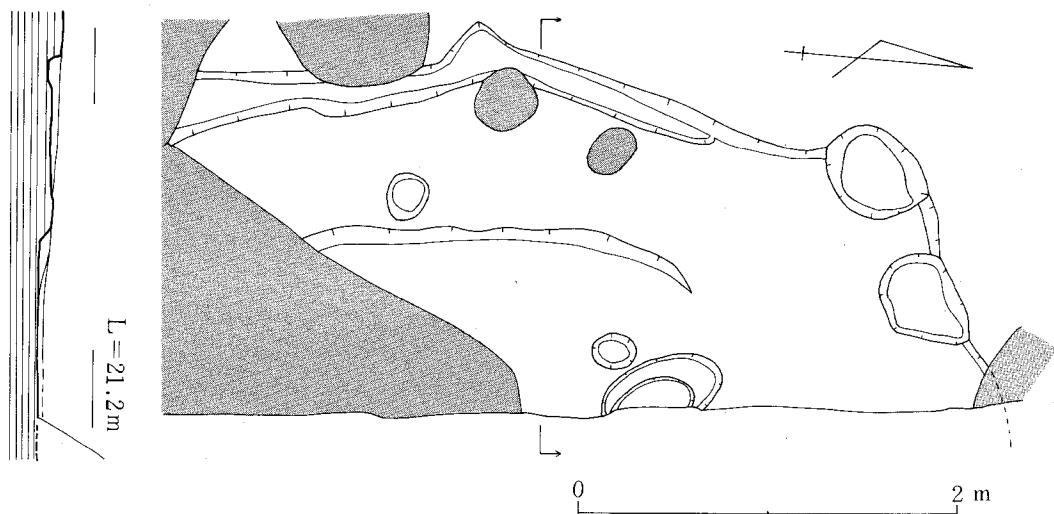


Fig. 35 176号住居跡 (SC-176) 実測図 (1/40)

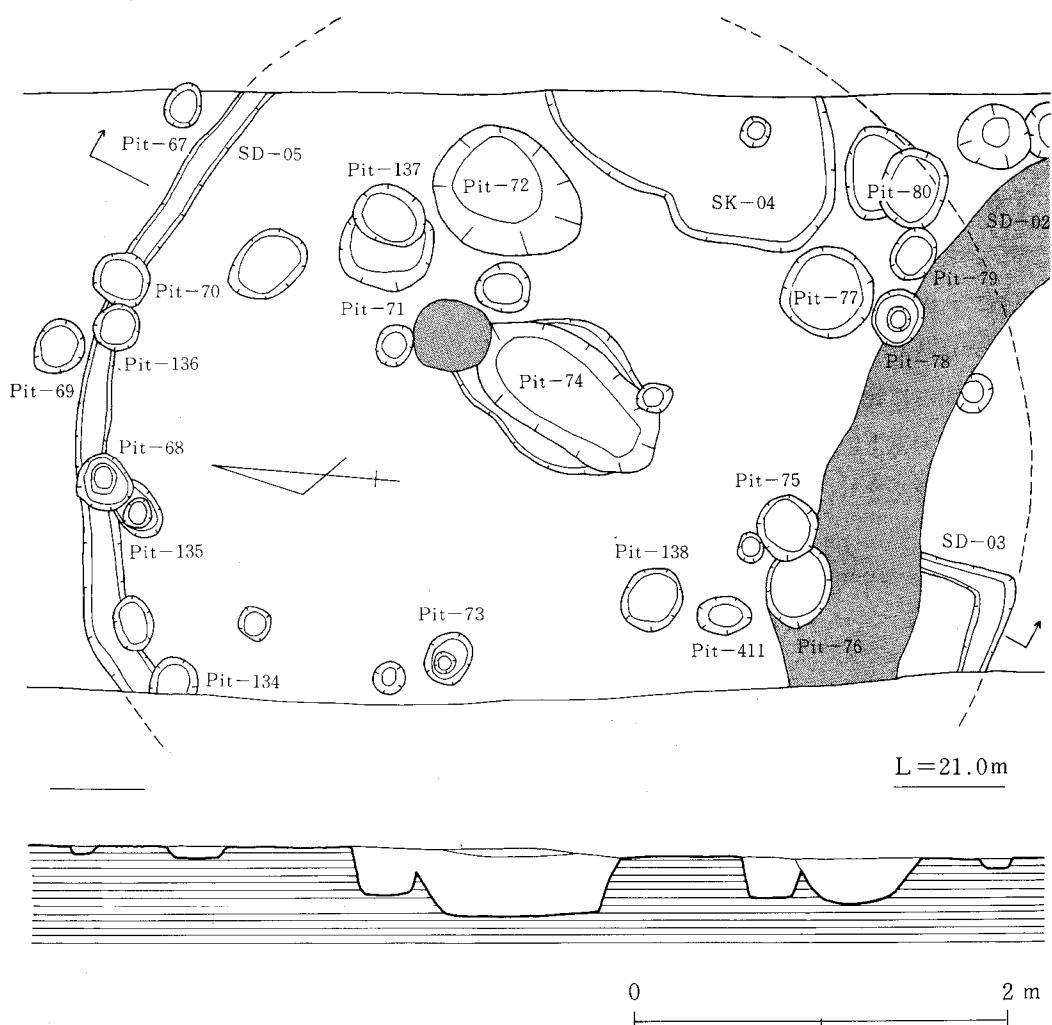


Fig.36 83号住居跡 (SC-83) 実測図 (1/40)

(2) 土 壤

土壙は、30基検出された。このなかには、焼土層を持つもの、多量の遺物を包含するもの、墓壙と考えられるものなどが含まれている。

9号土壙 (SK-09) Fig. 37

III区南側に検出した。西側の調査区外へ広がりながら伸びている。プランは不整方形で、調査区内で $1.9 \times 1.0\text{m}$ を測る。北側は二段に掘り込んでいる。深さは約40cmである。

〈出土遺物〉 Fig. 38

1～3ともに甕形土器で、1は口縁部、2・3は底部の破片である。1は口縁が逆L字状に屈曲し、その直下に断面三角形の凸帯を附す。1～3ともに器面が剥落し調整は不明。胎土には砂粒・雲母を含む。焼成は1は良好、2・3はやや不良である。

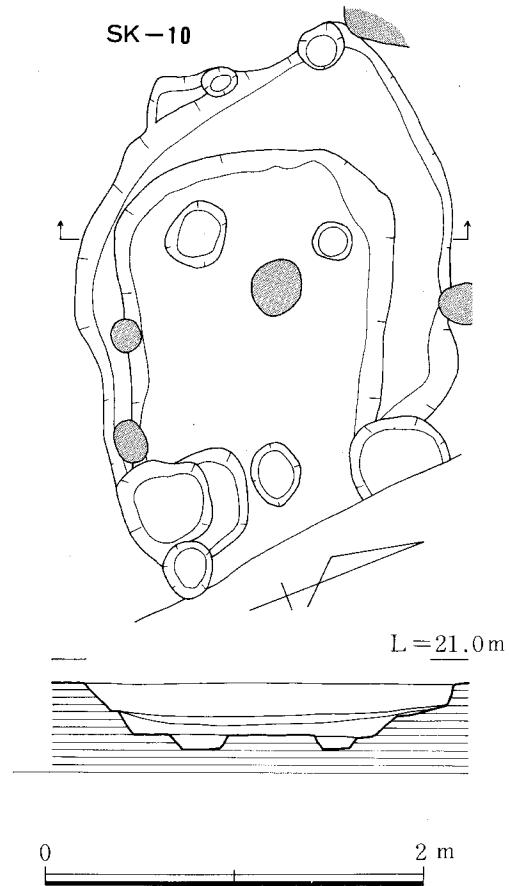
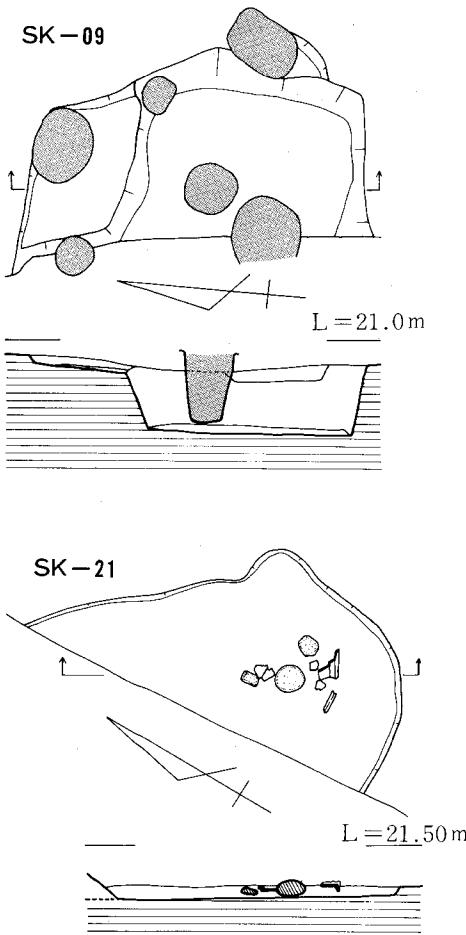


Fig. 37 9・10・21号土壙 (SK-09・10・21) 実測図 (1/40)

10号土壌 (SK-10) Fig. 37

9号土壌の東隣に位置する。プランは不整な長方形で、短辺2m、長辺3mを測る。二段に掘り込んでおり、最深部まで27cmである。底面には数個のピットがあるが、いずれも浅い。

〈出土遺物〉 Fig. 38 PL. 10

4は短頸の壺形土器の口縁部片である。口縁は屈曲して短く外反するが、稜は無い。内面はナデ調整で化粧土を塗布している。胎土には砂粒・雲母を含み、焼成は不良。5は底部片で、調整は不明。胎土には砂粒・石英・斜長石・雲母を含み、焼成は不良。6は円盤状の石製品で、直径10.4cm。全面を研磨し、縁辺部は丸く加工している。裏面は剥げ落ちている。結晶片岩製。土器製作に使用する回転台の可能性がある。

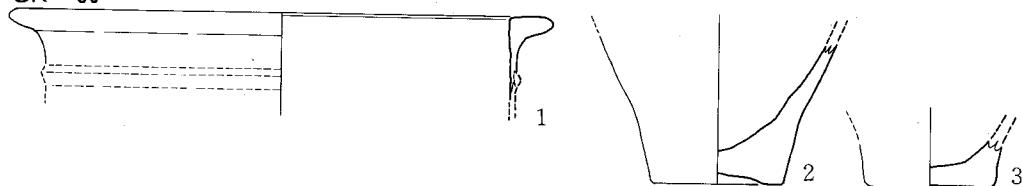
21号土壌 (SK-21) Fig. 37

III区北端部付近で検出した。全体形が分からぬが、長円形のプランになるものと思われる。深さは約5cmである。土器片、礫などが底面から出土した。

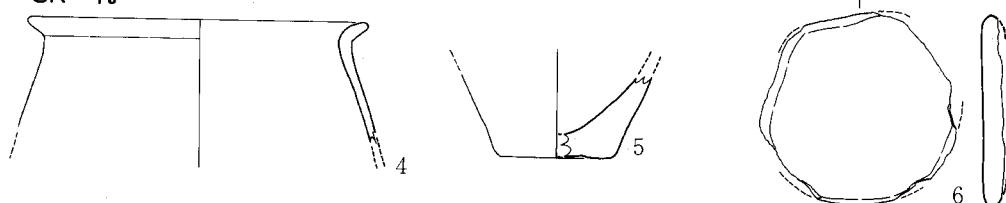
〈出土遺物〉 Fig. 38

7・8ともに甕形土器の口縁部片である。7は口縁が「く」字形に屈曲し、口縁内端に稜を

SK-09



SK-10



SK-21

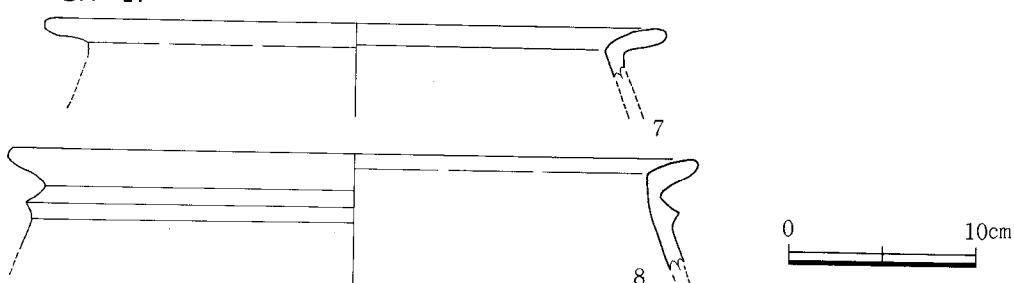


Fig. 38 9・10・21号土壌 (SK-09・10・21) 出土遺物実測図 (1/4)

持つ。内外面ともヨコナデ調整で、胎土には砂粒・石英・斜長石・雲母を含み、焼成はやや不良。8は口縁直下に断面三角形の凸帯を貼り付ける。外面はヨコナデだが他は不明、胎土には砂粒・石英・雲母を含み、焼成は良好である。

30号土壙 (SK-30) Fig. 39 PL. 6

II b区南端に位置する。平面プランは不整長方形を呈し、西側は調査区外に及ぶ。短辺は推定3.2m、長辺は4mを測る。検出面から60cm弱で最深部に至る。土壙底面は皿状を呈しており、南西隅には長方形の浅い窪みを掘り込む。

この土壙からは多量の土器片や礫が出土した。土器片は互いに接合しないものが多い。これらの遺物は土層の堆積状況から上下2群に分けることができるが、量的には上層出土のものが大多数を占める。

〈出土遺物〉 Fig. 40・41 PL. 7

1~23は上層出土、24~30は下層出土の土器である。まず上層出土土器について述べる。

1~4は甕形土器の口縁部片である。1・3・4は口縁が逆L字形に強く屈曲する。2は口縁が「く」字形にゆるく屈曲し、内端の稜ははっきりしない。また、3は口縁直下に断面三角形の凸帯を貼り付ける。1は口縁上面が若干窪む。器面が剥落しているが、内外面にナデの跡を留めている。胎土には砂粒・雲母・カクセン石を含み、焼成は良好。2は調整不明で、胎土に砂粒・雲母を含み、焼成は良好。3は口縁直下にヨコナデの痕跡を残すが他は不明。胎土に砂粒・雲母を含み、焼成は不良。4は内外ともヨコナデ調整。胎土には砂粒と多量の雲母を含み、焼成は不良。

5~8は底部片である。5は甕、6・7は壺である。8は小片のためはっきりしない。5は内面と底面はナデ調整。胎土に砂粒・雲母を含み、焼成は不良。6は内面・底面がナデ、外面はヘラナデ調整。胎土に砂粒・雲母を含み、焼成は良好。7は内面ナデ、外面ヘラナデ調整。胎土に砂粒・カクセン石・雲母を含み、焼成は不良。8は調整不明だが、内面には火を受けた痕跡が認められる。胎土には砂粒を含み、焼成は良好である。

9~12・15は鋤先形を呈する口縁部の破片である。10・12・15は壺形土器であるが、9・11は壺か高壺か決め難い。9は内面ヨコナデ。胎土に砂粒・カクセン石を含み、焼成は不良。10は調整不明。胎土に砂粒・雲母を含み、焼成は不良。11は内外面ヨコナデ。胎土に砂粒・雲母を含み、焼成はやや不良。12は内面ヨコナデ。胎土に砂粒・雲母を含み、焼成はやや不良。15は調整は不明だが、外面には点々と丹塗りの痕跡がある。胎土には砂粒・雲母を含み、焼成は良好である。19は壺形土器の頸部片である。くびれ部に断面三角形の凸帯を貼付する。外面は凸帯付近をヨコナデ、その下位では細かい刷毛目を施し、内面は丁寧にナデている。胎土に砂

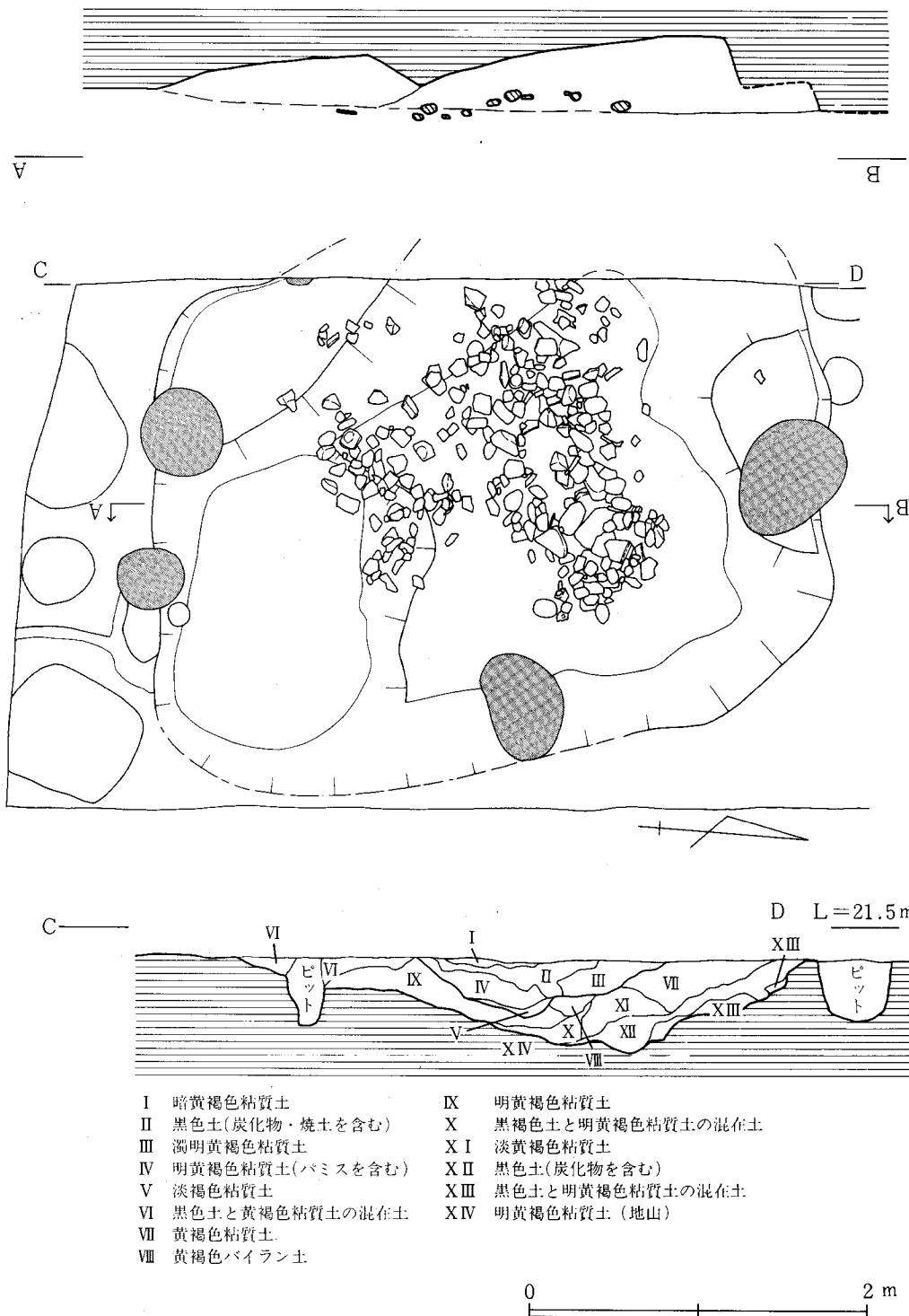


Fig. 39 30号土壤 (SK-30) 実測図及び西壁土層断面実測図 (1/40)

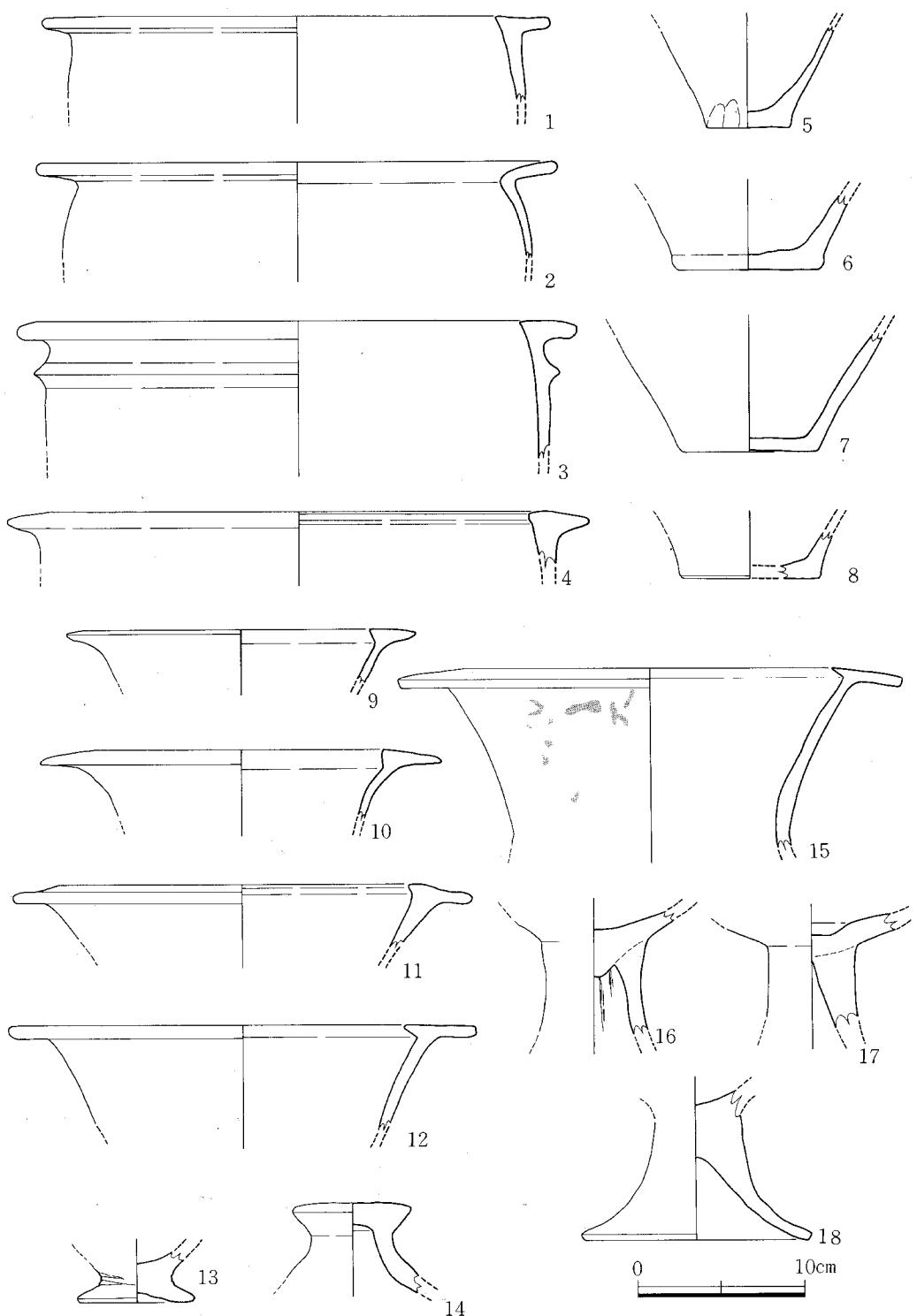


Fig.40 30号土壤 (SK-30) 出土遺物実測図・I (1/4)

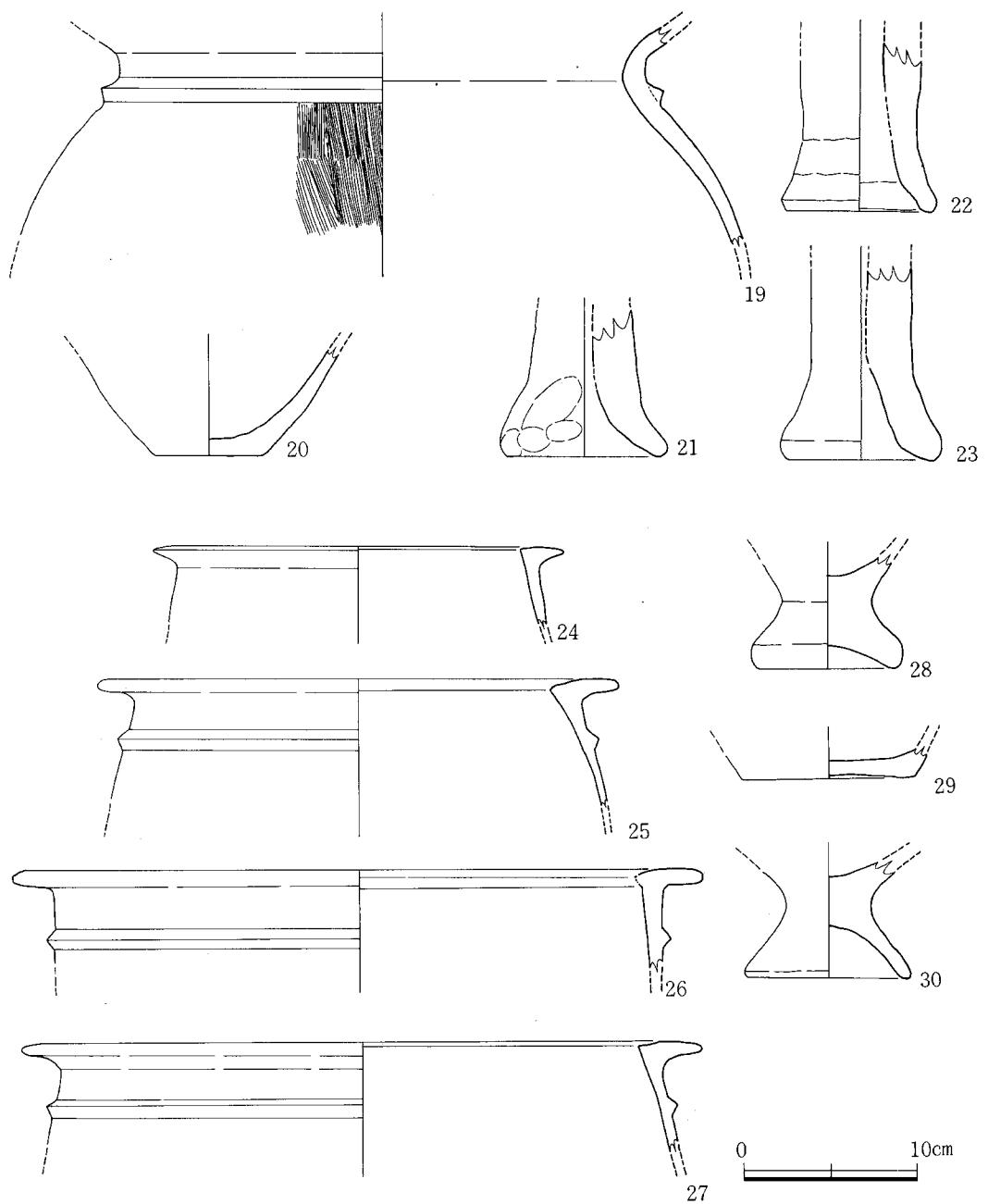


Fig. 41 30号土壤 (SK-30) 出土遺物実測図・II (1/4)

粒・雲母を含み、焼成は不良である。

16~18は高坏の脚部片である。18は低脚の高坏である。16・17は中空の脚部を坏部に貼り付け、18は逆に中実の脚部を坏部に差し込んで接合している。16は器面が剥げ落ち調整は不明だが、脚部内面にしづり痕が見られる。胎土には砂粒・雲母を含み、焼成は良好である。17も調整不明。砂粒・雲母を含み、焼成はやや不良。18は脚部内面と坏部はナデ調整だが、外面は不明。胎土には砂粒・雲母を含み、焼成は良好である。

21~23は分厚いつくりの器台である。いずれも上部を欠く。21の外面には指頭痕が残る。胎土にはいずれも砂粒・雲母を含み、焼成は良好。

13・14・20は底部である。13は脚台付鉢の底部で、くびれ部には成形時にできた粘土のシワを残す。外面ナデ調整。胎土に砂粒・雲母を含み、焼成は良好。14は蓋の頭頂部と考えたが、甕または鉢形土器の底部かも知れない。頭部が外方へ張り出し、上面は丸味をおびている。胎土に砂粒・雲母を含み、焼成良好。95号溝（SD-95）から同様の土器が出土している（Fig-58）。20は鉢の底部である。器面は剥落して調整は不明。胎土に砂粒・雲母を含み、焼成は良好。

次に下層出土土器について述べる。24~27は甕形土器の口縁部片である。いずれも口縁が逆L字形に屈曲して水平に伸びる。また24を除き口縁直下に断面三角形の凸帯を貼り付ける。24は口縁端部が尖り気味に終わるものである。器表面が剥落して調整は不明。胎土には砂粒・雲母を含み、焼成は不良。25は内面ナデ調整だが他は不明。胎土に砂粒・雲母を含み、焼成は良好。26は内端が内側へ少し突出する。内外ともヨコナデ調整。胎土に砂粒・斜長石・カクセン石を含み、焼成は良好。27は調整不明。胎土に砂粒・雲母を含み、焼成は良好である。

28~30は底部片である。28・30は甕形土器、29は壺形土器である。28は分厚い上げ底である。ナデ調整。29は底面が若干窪む平底。内外ナデ調整で内面は特に丁寧である。30は器壁の薄い脚で、調整は不明。28~30はともに胎土に砂粒・雲母を含み、焼成は29が不良、他は良好。

以上の土器群は、概ね下層が弥生時代中期中頃、上層が中期後半の特徴を示していよう。

34号土壤（SK-34） Fig. 42

II b 区南半部に検出した方形プランの浅い土壤である。短辺2.2m、長辺2.6m、深さ20cmを測る。底面には浅いピットが2個ある。

〈出土遺物〉 Fig. 43

1は「く」字形に屈曲して開く甕形土器の口縁部片である。屈曲部には稜があり、口縁端部に面を持つ。2は袋状口縁壺の口縁部片である。丸く屈曲する。3は甕形土器の底部片で、外面に縦位の刷毛目がのこる。共に胎土に砂粒・石英・雲母を含み、焼成は1を除き良好である。

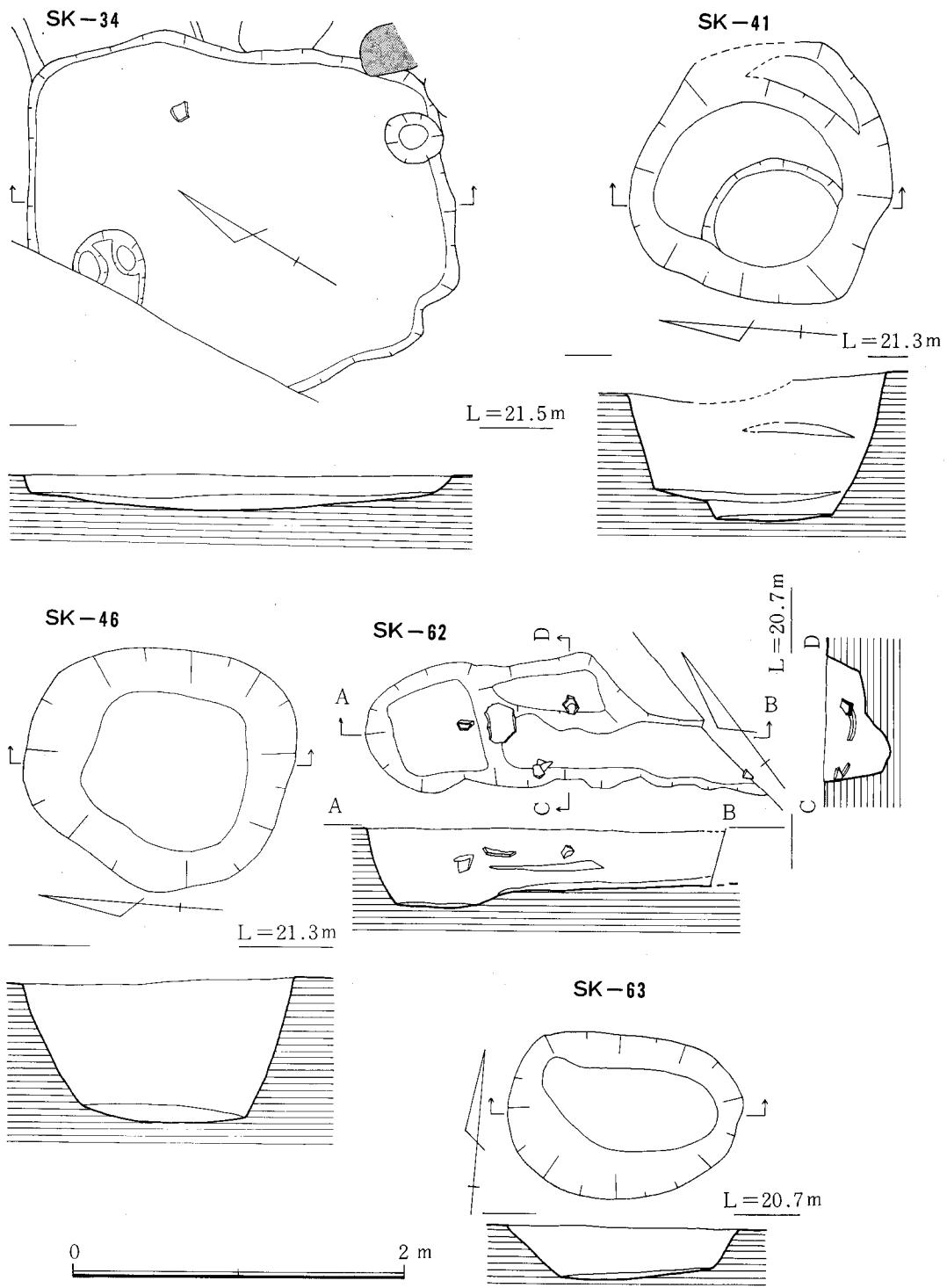


Fig.42 34・41・46・62・63号土壤 (SK-34・41・46・62・63) 実測図 (1/40)

41号土壙 (SK-41) Fig. 42

II b 区のほぼ中央で検出した。42号溝 (SD-42) に先行する。円形プランを呈し、直径1.6m、深さ0.9mを測る。井戸にしては浅い。

〈出土遺物〉 Fig. 43

4・5は甕形土器の口縁部である。4は口縁が緩く屈曲し、胴は張らない。器面が剥げ落ち調整は不明。胎土に砂粒・雲母を含み、焼成は良好。5は口縁が強く屈曲し、胴部が張る。調整方法は不明である。胎土に砂粒・雲母を含み、焼成は良好。6は鉢または高坏の口縁部である。調整は不明で、胎土に少量の砂粒・雲母を含み、焼成は良好。7・8は甕形土器の底部片である。両者とも器面の剥落が著しいが、7の外面には刷毛目が残っている。胎土には砂粒・雲母を含み、焼成は良好である。9は壺形土器の底部片で、底面は若干窪む。胎土に砂粒・雲母を含み、焼成は不良である。

以上の土器は弥生時代中期後半の特徴を持つ。

46号土壙 (SK-46) Fig. 42

41号土壙 (SK-41) に似た土壙で、41号の北側3mに位置する。プランは円形。直径1.5~1.6m、深さ90cmを測る。

〈出土遺物〉 Fig. 43

10・11は「く」字形に屈曲する甕形土器の口縁部片である。10は外面に刷毛目、内面ナデ調整。11は調整不明。12は壺形土器の口縁部片である。鋤先形を呈するが、内端のかえりは小さい。調整は不明だが、外面には丹塗りの痕跡を留める。13は底部片である。安定した平底で、外面には刷毛目が認められる。10~13はともに胎土に砂粒・雲母を含み、焼成は11が不良で、他は良好である。

41号の遺物同様、中期後半に位置づけられよう。

62号土壙 (SK-62) Fig. 42

II b 区の北端付近に位置する。溝状に細長い土壙で、東は調査区の外まで続いている。現状で短辺0.8m、長辺2.4mを計る。三段に掘り込み、西に向かって深くなる。

〈出土遺物〉 Fig. 43

14は甕形土器の口縁部片で、「く」字形に屈曲する。外面ヨコナデ調整。胎土に砂粒を含み、焼成は良好。15は甕形土器の底部片で、安定した平底である。調整は不明。胎土に砂粒・雲母を含み、焼成はやや不良である。

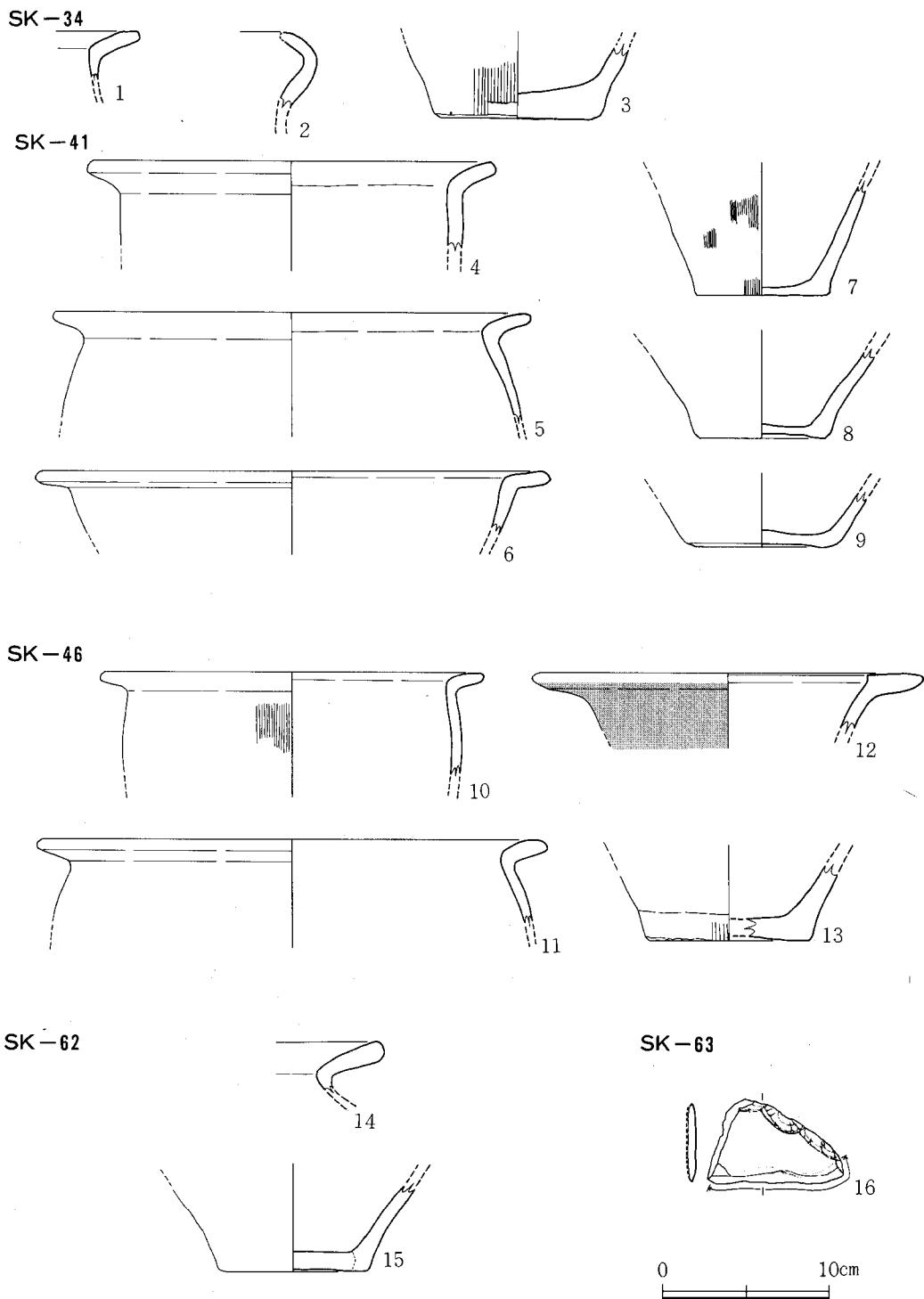


Fig.43 34・41・46・62・63号土壤 (SK-34・41・46・62・63) 出土遺物実測図 (1/4)

63号土壙 (SK-63) Fig. 42

II b 区北端に位置している。プランは長円形で東西に長く、長径1.4m、短径1.0m、深さ30cmを測る。底面が西に向かって深い。

〈出土遺物〉 Fig. 43 PL. 10

14は石鎌の切っ先と考えられる石器である。縁辺部に打ち欠きを加えて形を整え、刃部を研磨している。石材は結晶片岩である。

91号土壙 (SK-91) Fig. 44

II a 区中央部に位置する。92号溝 (SD-92) に切られ、西隅が調査区の外へ伸びる。長方形プランをなし、長辺3.3m、短辺2.0m、深さ5cm強を測る。床面には大小のピットがあつて、切り合っている。この土壙の周辺には多数のピットが集中しており、これら床面で検出したピットにも土壙に先行するものが含まれていよう。

遺物は弥生土器の細片が出土したのみである。

103号土壙 (SK-103) Fig. 44

II a 区北端で検出した。西側が調査区の外に伸びるが、不整円形を呈する土壙になるものと考えられる。調査区内で直径1.9m、深さ50cmを測る。底面は皿状をなす。土壙内には遺物を多量に包含しており、出土数量はコンテナ2箱にのぼる。

〈出土遺物〉 Fig. 45

1～7は甕の口縁部片、8～13は底部片、14は高坏の坏部片、15～17は器台である。

1～4は逆L字形に屈曲する口縁で、1・2は内端が内へやや突出する。4は口縁直下に断面三角形の凸帯2条を貼り付け外面を丹塗りする。1～4ともに器面の剥落が著しいが、僅かにヨコナデの痕跡が認められる。ともに胎土に砂粒・雲母を含み、焼成は4を除いて良好である。5～7は口縁が「く」字形に屈曲するが、稜は作らない。5は外面ヨコナデ^{注7}。6は外面が刷毛目で、内面に朱(硫化第二水銀)を塗布し、口縁付近はヨコナデ調整である。7は外面が粗い刷毛目、内面ナデ、口縁ヨコナデ調整である。5～7ともに、胎土に砂粒・雲母を含み、焼成は良好である。

底部のうち、8～11は甕形土器、12・13は壺形土器のものであろう。いずれも安定した平底である。8のみ外面に刷毛目が認められるが、他のものは器面が剥落して調整手法が不明である。12は内面にベンガラを塗布している。いずれも胎土には砂粒を含む他10・11を除いて雲母を含む。また13は混和材が少ない精良な素地土を用いている。焼成は9～11がやや不良で、他は良好である。

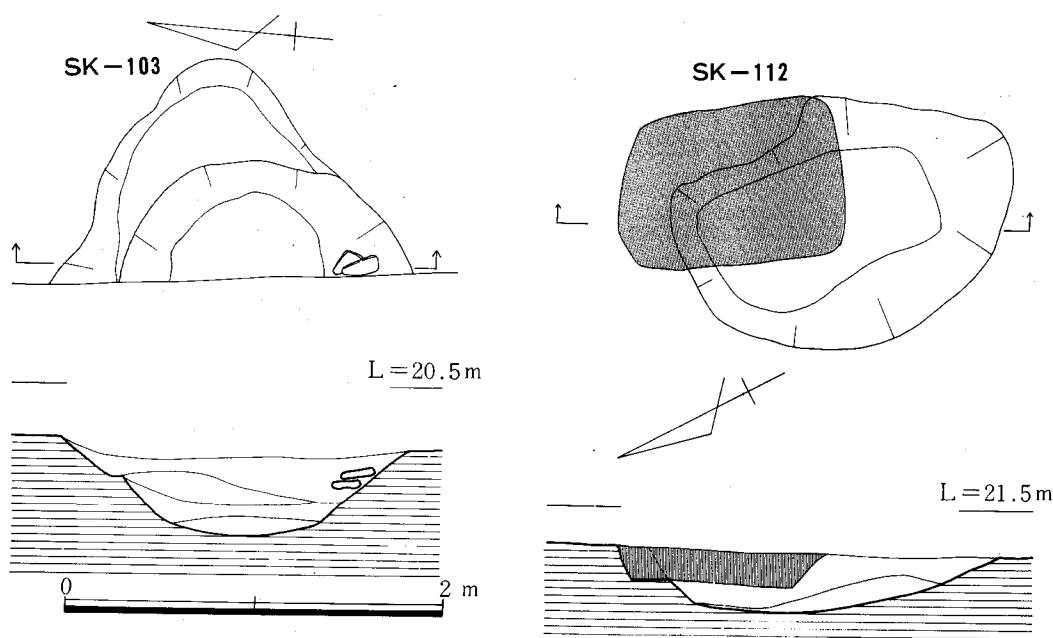
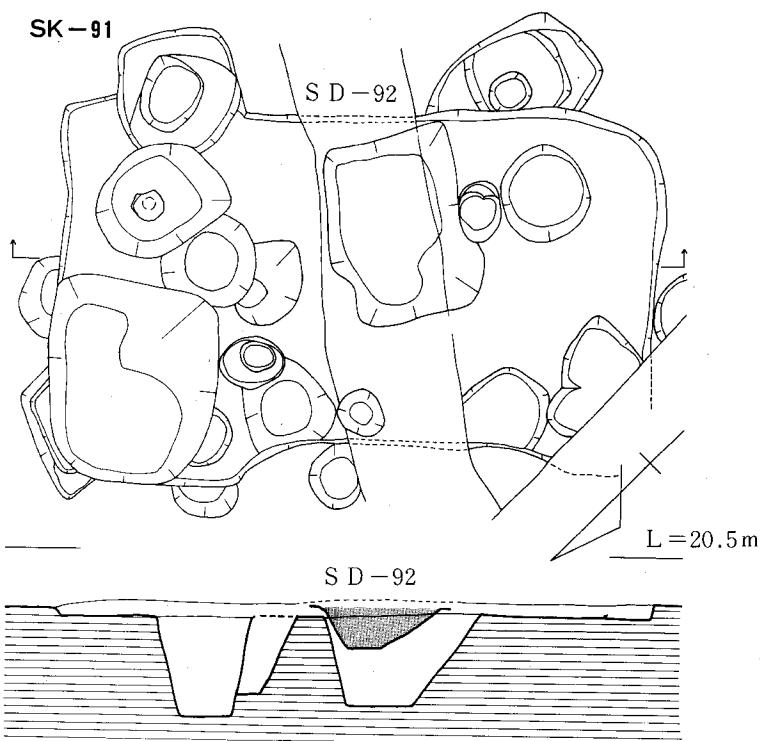


Fig. 44 91・103・112号土壤 (SK-91・103・112) 実測図 (1/40)

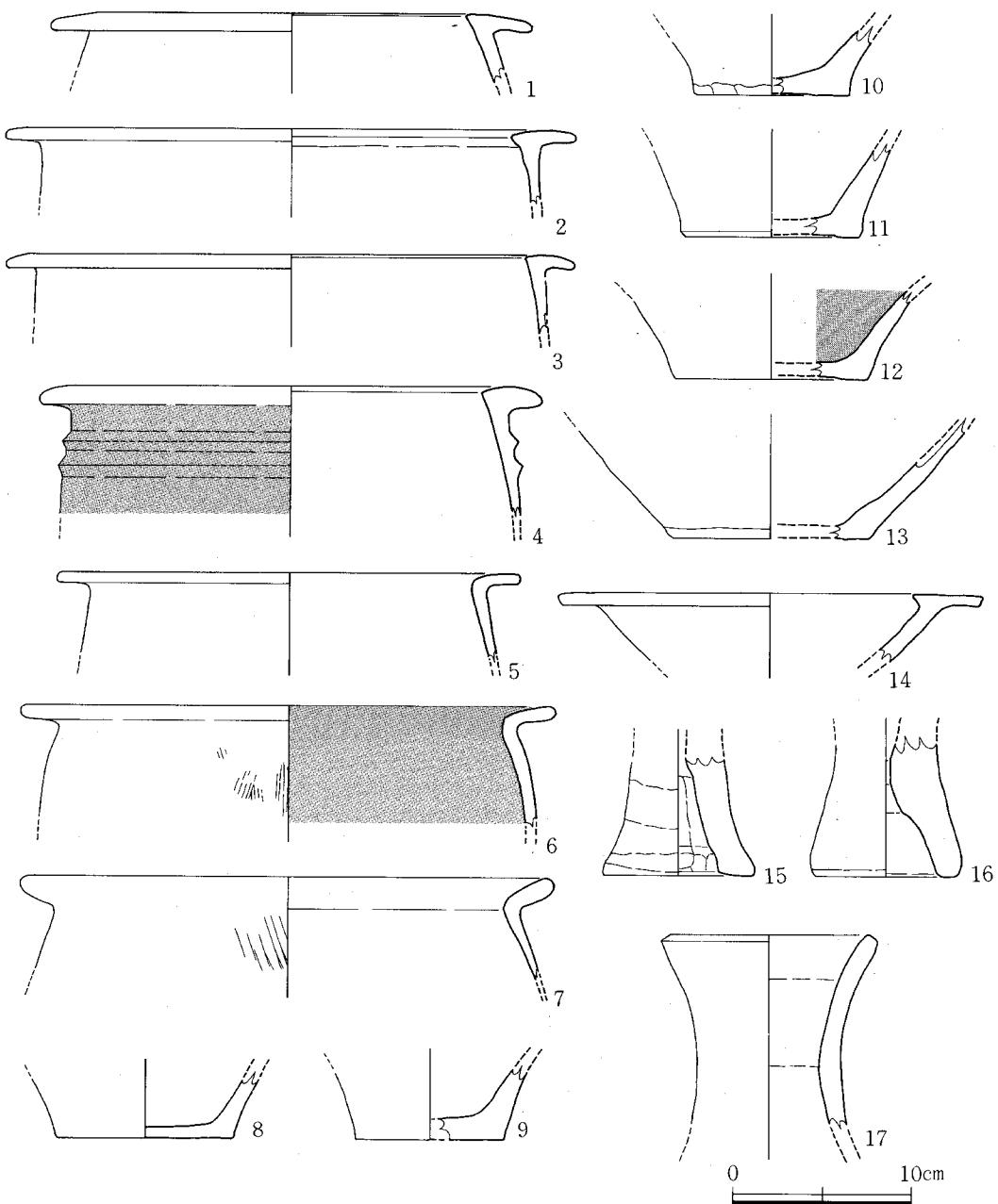


Fig.45 103号土壤 (SK-103) 出土遺物実測図 (1/4)

14は口縁が鋤先形に屈曲する高壺の壺部片である。内外ともナデ調整で、胎土に砂粒・雲母を含み、焼成は良好である。

15~17は器台である。15・16は肉厚で上部を欠く。17は薄手で、下半部を欠く。いずれも胎土には砂粒を含み、焼成は良好である。

以上の土器群は弥生時代中期中頃~後半の特徴を示しており、この土壙の時期は中期後半と考えられる。

112号土壙 (SK-112) Fig. 44

VII区北半部で検出した長円形プランの土壙である。北側を別の小土壙に切られている。長径1.8m、短径1.3m、深さ0.3mを測り、すり鉢状に窪んでいる。

弥生時代中期後半に属する土器が出土したが、細片のため図化していない。

128号土壙 (SK-128) Fig. 46 PL. 6

VIII区北半部に位置する。周辺には遺構が少なく、最も近い住居跡 (SC-140) から約16m離れている。土壙の東側は調査区外に伸びるが、方形を意識した不整なプランとなろう。西隅が南西側へ大きく張り出している。検出面から底面まで40cmを測る。底面はかなり凹凸があり、小ピット状の浅い窪みが幾つか見られる。土壙の覆土中には焼土層がある。この焼土層は、遺物を包含する黒色土の上面を覆うように、2~4cmの厚さでレンズ状に堆積している。覆土には炭化物や焼け石などが含まれ、土器は小片が多い。遺物はコンテナにして1箱が出土した。

〈出土遺物〉 Fig. 47

1は袋状口縁壺の口縁部片である。丸く内弯し、稜は無い。ナデ調整。胎土には砂粒・石英・雲母を含み、焼成は良好。2は甕の底部である。二次加熱を受けている。内面がナデ調整。胎土には砂粒の他、赤色粒子（ベンガラ？）を含んでおり、焼成はやや不良である。3は鉢の底部片で、調整は不明。胎土に砂粒を含み、焼成は良好。4は肉厚の器台である。底部が外方へ踏ん張る特異な形をしている。器面の剥落が著しい。胎土は砂粒を含み、焼成は不良である。この他成人甕棺の口縁部片などが出土している。

134号土壙 (SK-134) Fig. 48 PL. 6

VIII区の北半部に位置する。プランは不整方形で、東側と西隅は調査区外に及ぶ。南側は古墳時代の溝である133号溝 (SD-133) に切られている。また床面に見られる柱穴は、後述する掘立柱建物 (SB-184) に伴うもので、この土壙に先行する。短辺3.5m、長辺は4.5m以上になり、底面までの深さは15cmを測る。底面は浅い皿状を呈し、東側の調査区壁ぎわには浅い円形

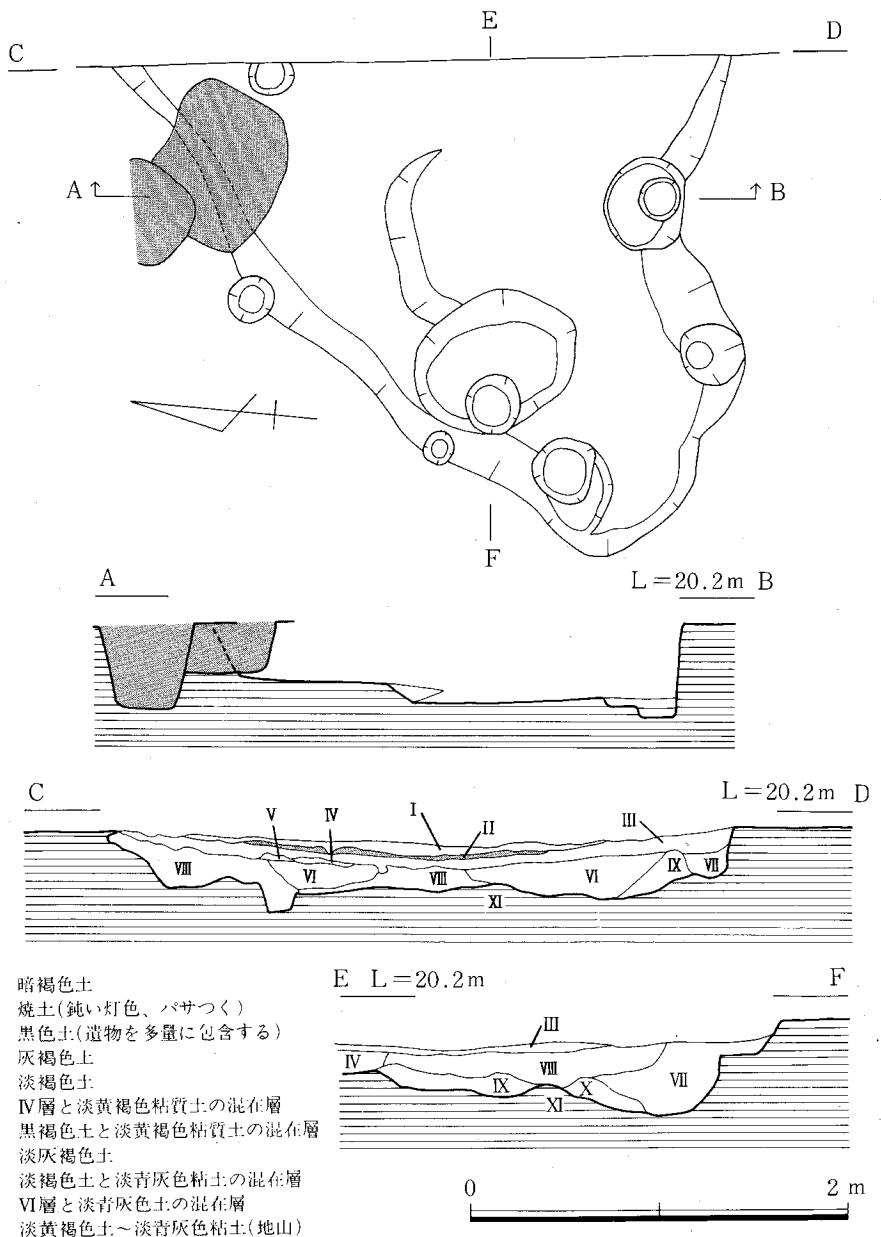


Fig. 46 128号土壤 (SK-128) 実測図 (1/40)

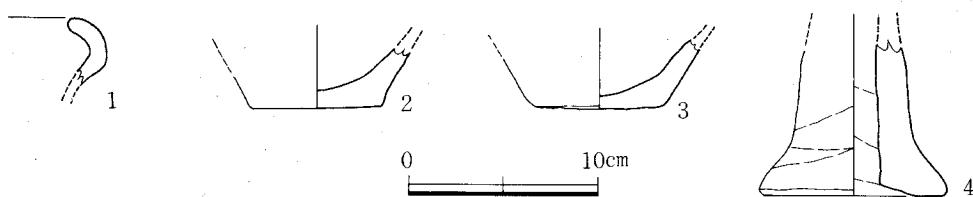


Fig. 47 128号土壤 (SK-128) 出土遺物実測図 (1/4)

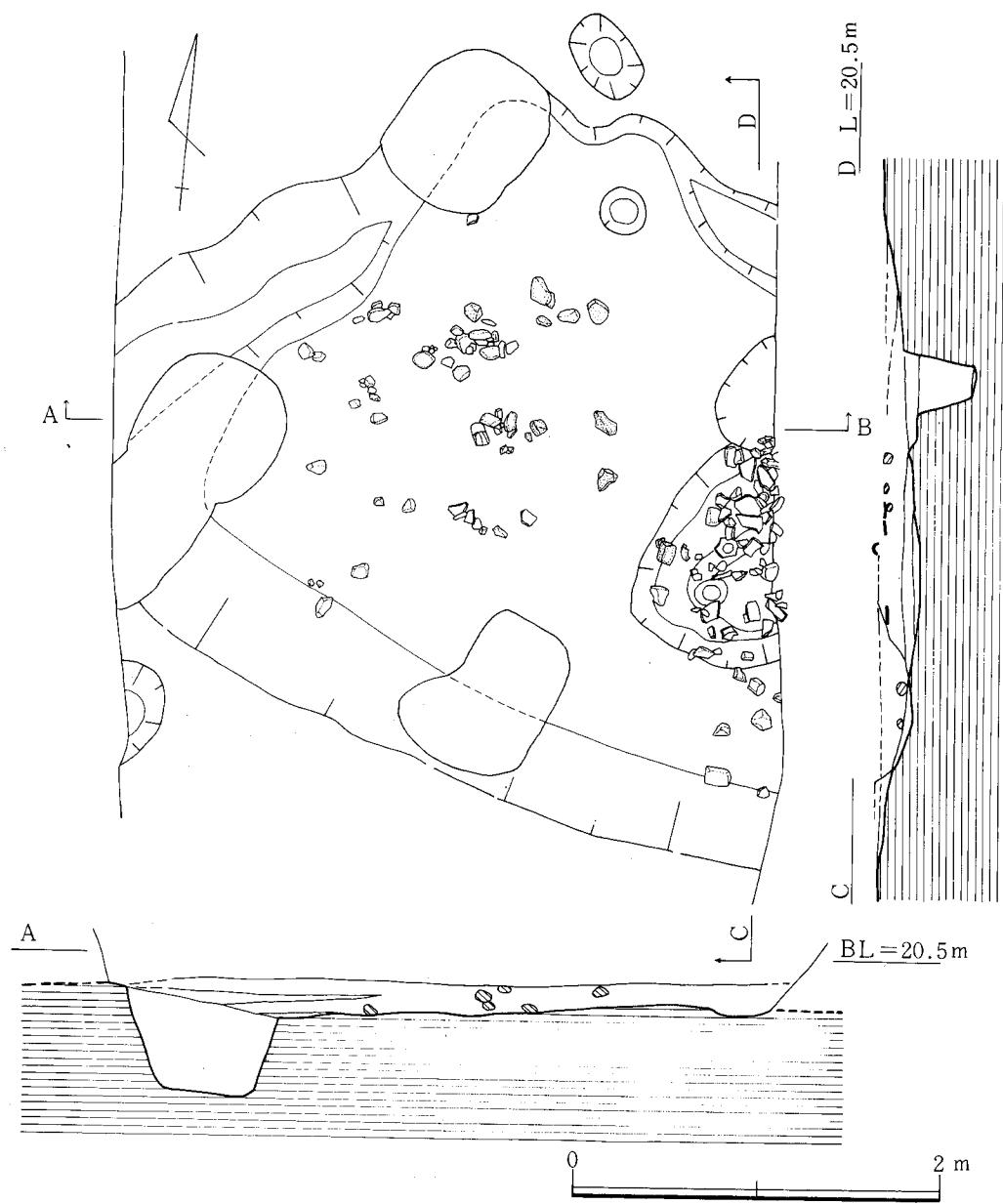


Fig. 48 134号土壤 (SK-134) 実測図 (1/40)

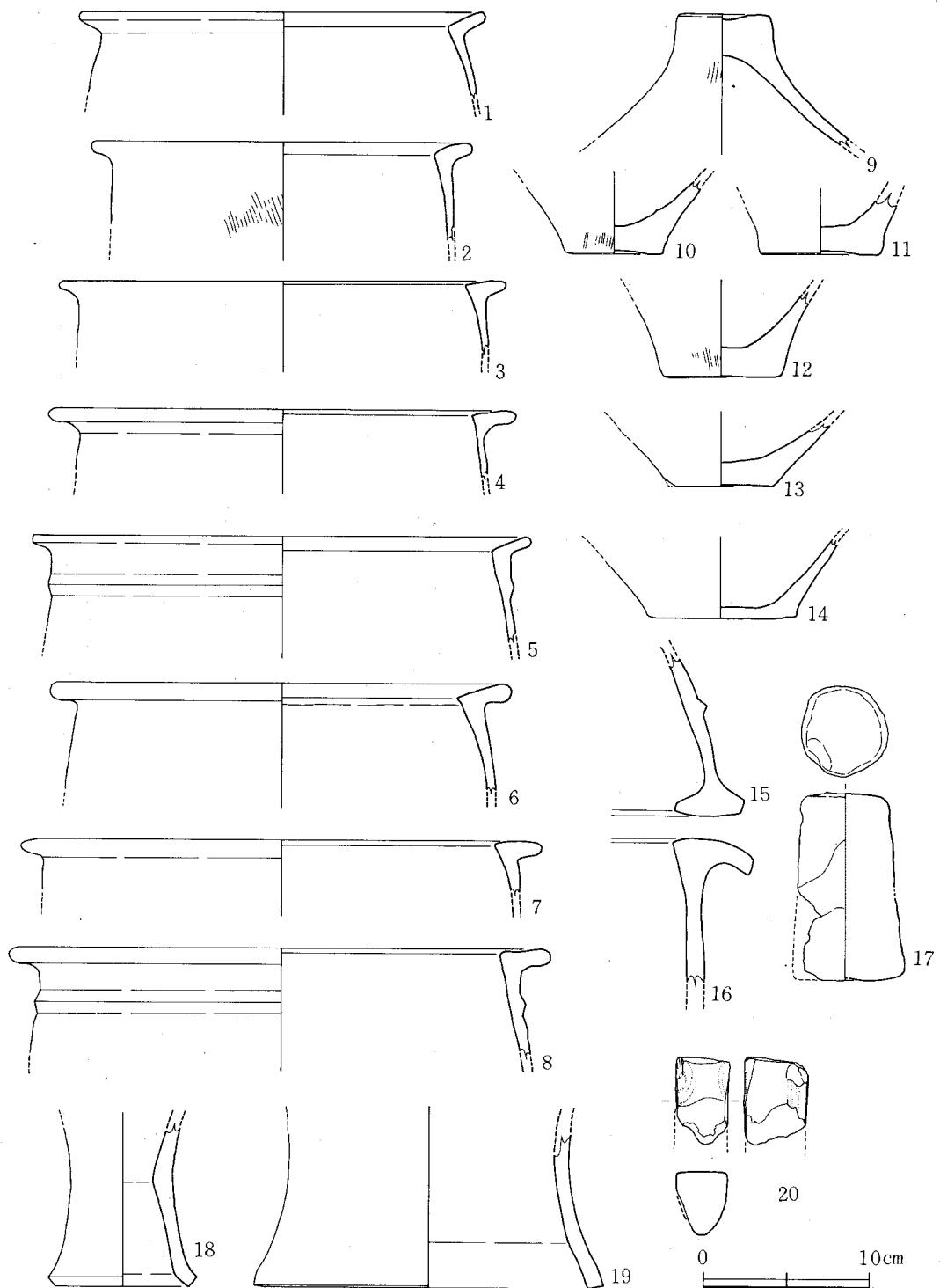


Fig. 49 134号土壤 (SK-134) 出土遺物実測図 (1/4)

の窪みを掘る。遺物はこの窪み付近に集中して出土した。土壙内の覆土は自然堆積の状況を示している。

〈出土遺物〉 Fig. 49 PL. 7・10

1～8は甕形土器の口縁部片である。いずれも逆L字形に屈曲し、口縁上面が内傾する。1～5は6～8に比べて屈曲部が肉厚であり、より古い形態のなごりを留めている。4・6は口縁内端がやや内側へ突出する。また、5・8は口縁直下に断面三角形の凸帯を貼り付ける。いずれも器面の残りが悪く、調整方法が分かるものは少ない。2の外面に縦方向の刷毛目が認められる。いずれも胎土に砂粒を含む他、1～4には雲母、4・5には赤色粒子（ベンガラ？）を含んでいる。焼成は3がやや不良、8が不良の他は、皆良好である。

9は蓋である。頭頂部が少し窪む。器面は殆ど剥落しているが、外面に縦方向の刷毛目が残る。胎土に砂粒・雲母を含み、焼成は良好である。

10～12は甕形土器の底部である。10～12は底面がやや窪む。調整は10・12の外面が刷毛目、12の底面がナデの他は不明である。胎土には砂粒の他、10・12が雲母を含む。焼成は10・12が不良、11は良好である。13・14は壺形土器の底部である。ともに安定した平底である。13の外面がナデ調整。胎土は13が砂粒、14が砂粒・雲母を含む。焼成はともに良好である。

15・16は成人用甕棺の口縁部片である。いずれも小片のため、口径は不明である。15は鉢形土器で、T字形の口縁を呈する。口縁下に断面三角形の小凸帯を貼り付ける。胎土に砂粒・雲母を含み、焼成は良好。16は甕形土器で、口縁は逆L字形に屈曲し、端部が垂れ下がる。胎土に砂粒を含み、焼成は不良で脆い。

17は支脚である。円筒形をなし、中実である。胎土に砂粒を含み、焼成は良好である。

18・19は器台である。18は薄手で調整は不明。胎土に砂粒・カクセン石を含み、焼成はやや不良である。19は大型筒形器台の脚端部である。端部が内弯して終わる。器面は剥落しているが、外面に僅かに赤色顔料を塗布した痕跡を認める。胎土に砂粒を含み、焼成は不良である。

20は柱片状刃石斧の基部片である。研磨による成形。頁岩製である。

以上の土器群は、弥生時代中期中頃の特徴を示している。

145号土壙 (SK-145) Fig. 50 PL. 6

VII区中央部に位置する。東へ向かって広がる浅い溝状のプランを呈しており、前述した144号住居跡を切っている。東西とも調査区の外へ伸びている。西端では142号住居跡と重なり、これを切っている。調査区内で最大幅3mを測り、長さは4mを越す。深さは最深部で20cmである。底面にはピットの他、長円形の土壙(SK-150)がある。遺物は東半部とこの土壙内に集中して出土したが、大半のものが底面から浮いた状態である。

〈出土遺物〉 Fig. 51・52 PL. 7~9

1~10は甕形土器である。1~9は口縁部片で、10は完形に近い。

3~5・9は口縁が逆L字形に屈曲するもので、5・9は口縁直下に断面三角形の凸帯を貼り付ける。調整手法は、3は不明、4は屈曲部内外をヨコナデ、5は内外ヨコナデで、9は外面凸帯付近をヨコナデしている。ともに胎土に砂粒を含んでおり、焼成は良好である。

1・2・6~8・10は口縁が「く」字状に屈曲するが、口縁内端に稜はない。これらは、7・8のように胴部が張り出すものと、10のように口径が胴部最大径とほぼ等しいものとにわけられる。8は口縁が強く屈曲し、かなり胴部が張り出す器形をなす。口縁直下には断面三角形の

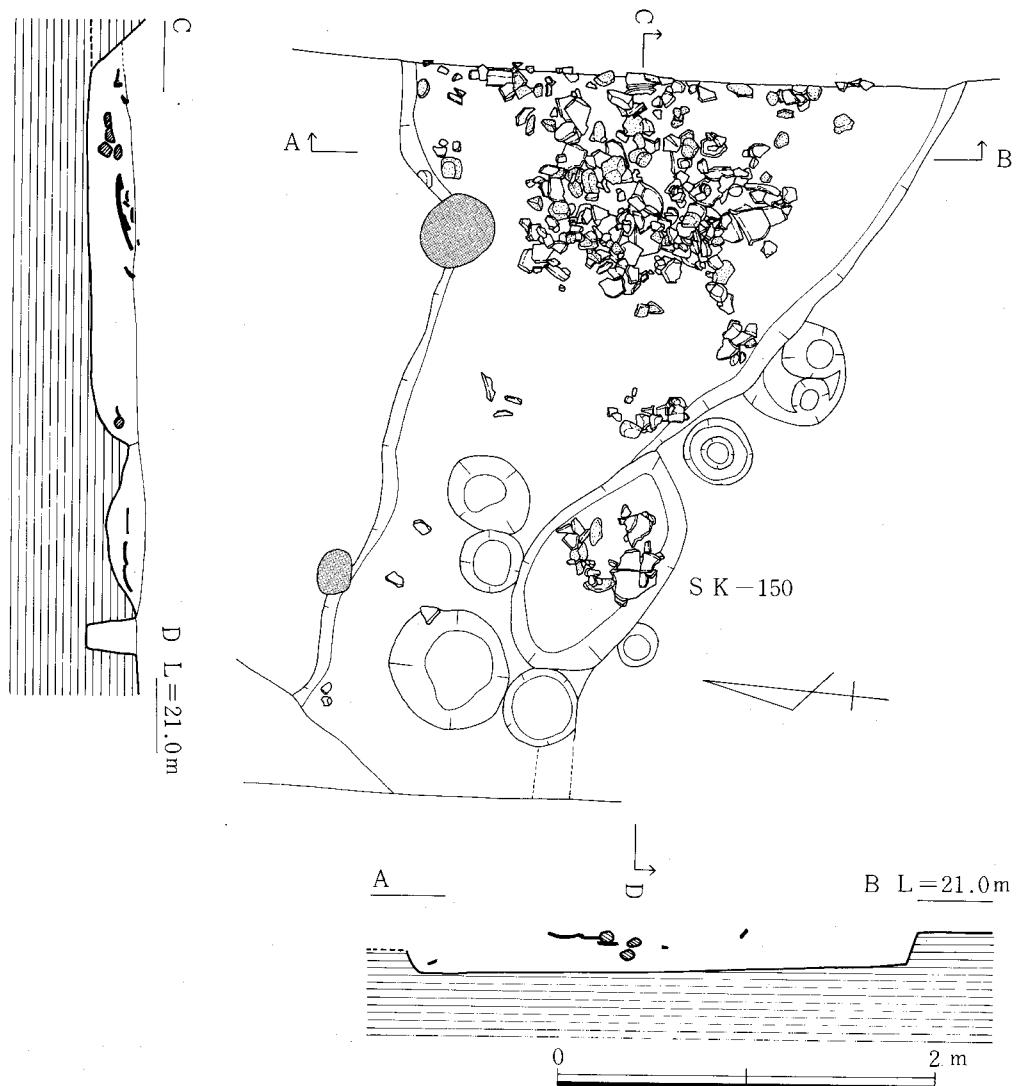


Fig.50 145号土壤 (SK-145) 実測図 (1/40)

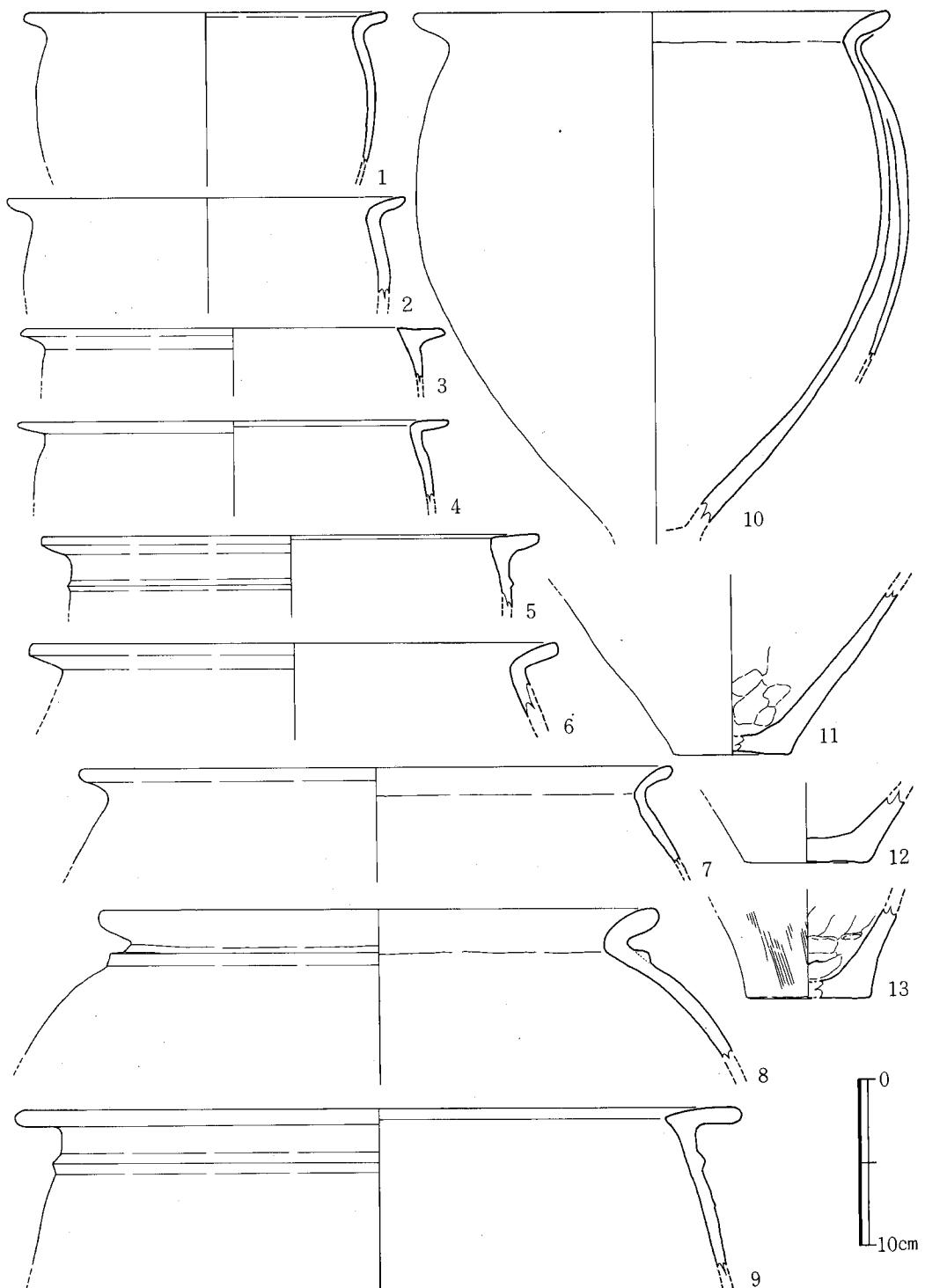


Fig. 51 145号土壤 (SK-145) 出土遺物実測図・I (1/4)

凸帯を貼り付ける。10は胴部がやや歪んでいるが、胴径と口径はほぼ等しい。これらの調整は器面剥落のためはっきりしないが、おおむね口縁部内外をヨコナデし、内面をナデ調整する。外面の刷毛目などは残っていない。胎土には砂粒を含むほか、7は雲母粒を含む。焼成は2・9がやや不良、7が不良で、他は良好である。

11・13は甕形土器の、12は壺形土器のそれぞれ底部片である。ともに安定した平底で、11はやや上げ底ぎみである。11は内面ヘラナデ調整、12は内面ナデ調整、13は外面に刷毛目、内面はヘラ削り・ヘラナデ調整をそれぞれ施す。11・13は胎土に砂粒を含むが、12は砂粒をほとんど含まず精良である。焼成はいずれも不良である。

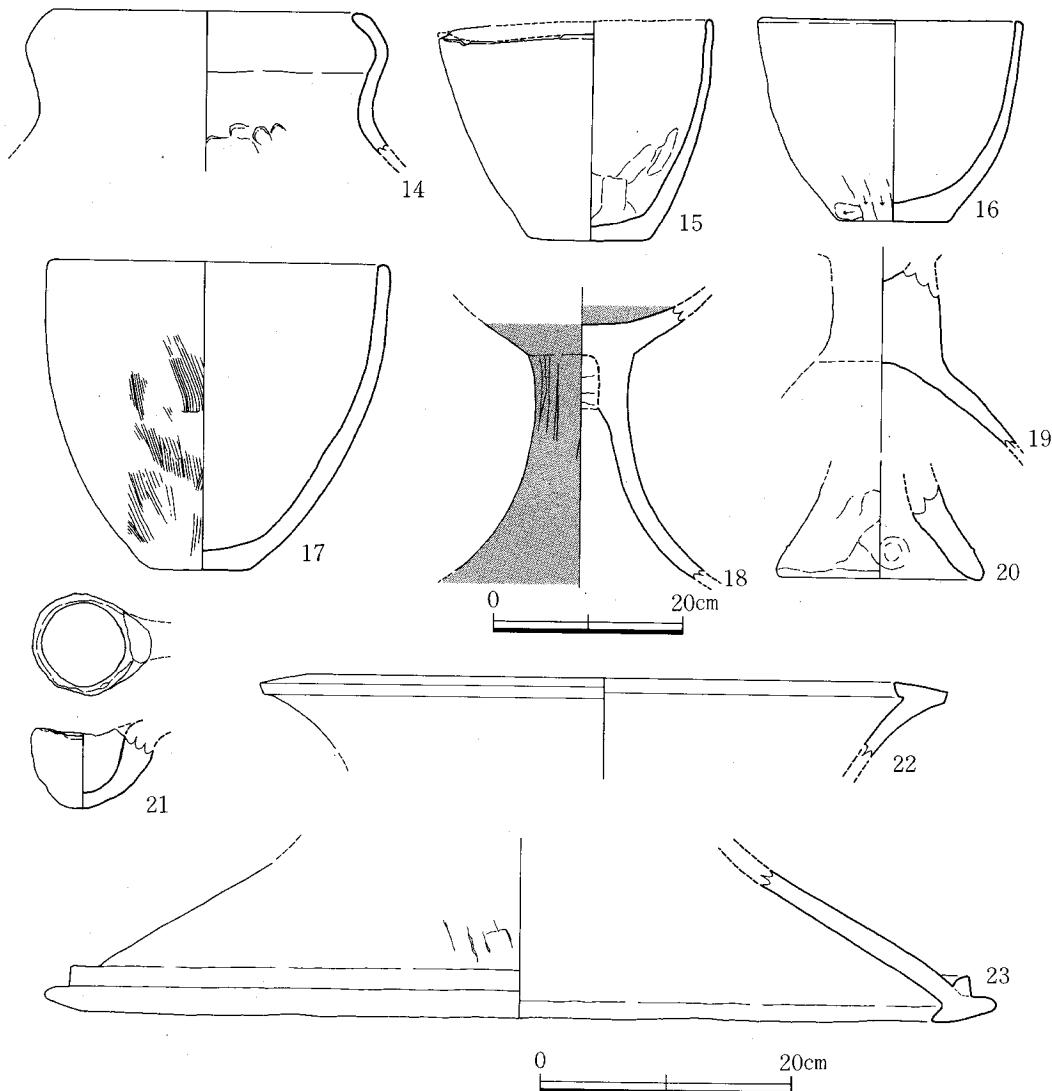


Fig. 52 145号土壤 (SK-145) 出土遺物実測図・II (22・23は1/6、他は1/4)

14は袋状口縁壺である。口径が大きく、口頸部が短い。口縁部内外に稜はない。頸部内面に指頭痕を残す。胎土に砂粒を多く含み、焼成は良好である。

15～17は鉢形土器である。すべて完形である。いずれも平底で、胴部が内弯して立ちそのまま口縁に至る。15の内面は上半がナデ、下半がヘラナデ調整。16は外面下半をヘラナデ、底面と内面下半をナデ調整。17は外面を縦位の刷毛目、内面をナデ、口縁内外をヨコナデ調整。胎土にはいずれも多量の砂粒を含んでおり、焼成は良好である。

18・19は高坏の脚部片である。18は長脚の高坏で、脚部は中空である。坏部に外から脚を貼り付けて接着している。ナデ調整をした後、脚部内面を除く全体に丹塗りをし、研磨している。胎土は砂粒を少しあらず精良で、焼成はやや不良である。19は中実棒状の筒部に大きく広がる裾部がつく。上端に坏部と接合するための窪みがある。器表面が剥落して調整は不明である。胎土に砂粒を含み、焼成は良好である。

20は器台の裾部片で、肉厚である。内外ともナデ調整で、内面には指頭痕が残る。胎土に砂粒を含み、焼成は良好である。

21は手捏ねの杓形土器である。柄部を欠いている。胎土に砂粒・雲母を多量に含み、焼成は良好である。

22・23は大型土器のため、1/6で図示している。22は壺形土器の口縁部片で、鋤先形の断面をなす。調整は内面ナデの他は不明。胎土に砂粒を含み、焼成は不良。23は特異な器形をしているが、蓋または鉢形土器の口縁部と思われる。浅く広く口縁が開き、端部に粘土帯を貼付してT字形となし、それに接して断面三角形の凸帯を貼り付ける。口縁ヨコナデ、他はナデ調整で、胎土には砂粒を含み、焼成は良好である。

以上の土器群は弥生時代中期後半の特徴を示している。

152号土壤 (SK-152) Fig. 53

VIII区南端部に位置する。長円形のプランを呈するが、西側は調査区外にかかる。長径1.6m、短径1.2m以上、深さ0.6mを測る。逆円錐形状に掘りこまれており、底面は平たい。

遺物は、弥生土器片が少量出土している。

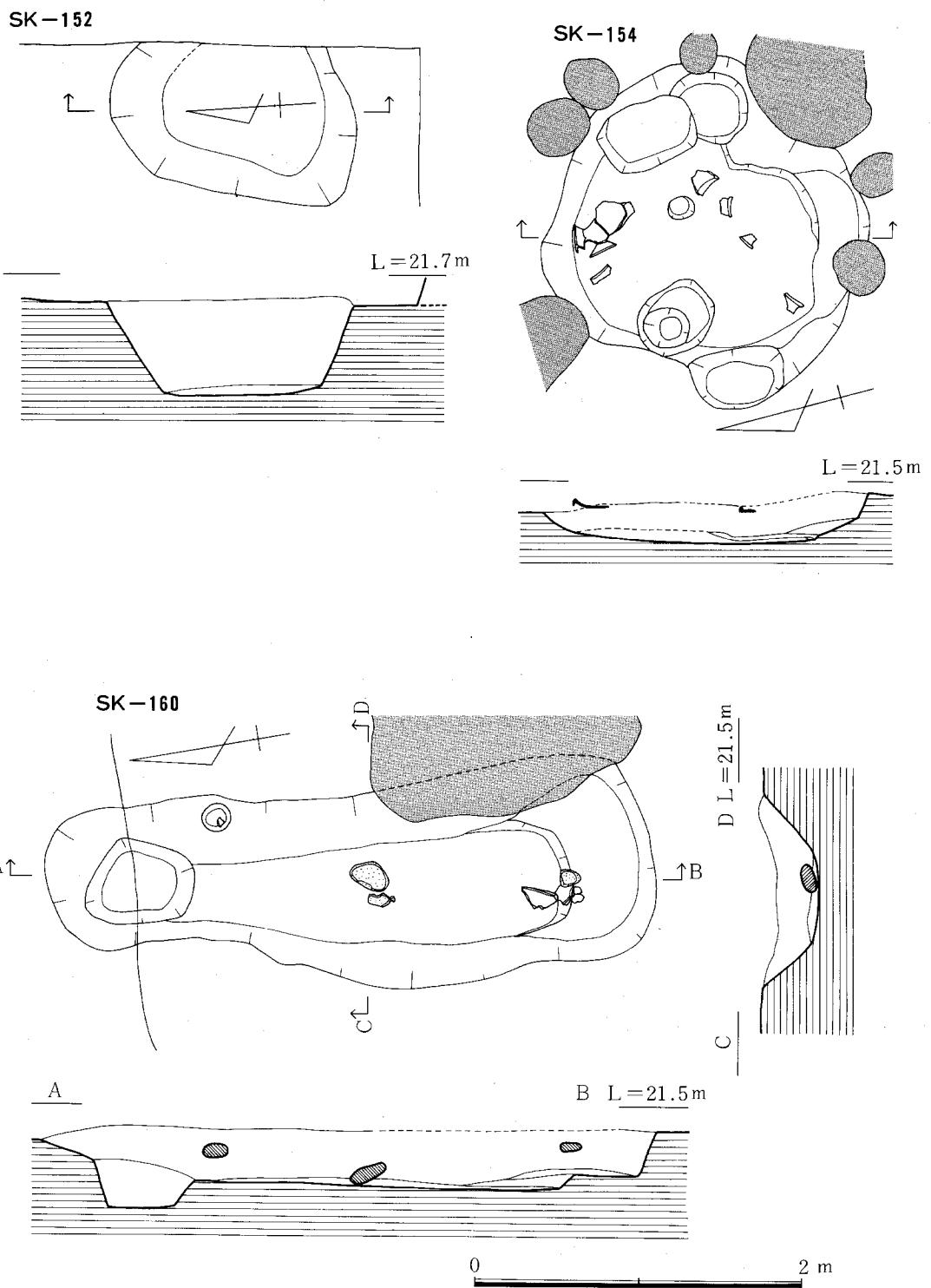


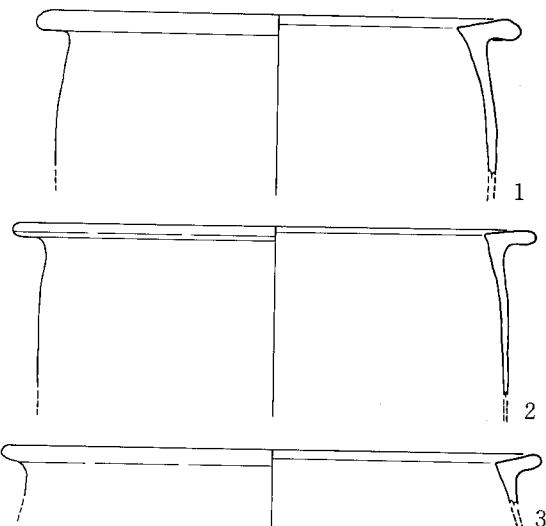
Fig. 53 152・154・160号土壤 (SK-152・154・160) 実測図 (1/40)

154号土壤 (SK-154) Fig. 53 PL. 6

VII区南端付近に位置し、155号住居跡を切っている。また大小のピットに切られている。平面プランは円形で、直径約2m、深さ30cmを測る。底面は皿状をなす。東西の壁際に、対峙するようにピットが掘られており、特に北側に対峙する2個のピットは深さが30cmを測り、深い。上屋根を持つ土壤であろうか。

〈出土遺物〉 Fig. 54 PL. 9

全て甕形土器である。1・2・5は床面出土である。4は土壤を切るピット等からの紛れ込みの可能性がある。1～3は口縁が逆L字形に屈曲し、4は「く」字形に屈曲するが稜はない。1～4とも器面が剥落しているが、ヨコナデ調整か。5は口縁部を欠くが、砲弾形の器形を成すものであろう。外面に下方向からの刷毛目を施し、底面と内面の一部にはナデ調整が認められる。1～5の胎土は砂粒を含み、更に2は雲母を含む。焼成は2・3がやや不良で、他は良好である。



160号土壤 (SK-160) Fig. 53
PL. 6

154号土壤の北に6mの間隔をおいて位置している。北端を搅乱溝に、東南側をピットにそれぞれ切られている。かなり細長い長円形プランを呈し、南に向かって少し広がる。長径3.7m、短径1.2m、最深部で50cmの深さを測る。主軸をほぼ南北にとっている。底面は南側では2段に掘り込み、北側には浅いピットを設ける。土壤墓の可能性がある。

〈出土遺物〉 Fig. 55 PL. 7・10

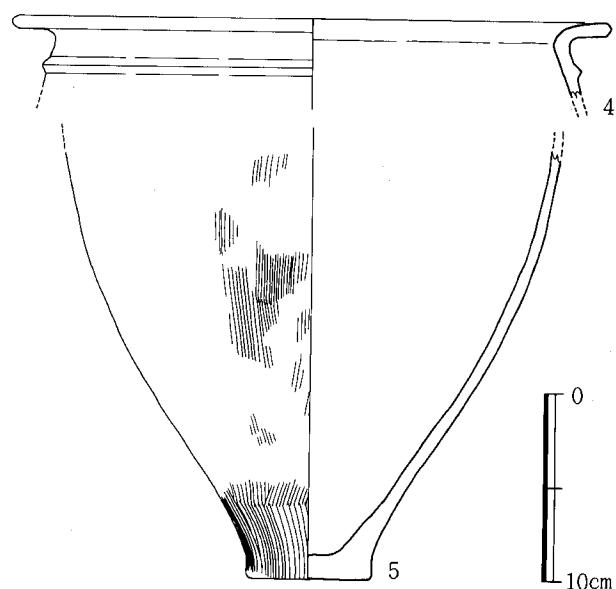


Fig. 54 154号土壤 (SK-154) 出土遺物実測図 (1/4)

1～4は甕形土器の口縁部片である。いずれも口縁が逆L字形に屈曲し、短く開く。1～3は口縁上面が内傾する。4は水平に伸びる口縁の端部に浅い刻み目を施し、口縁直下には断面三角形の凸帯を貼り付ける。調整は3の外面に刷毛目が見られる他は器面が剥落して不明である。胎土は1は砂粒、2・3は砂粒と雲母、4は砂粒・雲母・カクセン石をそれぞれ含んでいる。焼成は1・3は良好だが、2はやや不良、4は不良で脆い。

5・6は甕形土器の底部片である。底面がやや窪む。5は内面と底面をナデ調整し、内面に指頭痕を残す。6は外面を縦方向の刷毛目調整、内面と底面をナデ調整する。ともに胎土には砂粒を含み、焼成は良好である。

7・8は鉢形土器である。ともに不安定な平底で、7は口縁が直線的に伸び、8は内弯しながら伸びている。7は内面をナデ調整する。8は調整不明。ともに胎土には砂粒を含む。とも

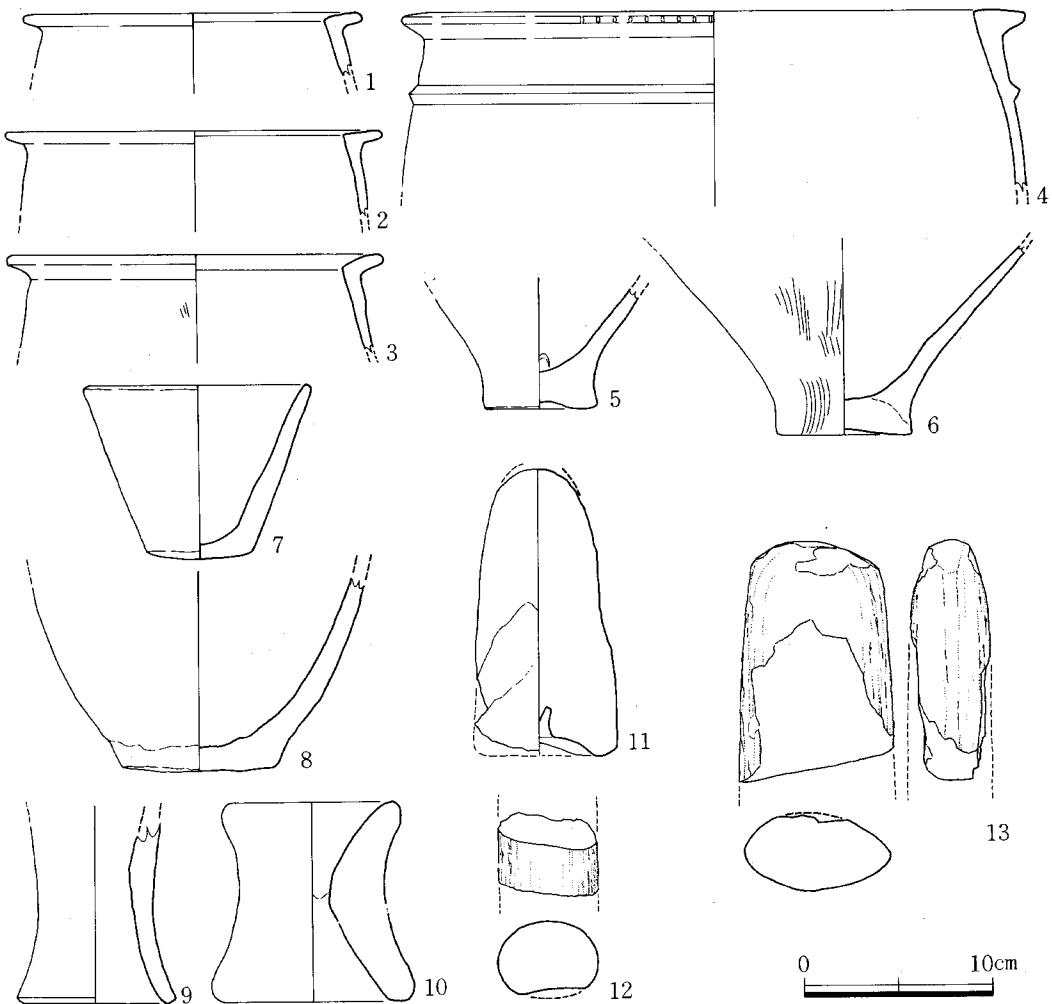


Fig. 55 160号土壙 (SK-160) 出土遺物実測図 (1/4)

に焼成は良好である。7は内面にのみ炭素が吸着している。これは土器焼成時に伏せ焼きするか、燃料を詰めるかしたためと思われる。

9・10は器台である。ともに破片資料から復元している。9は薄手で、調整不明。胎土に砂粒・雲母を含み、焼成は良好である。10は肉厚で、内面ナデ調整。胎土に砂粒を含み、焼成は不良である。

11は支脚である。砲弾形を呈し、中実である。底部を浅く窪ませ、そこに浅く穿孔している。加熱を受け、器面の損傷が著しい。胎土には砂粒・斜長石・カクセン石を含んでおり、焼成は良好である。

12・13はともに石斧である。12は脛部片、13は大型蛤刃石斧の基部片である。ともに敲打と研磨によって形を整えている。石材は玄武岩である。

これらの他に、出土した土器の中には弥生時代中期後半のものがあり、新旧の物が混在している。しかし、4・6・13などは土壤の床面から出土しており、この土壤の時期は中期前半と考えたい。

181号土壤 (SK-181) Fig. 56

VIII区の南端部、152号土壤の北隣に位置している。大小のピットに切られているが、このピットを掘り下げる作業中に、ピットの下部にこの土壤があるのに気付いた。覆土は汚れた地山土（黄褐色粘質土）である。西側は調査区の外へ続いている。規模は不明である。不整形形プランを呈する竪穴で、深さは約15cmと浅い。床面には浅いピットを掘るが、まとまりはない。

遺物は弥生土器片が少量出土した。

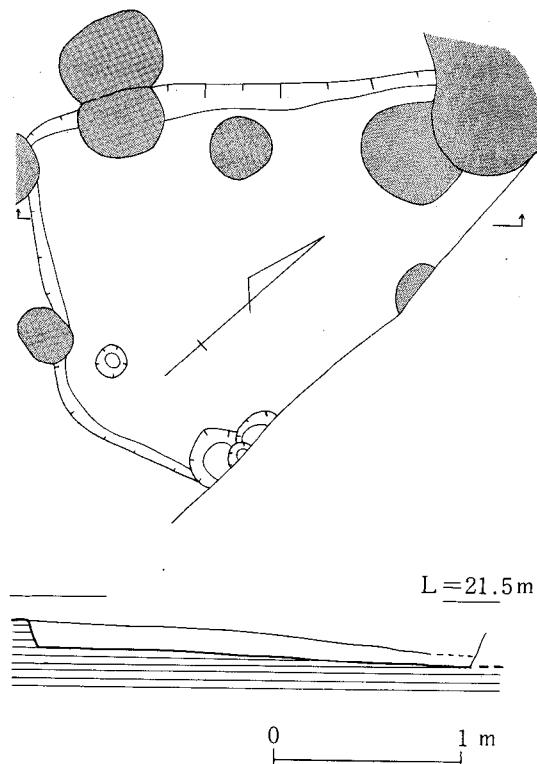


Fig. 56 181号土壤 (SK-181) 実測図 (1/40)

(3) 溝状遺構

95号溝状遺構 (SD-95) Fig. 57

II a 区の北端に位置する弧状の溝状遺構である。検出時には円墳の周溝ではないかと思われたが、覆土からは多量の弥生土器が出土した。東方の調査区外から来て、再び東方に消えている。溝幅は南に狭く、北に広い。南方で幅0.8m、北方で最大幅1.2mを測る。深さは10~20cmと浅く、北方に向かってやや深い。溝の底面にピット3個、また、溝で囲まれた東側部分にピット3個があるが、いずれも浅い。コンテナ2箱にのぼる弥生土器が出土した。

〈出土遺物〉 Fig. 58

1・2は甕形土器である。1は口縁部が明瞭に屈曲して開く。胴部はあまり張らない。器面は剥落して調整不明。胎土に砂粒を含み、焼成は良好。2は口縁が鋤先形に強く屈曲する。ヨコナデ調整で、胎土に砂粒・雲母を含み、焼成はやや不良である。3は広口の壺形土器で、口縁は鋤先形を呈するが内端のかえりは小さく、端部がやや垂れ気味である。内面と口縁上面はナデ調整だが、外面は器面剥落のため調整不明。胎土に砂粒・雲母を含み、焼成は良好である。4~7は底部で、いずれも断片的な資料である。4~6は甕形土器の底部か。調整は不明である。胎土に砂粒・石英・雲母を含み、焼成は不良である。7は壺形土器の底部である。かなり胴部が膨らむものと思われる。内外ナデ調整で、胎土に砂粒・石英・雲母を含み、焼成は良好である。8は蓋か。頭部がかなり横に張り出す。内面はヘラ削り、他は不明。胎土に砂粒・雲母を含み、焼成は不良である。9は器台である。薄手のつくりで、調整は不明。胎土に砂粒を多量に含み、焼成は良好である。

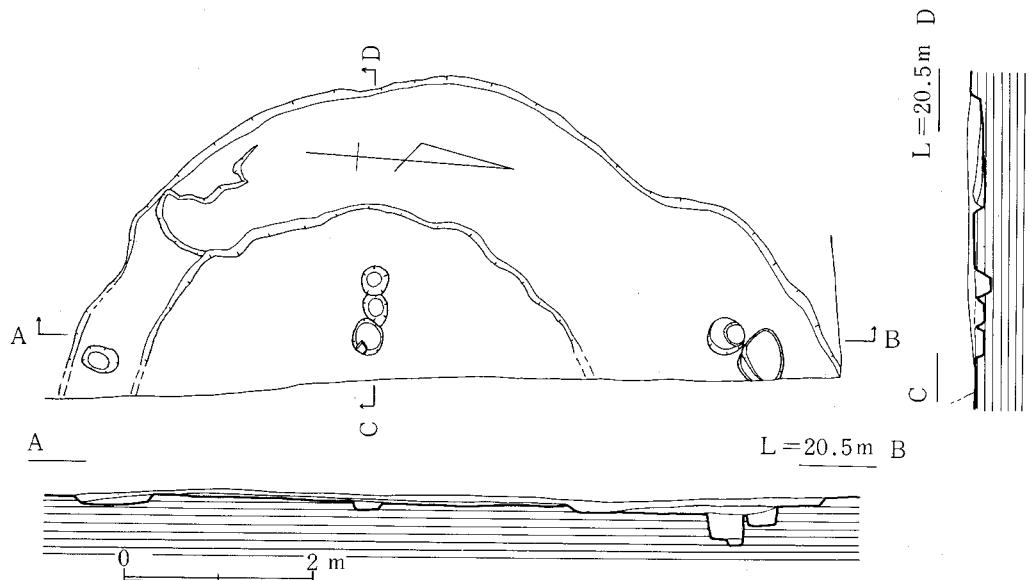


Fig. 57 95号溝状遺構 (SD-95) 実測図 (1/80)

各溝状遺構出土遺物 Fig. 59 PL. 7

95号溝 (SD-95) 以外の溝から出土した遺物をまとめた。1・2・5はII b区100号溝 (SD-100)、3はI a区80号溝 (SD-80)、4はVII区123号溝 (SD-123) からそれぞれ出土した。1・2は甕形土器の口縁部片で、逆L字形に屈曲する。2はヨコナデ調整。ともに胎土に砂粒を含

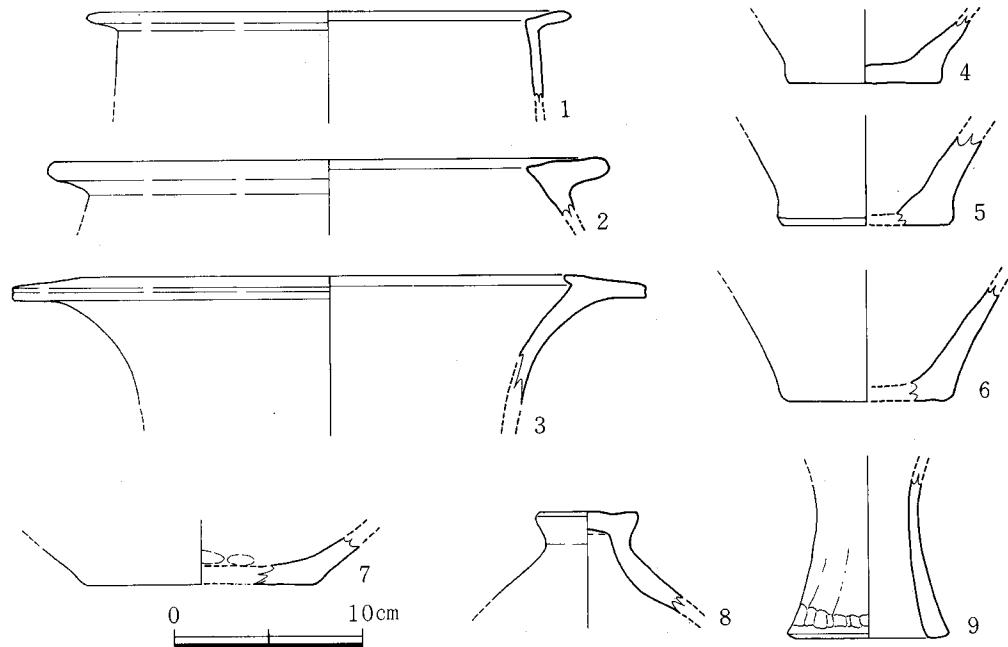


Fig. 58 95号溝状遺構 (SD-95) 出土遺物実測図 (1/4)

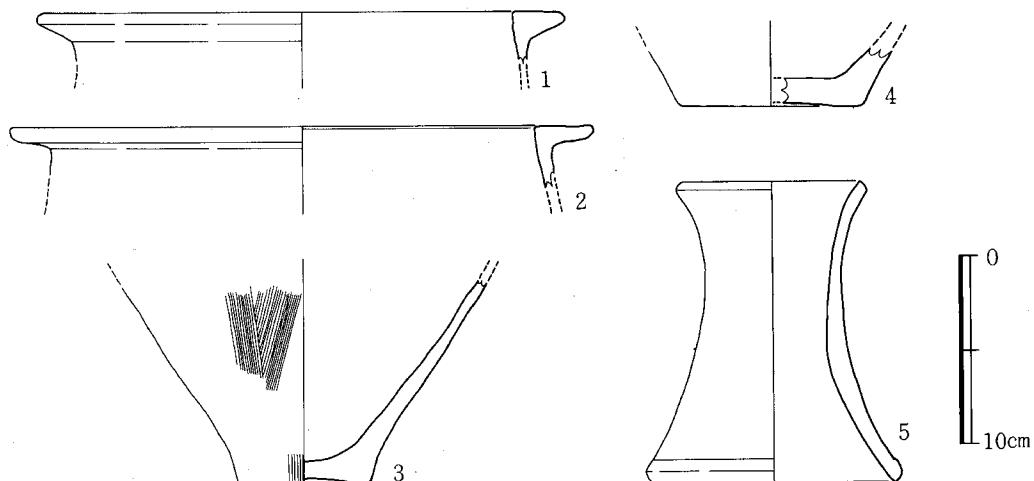


Fig. 59 各溝状遺構出土遺物実測図 (1/4)

み、焼成は良好。3・4は底部片である。3は甕形土器でやや上げ底。外面には縦方向の刷毛目調整を施す。3・4ともに胎土に砂粒を含み、焼成は良好である。5は器台である。薄手のつくりで、下端部がやや肥厚する。器表面が剥落している。胎土には砂粒を含み、焼成は良好である。

(4) 掘立柱建物

調査区の全域でピットを検出したが、調査区が狭いため掘立柱建物として捉え得たものは皆無であった。調査後、図面上で2棟の掘立柱建物を抽出した。

184号掘立柱建物 (SB-184) Fig. 60

VIII区北側部分に位置し、134号土壙 (SK-134) に先行する。また古墳時代の溝 (SD-133) に切られている。桁行方位をN-54°-Wにとる桁行2間以上、梁行1間の建物であろう。東側は調査区の外に伸びている。柱穴内覆土中から少量の土器片が出土しており、それらは弥生時代中期中頃の特徴を持っている。

185号掘立柱建物 (SB-185) Fig. 60

VIII区南端部付近に位置する。撓乱によって北側2個の柱穴が削られている。調査区内では桁行1間、梁行1間の建物と考えたが、東西を調査区側壁に挟まれており、さらに広がる可能性がある。主軸方位はN-82°-W。柱穴内覆土から弥生時代中期中頃の土器片が少量出土した。

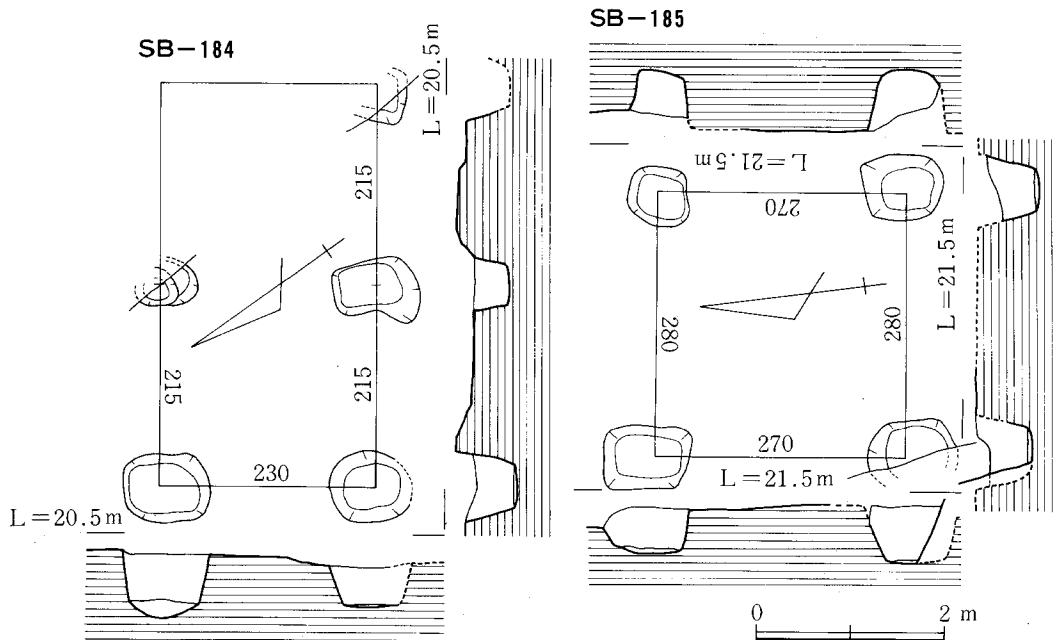


Fig. 60 184・185号掘立柱建物 (SB-184・185) 実測図 (1/80)

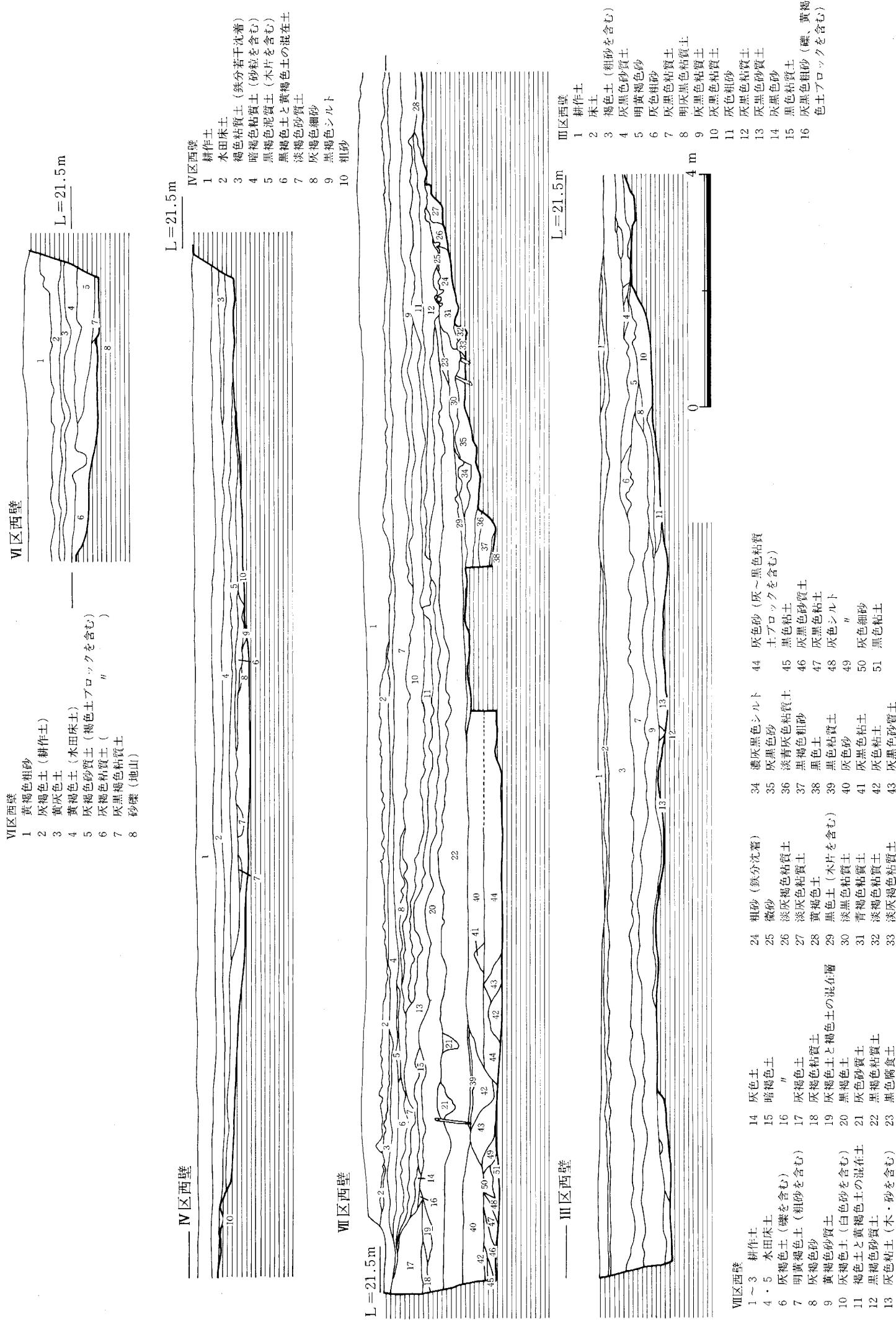


Fig. 6] 1 景河 || (SD=0) + 層断面測圖 (1/80)

3. その他の遺構と遺物

(1) 1号河川 (SD-01)

1号河川 (SD-01) Fig. 61・62

東流する谷状の河川で、III～IV区とVI～VII区の間に流れている。最大幅は65mを測る。この河川は2次調査（昭和59年）の際に確認された河川「SR-01」と「SR-02」の合流した河川に続くものであり、今回の調査の知見や出土した遺物も2次調査に齟齬しない。覆土からは弥生時代中期から8世紀代にかけての遺物が混在して出土した。遺物は主に上層の有機質土に含まれていたが、最下層には弥生時代中期の土器のみを包含する粘質土も一部に見られた。

また弥生時代の遺構群はこの河川を南限としており、これより南側のIV・VII区では検出されない。

1号河川内で、杭列3本が検出された。

杭列 <SA-82・109・110> Fig. 63 PL. 6

III区の82号杭列(SA-82)とVII区の110号杭列(SA-110)はともに、1号河川の北岸に打ち込まれており、一列につながるものと思われる。横木はないが、護岸用の施設であろう。110号杭列(SA-110)は計11本の杭を2列に打ち込んでいるが、この下からは多量の弥生土器が出土した。杭はこれらの埋没後に打ちられており、土器を貫いている。82号杭列は3本の杭を一列に打ち込んでいる。

109号杭列(SA-109)はVII区にあって、1号河川を斜めに横切るように打たれている。杭は計15本あって、真っ直ぐ一列に並んでいる。1号河川の埋没後に打たれており、その上限を8世紀代に求めることができる。

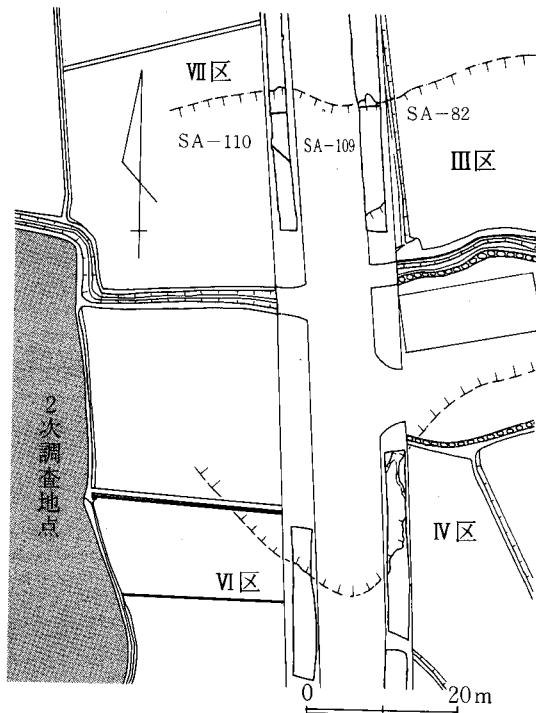


Fig. 62 1号河川 (SD-01) 位置図 (1/1,000)

1号河川 (SD-01) 出土遺物 Fig. 64～67 PL. 7～10

Fig. 64・65の1～13はVII区の110号杭列(SA-110)の下から出土したもので、単一時期のものである。1号河川の岸に一括して投棄された状態で出土している。1～7は壺形土器、8～11

は壺形土器、12は鉢形土器、13は蓋形土器である。

壺形土器は5を除いて破片資料である。1～4は口縁部片、6・7は底部片である。1～5は口縁が「く」字形にゆるく屈曲して外反するものである。屈曲部にははっきりとした稜はない。また、1・3は口径と胴部最大径がほぼ等しいが、4は胴部が大きく張り出している。いずれも器面が剥げ落ちており、調整は不明である。胎土にはいずれも砂粒・石英・斜長石を含み、更に1～3には雲母、5には赤色粒子(ベンガラ?)を含む。焼成はいずれも良好である。6・7は安定した平底で、胴部は内弯して立ち上がる。6は外面を刷毛目調整する。6・7とも胎土に砂粒・石英・斜長石・雲母を含み、焼成は良好である。

8～11は袋状口縁を持つ壺形土器である。いずれも頸部が短い。8以外は完形品である。8は口径が大きく、口縁部の屈曲が緩やかである。外面に僅かに刷毛目を残している。胎土には多量の砂粒・雲母を含み、焼成は不良である。9～11は口縁が鍵形にやや強く屈曲して口唇部が尖る。稜ははっきりしない。安定のよい平底である。9は頸部に断面三角形の凸帯を貼り付け、肩部以下を刷毛目調整する他はナデ調整。10も肩部に僅かに刷毛目が残る。11は小型で、

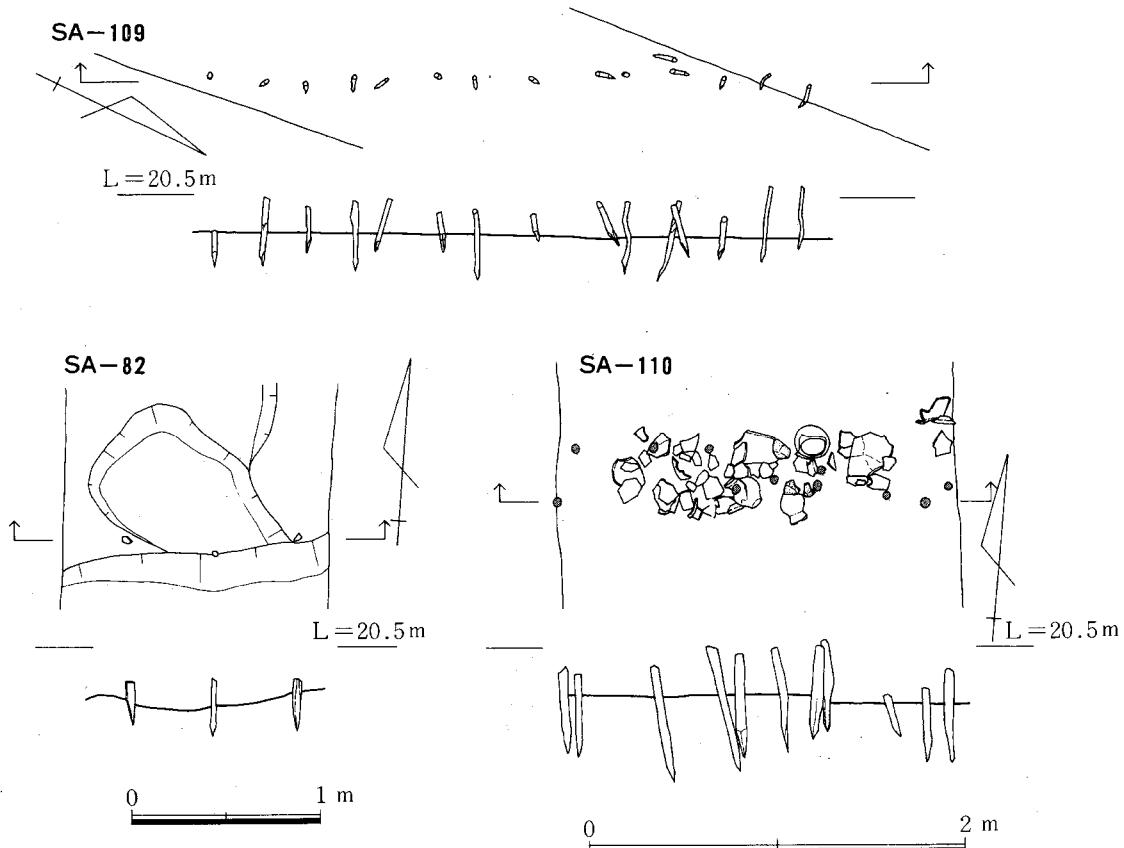


Fig. 63 1号河川内 杭列及び遺物出土状況実測図(SA-109・82は1/40、SA-110は1/20)

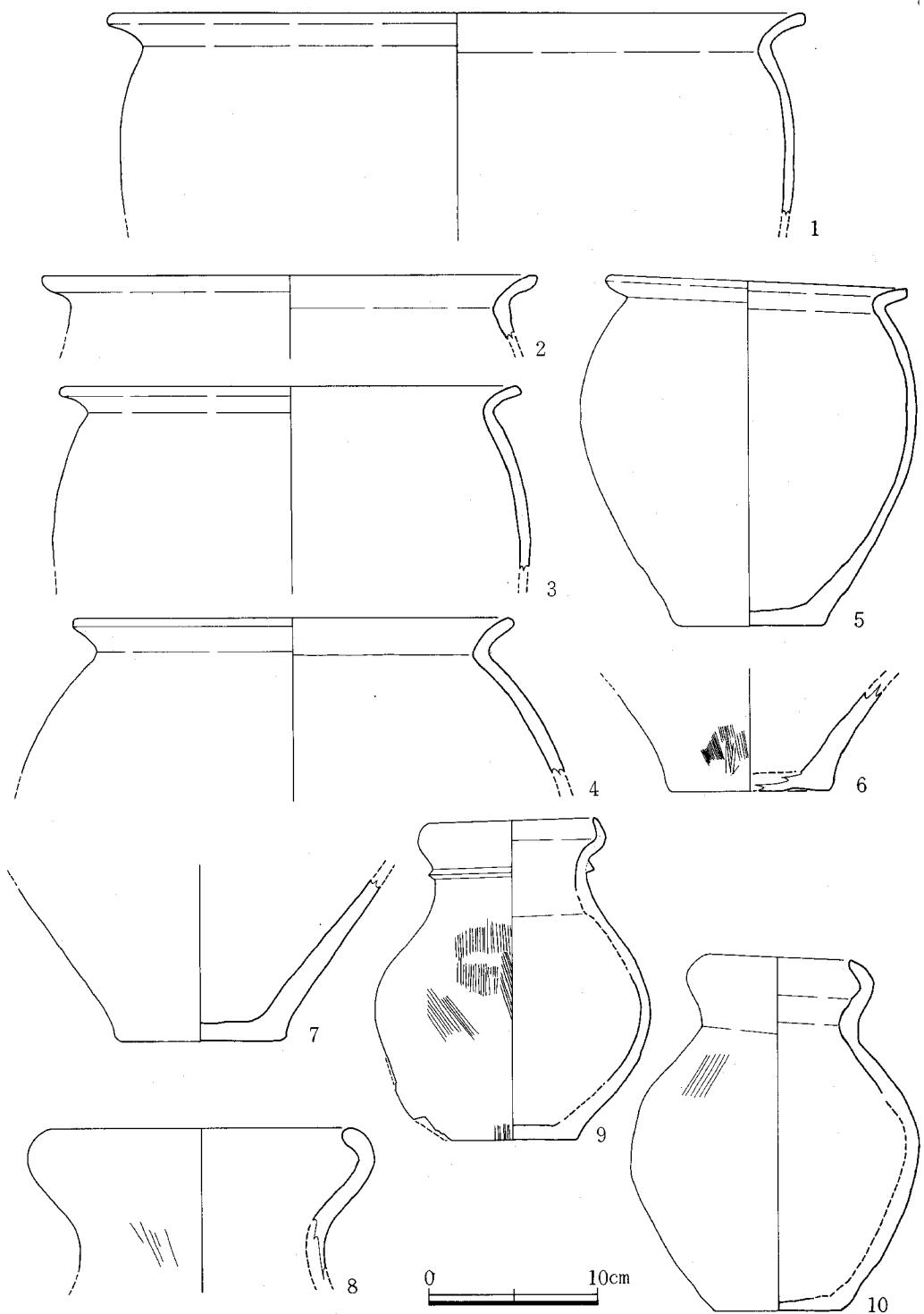


Fig. 64 1号河川 (SD-01) 出土遺物実測図・I (1/4)

胴部が下に膨らみどっしりとした感じを与える。頸部から肩部にかけて刷毛目を施し、胴部下半をヘラナデ調整する。口縁部はナデ調整。9～11とも胎土には砂粒を多量に含んでおり、焼成は良好である。

12は鉢形土器である。半球形の体部に平底がつく。器面は剥落して調整は不明である。胎土には砂粒を多量に含んでおり、焼成は良好である。

13は蓋である。上端部を欠いている。鉢形に真っ直ぐ開く。調整は不明。胎土に砂粒を含み、焼成は良好である。

これらの土器群は弥生時代中期末ないし後期初頭に位置づけられよう。

Fig.66・67 (14～35) は1号河川の覆土から出土したもので、弥生時代中期から奈良時代までのものが混在している。

14～20は弥生時代、21～23・26は古墳時代、24・25は奈良時代の土器である。

14は甕形土器の口縁部片で、「く」字形に屈曲して開き、頸部に断面台形の凸帯を貼り付ける。ヨコナデ調整する。胎土には砂粒を少量含み、焼成は良好である。15は壺形土器の口縁部で、口縁が鋤先形を呈し、端部にはヘラ状工具で刻み目を施す。また頸部には断面三角形の凸帯を貼り付ける。全面ナデ調整で、外面のみに丹塗りしている。胎土には砂粒が少なく、精製された素地土を用いている。焼成はやや不良である。16は袋状口縁壺で、頸部以上の部分が残っている。頸部は短く、口縁部に稜はない。器面が剥落し、水流によるローリングを受け、調整は不明であるが、おそらく丹塗りしていたものと思われる。胎土は15同様精良で、焼成は良好である。17は高壺形土器の脚部片である。裾に向かって広がる部分に相当し、断面M字形の凸帯を貼り付けている。ナデ調整の後、外面を丹塗りしている。内面にはシボリ痕がある。やはり胎土は精良で、焼成はやや不良である。18は小型の鉢形土器で、完形品。平底の塊形を呈し、底面ナデ調整以外は不明。胎土に多量の砂粒を含んでおり、焼成は良好である。19は蓋である。約1/2が残っている。口縁はやや外反して開き、端部寄りに2孔を穿つ。全面ナデ調整で、外面のみに丹塗りを施している。胎土は精良で、焼成はやや不良である。20は小型の甕形土器

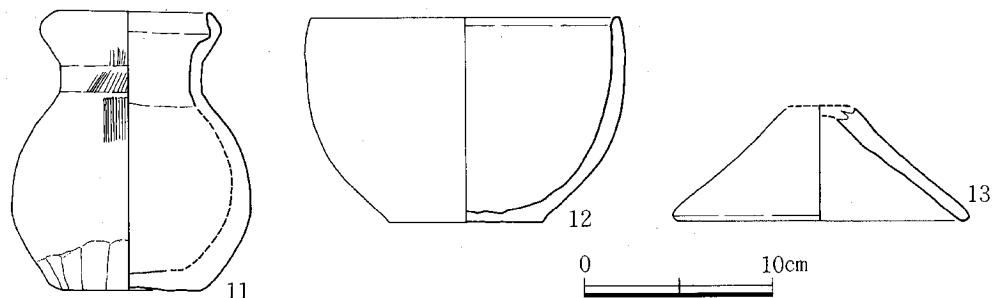


Fig.65 1号河川 (SD-01) 出土遺物実測図・II (1/4)

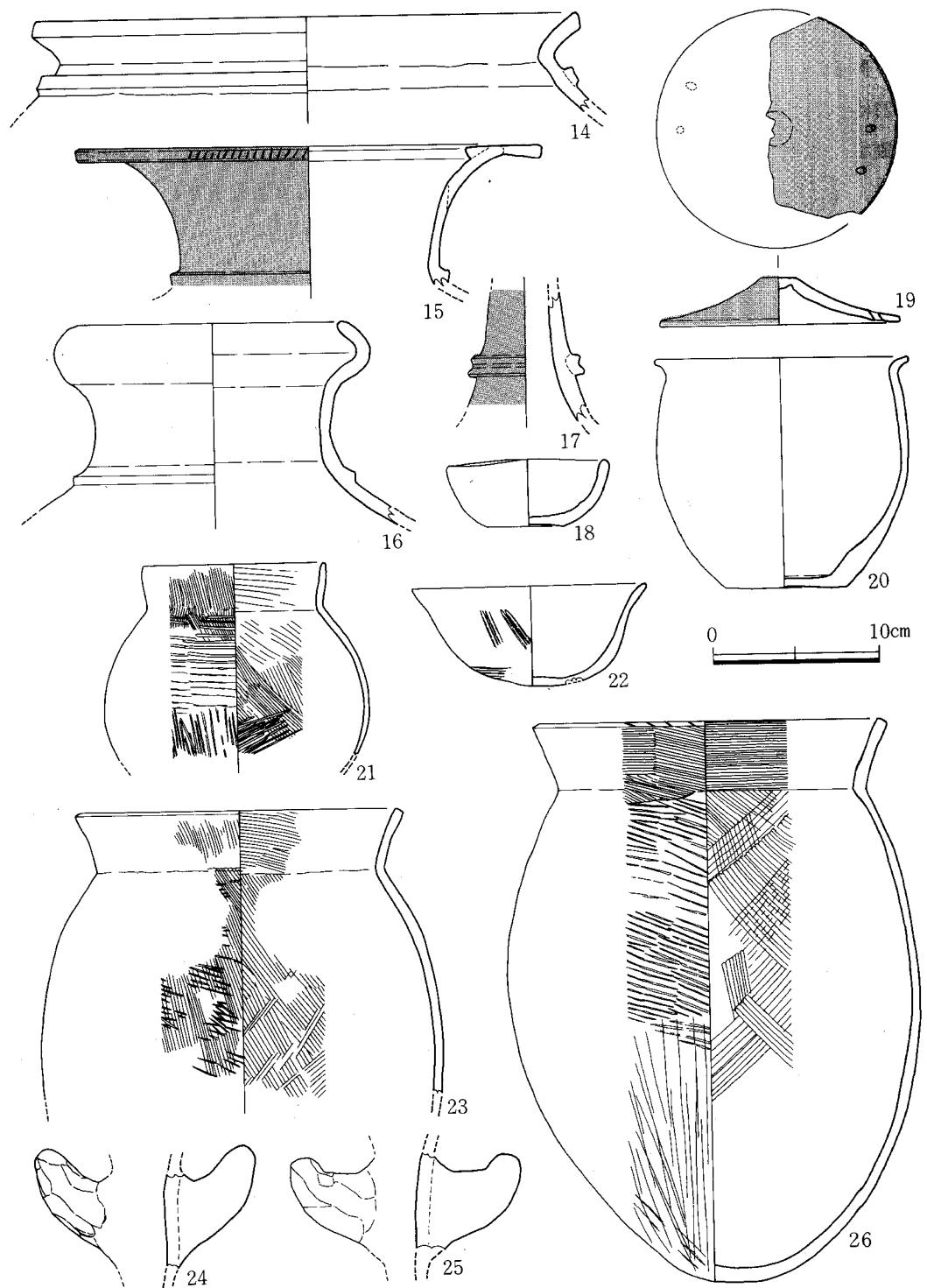


Fig. 66 1号河川 (SD-01) 出土遺物実測図・III (1/4)

である。口縁は緩く屈曲して、短く外反する。胴部はあまり張らずに安定のよい平底へ移行する。器面剥落のため調整不明で、胎土は多量の砂粒を含み、焼成は不良である。

21は口縁が直立気味に立つ小型の壺形土器である。底部を欠く。外面は胴部を叩いた後口縁を刷毛目調整し、胴下半部を板状工具でナデている。内面は粗い刷毛目の後、細かい刷毛目を施す。胎土には少量の砂粒・雲母を含み、焼成は良好である。22は壺形土器である。丸底に外反して伸びる口縁が付く。外面は粗い刷毛目の後、ヘラや指で研磨するようにナデしている。内面はヘラ・指頭によるナデ・ケズリ調整を加えている。胎土は砂粒・雲母を少量含み、焼成は良好である。23・26は壺形土器である。ともに口縁が直立気味に立ち、胴部があまり張らずに丸底へ移行する。23は外面が叩き成形の後、縦位の刷毛目、内面は刷毛目調整。26は外面が口唇部を含めて全面叩き成形し、口縁部を横位の刷毛目、胴部下半を板状工具でナデ調整する。内面は口縁が細かい刷毛目、胴部がやや粗い刷毛目調整である。胎土にはともに砂粒を含み、焼成は23がやや不良で、26は良好である。

24・25は甌の把手で、外から貼り付けている。ヘラによる成形で、内器面はヘラケズリしている。胎土に砂粒を含み、焼成は良好である。

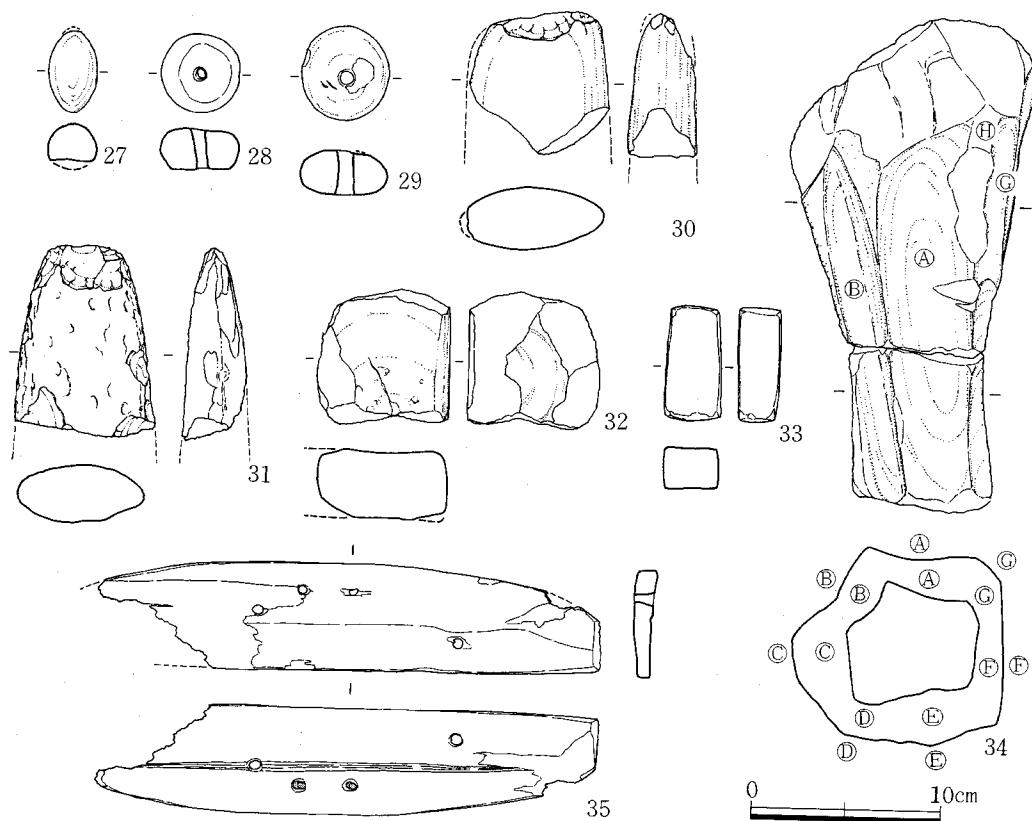


Fig.67 1号河川 (SD-01) 出土遺物実測図・IV (1/4)

27～29は土製品である。27は投弾で、胎土に砂粒・雲母を含む。28・29は紡錘車で胎土は精良である。27～29とも焼成は良好である。

30・31は石斧の基部片である。30は太形蛤刀石斧であろう。玄武岩製。31は安山岩製。ともに敲打と研磨によって成形している。32～34は砥石である。32は大型品の一部で両面を使用している。33は小型品で、表裏両平坦面が研磨されてやや窪んでいる。34は大型品でほぼ完全な姿を残している。上端に向かって太くなり、研磨面を実に7面有している。B面は特に研ぎ込みが深く、断面が浅いV字形になる。砥石はいずれも硬質砂岩を素材にしている。

35は木製品である。一部を欠くが、平面形が橢形を呈するものと思われる。4ヶ所に穿孔しているが、その配置はアンバランスである。そのうちの2孔には植物の纖維が詰まっている。片面のみが磨滅している。木蓋等の一部であろうか。

(2) 81号河川 (SD-81) 付図参照

羽根戸原C遺跡群の北端を限る河川である。I a区・VII区の北端でその縁辺の部分を確認したのみだが、北に向かってかなり急激に下っている。奈良時代の須恵器が覆土中より出土しており、埋没は少なくとも奈良時代以降である。また鉄滓がまとまって出土した。

(3) 古墳時代・古代の遺構 付図参照

古墳時代以後の遺構には溝状遺構8条がある。その他にも須恵器等を出土するピットがあるが、それらの整理が終了しておらず、掘立柱建物等として把握するに至っていない。古墳時代の溝は、II b区の南寄りに検出したSD-42・43と、VII区南寄りのSD-162で、おそらく一本につながるものである。覆土中からは6世紀代の特徴をもつ須恵器小片などが出土している。古代の溝はI b区SD-72、II a区SD-92、VII区SD-125・131・133である。72と125、92と133が各々一連の溝か。溝覆土からは6～8世紀代の須恵器の小片や鉄滓が出土した。

(4) ピット・包含層出土の遺物 Fig. 68 PL. 8～10

1～4は鉢形土器である。いずれも安定の良い平底から外向内弯して体部が立ち上がる。1・2は口縁部下に断面三角形の凸帯を貼り付ける。凸帯は垂れ気味である。1は外面に刷毛目調整を行ったあと、研磨してそれをナデ消している。内面はナデ調整である。2は刷毛目は残っていないが1と同様の調整である。1・2は胎土に砂粒・石英・雲母を含み、焼成は良好である。3は外面がナデ調整、内面がヘラ削り。4は器表面が剥落しているが、内面にナデ調整の痕が残る。3・4は胎土に砂粒・石英・斜長石を含む。焼成は3が不良で、4は良好。

5は無頸壺である。体部が扁球形をなし、安定の悪い平底が付く。器表面の残りが悪いが、

ナデ調整か。胎土には砂粒・石英・雲母を含み、焼成は良好である。

6は小形の塊形土器である。丸底で、体部は外向内弯して立つ。ナデ調整。胎土に砂粒・石英・雲母を含み、焼成は良好である。

7は大型蛤刃石斧の刃部片である。敲打・研磨による成形である。石材は玄武岩である。8・9は砥石片である。8は小型品で、四面を研磨している。9は大型品の一部で、三面に使用痕が残る。8・9ともに粘板岩を用いている。10は台石である。球状の花崗岩転石を用いて、任意に敲打を加えている。

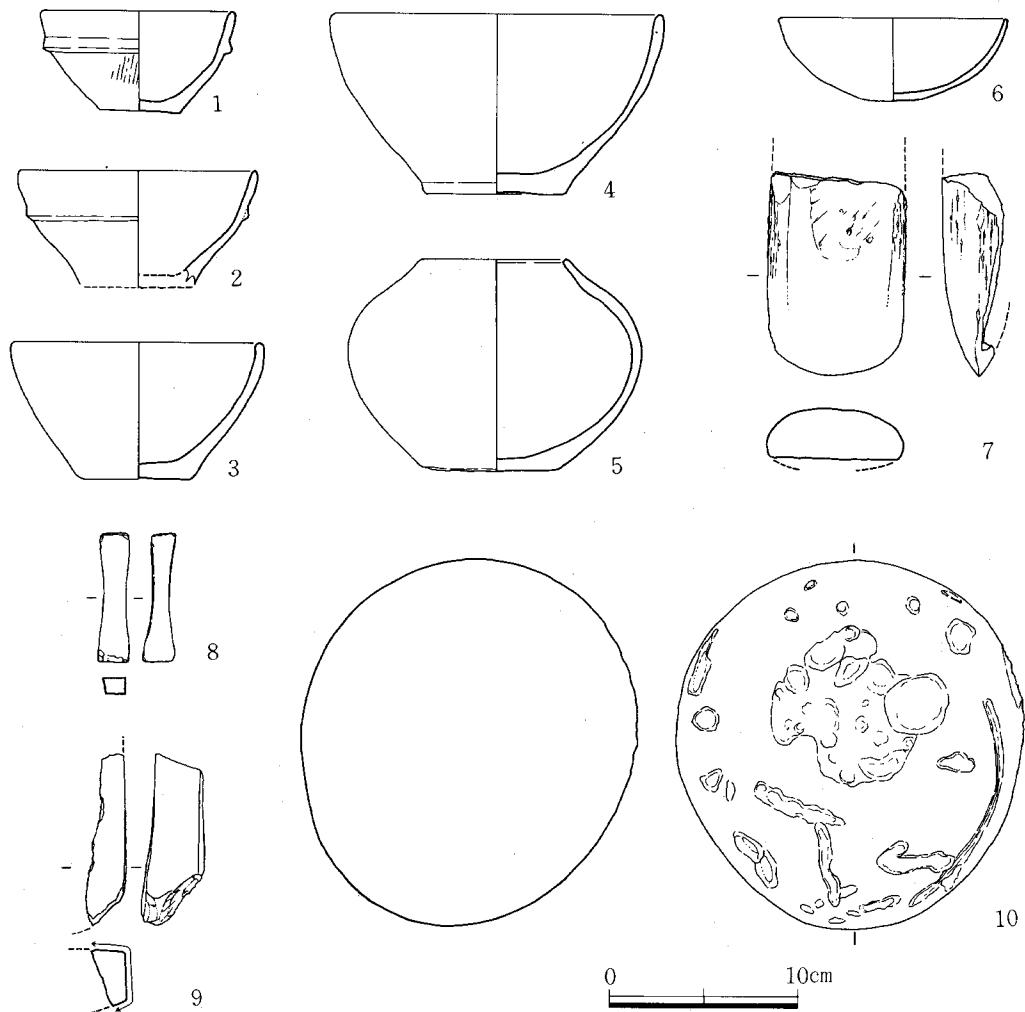


Fig. 68 ピット・包含層出土遺物実測図 (1/4)

IV. おわりに

二次調査と今回の調査によって、羽根戸原C遺跡群の立地する扇状地内には大きく2本の東流する河川があって、台地を3分していることが知れる。弥生時代の遺構群はこのうちの北側の台地に展開している。検出した遺構には住居跡22軒、土壙30基、溝状遺構20条、掘立柱建物2棟があり、弥生時代中期中頃～後半を中心に、一部後期中頃まで及ぶ。

22軒の住居跡は全掘したものがひとつもないが、調査区内の形状から判断すると円ないし隅丸方形を呈すもの10軒、方形のもの12軒である。うち明確に時期をおさえることができるのは12軒で、弥生時代中期中頃では円形5・方形1、中期後半では円形1・方形3、後期中頃は方形2である。住居跡内からは炉に関わる遺構を検出できなかったが、集落の北の河川わきには焼土層をもつ土壙SK-128があり、共同炊飯の場を想定することができる。また円形住居跡にベッド状の高まりをもつものが3軒あり注8(SC-53、56、176)、宝台遺跡・那珂遺跡などでの調査例に追加できよう。これらの住居跡がなす集落構成は、今回の限られた調査範囲からは明確にしえず、今後の調査の課題となろう。ただ、53号住居跡(SC-53)は直径が10mを越える大型住居跡であり、宝台遺跡などでの調査例からして、このような大型住居跡が中心となって4～5軒の集落単位をなし、それらが集合してより大きな集落を構成することが想定できよう。

集落に伴う墓地は二次調査で検出された甕棺墓10基が考えられる。二次調査では調査区の北寄りに甕棺墓地が形成されており、さらに北に延びることが予想されている。しかし今回の調査区では甕棺墓が検出されず、これらの墓地は集落を避けて台地の西寄りに広がっているものと考えられる。また、小河川を挟んで北に隣する羽根戸原B遺跡群でも、宅地造成の際に甕棺墓が発見されており、当集落との関連が考えられる。注10

注

1. 昭和60・61年度福岡市教育委員会調査 昭和63年度以降に報告予定
2. 福岡市教育委員会1986『吉武遺跡群Ⅰ』福岡市埋蔵文化財発掘調査報告書第127集
" " 『吉武高木』福岡市埋蔵文化財発掘調査報告書第143集
3. 福岡県教育委員会1981『羽根戸古墳群』
昭和60～62年度福岡市教育委員会調査 本年度に報告予定
4. 福岡市歴史資料館1977『緊急発掘された遺跡と遺物』
5. 昭和58年度福岡市教育委員会調査 田中寿夫氏ご教示
6. 福岡市教育委員会1986『羽根戸遺跡』福岡市埋蔵文化財発掘調査報告書第134集
7. 赤色顔料の分析は福岡市埋蔵文化財センターによる。
8. 日本住宅公団1970『宝台遺跡』
9. 福岡市教育委員会1987『那珂遺跡』福岡市埋蔵文化財発掘調査報告書第153集
10. 6に同じ
11. 横山邦継氏のご教示による

遺構 番号	調査区	種類	平面形	法量(m)			時期	備考	Fig.	PL.
				短辺	長辺	深さ				
SD-01	III~IV VI~VII	河川	—	幅64	0.8~1.2		弥生時代中期~古代	東流する	62、63、 65~68	
SD-02	III	溝	—	幅0.5	0.2		弥生時代中期中頃	東流→南流		
SD-03	III	SC-83壁溝	—	幅0.1	0.05		(弥生時代)			
SD-05	III	SC-83壁溝	—	幅0.2	0.05		(弥生時代)			
SK-07	III	土壤	隅丸方形	1.1	1.2	0.3	(弥生時代)			
SK-09	III	土壤	不整方形	1.0	1.9	0.4	弥生時代中期中頃		37、38	
SK-10	III	土壤	不整長方形	2.0	3.0	0.3	弥生時代中期後半		37、38	
SD-12	III	溝	—	幅0.6	0.1		(弥生時代中期)	北側削平		
SD-13	III	溝	—	幅0.2	0.1		(弥生時代)			
SD-15	III	溝	—	幅0.1	0.05		(弥生時代)	西で切れる		
SK-16	III	土壤	長円形	ø1.0~1.2	0.2		弥生時代中期中頃			
SD-18	III	溝	—	幅0.6~1.1	0.2~0.3		(弥生時代)	南側削平		
SC-19	III	竪穴住居跡	円~隅丸方形	ø5.0	0.1		弥生時代中期中頃	SC-20に先行	4、5	4-1
SC-20	III	竪穴住居跡	円~隅丸方形	ø4.4	0.05		弥生時代中期中頃		6、7	4-2
SK-21	III	土壤	(長円形)	—	0.05		弥生時代後期前半		37、38	
SD-22	III	(溝)	—	—	0.3		古代	南で切れる		
SC-23	III	竪穴住居跡	—	—	0.06		弥生時代後期中頃		8、7	4-3
SC-24	III	竪穴住居跡	方形	—	3.7	0.05	(弥生時代)		11、10	4-4
SK-30	II b	土壤	不整方形	(3.2)	4	0.6	弥生時代中期中頃	2層に分かれ遺物多量	39~41	6-1
SK-34	II b	土壤	方形	2.2	2.6	0.2	弥生時代後期中頃		42、43	
SC-36	II b	竪穴住居跡	方形	(4)	(5)	0.1	弥生時代後期中頃	SK-34に先行	12、13	4-5
SK-41	II b	土壤	円形	ø1.6	0.9		弥生時代中期後半		42、43	
SD-42	II b	溝	—	幅1.0~1.1	0.2		古墳時代			
SD-43	II b	溝	—	幅0.3~0.5	0.1		古墳時代			
SK-46	II b	土壤	円形	ø1.5~1.6	0.9		弥生時代中期後半		42、43	
SD-47	II b	溝	—	幅0.3~0.4	0.05		弥生時代中期中頃			
SK-48	II b	土壤	不整方形	2.0	—	0.1	不明			
SK-49	II b	土壤	不整長円形	0.5	1.2	0.5	不明			
SK-52	II b	土壤	長円形	0.9	—	0.05	(弥生時代中期)			
SC-53	II b	竪穴住居跡	円~隅丸方形	ø10.0	0.1		弥生時代中期中頃	建て替え	14、16	
SC-56	II b	竪穴住居跡	円形	ø6.6	0.1		弥生時代中期後半	ベッドをもつ	15、16	4-6
SK-57	II b	土壤	不整長方形	0.4~0.5	2.4	0.3	弥生時代中期後半	SC-56に伴う		

Tab.1 羽根戸原C遺跡群4次調査 遺構一覧表・I

遺構番号	調査区	種類	平面形	法量(m)			時期	備考	Fig.	PL.
				短辺	長辺	深さ				
SC-59	II b	竪穴住居跡	不明	—	—	0.1	(弥生時代中期)	SC-56に先行	17	
SK-62	II b	土壤	細長	0.8	—	0.5	弥生時代中期後半		42、43	
SK-63	II b	土壤	長円形	1.0	1.4	0.3	(弥生時代)		42、43	
SC-65	II b	竪穴住居跡	(方形)	—	—	0.1	(弥生時代)	SC-68に先行	18	
SC-68	II b	竪穴住居跡	方形	—	—	0.06	弥生時代中期後半		19、22	
SD-72	I b	溝	—	幅0.4~0.8	—	0.3	古代	北流する		
SD-75	I b	溝	—	幅0.5~1.5	—	0.05	(弥生時代中期)			
SC-79	I b	竪穴住居跡	方形	3.2	4.0	0.1	(弥生時代中期後半)		20、22	
SD-80	I a	溝	—	幅0.5~1.0	—	0.2	(弥生時代)		59	
SD-81	I a	河川	—	—	—	—	~古代			
SA-82	III	杭列	—	—	—	—	—		64	
SC-83	III	竪穴住居跡	円形	(φ 5.0)	—	—	(弥生時代中期中頃)	床面削平	36	
SK-90	V	土壤	(方形)	2.1	—	0.4~0.5	不明			
SK-91	II a	土壤	長方形	2.0	3.3	0.05	(弥生時代中期後半)		44	
SD-92	II a	溝	—	幅0.6	—	0.25	古代			
SD-93	II a	溝	—	幅0.3	—	0.05	弥生時代後期前半			
SD-95	II a	弧状溝	—	幅0.8~1.2	0.1~0.2	—	弥生時代後期前半		57、58	
SK-96	II a	土壤	不整長円形	1.0	2.4	0.1	(弥生時代)			
SD-100	II a	溝	—	幅0.3	—	0.05	弥生時代中期中頃	北で切れる	59	
SK-103	II a	土壤	(不整円形)	(φ 1.9)	—	0.5	弥生時代中期後半	遺物多量に出土	44、45	
SA-109	V II	杭列	—	—	—	—	8世紀以降		64	
SA-110	V II	杭列	—	—	—	—	弥生時代後期以降		64	
SD-111	V II	溝	—	幅0.5~0.9	—	0.05	弥生時代中期中頃			
SK-112	V II	土壤	長円形	1.3	1.8	0.3	弥生時代中期後半		44	
SK-113	V II	(土壤)	—	—	—	0.1	不明	一部を検出		
SK-116	V II	土壤	—	—	(0.3)	—	弥生時代中期後半	一部を検出		
SD-121	V II	溝	—	幅0.7~1.0	—	0.15	不明	西で切れる		
SD-122	V II	溝	—	幅0.3	—	0.05	不明	東で切れる		
SD-123	V II	溝	—	幅0.1~0.3	—	0.2	弥生中期後半		59	
SD-125	V III	溝	—	幅2.3~3.0	—	0.2	古代			
SD-126	V III	溝	—	幅0.9~1.7	—	0.1	(弥生時代)			
SK-128	V III	土壤	(不整形)	—	—	0.4	弥生時代中期後半	焼土層をもつ	46、47	6-2

Tab.2 羽根戸原C遺跡群4次調査 遺構一覧表・II

遺構 番号	調査区	種類	平面形	法量(m)			時期	備考	Fig.	PL.
				短辺	長辺	深さ				
SD-129	V III	溝	—	幅0.2~0.5	0.05	(弥生時代)				
SD-130	V III	溝	—	幅0.9~1.4	0.1	(弥生時代中期)				
SD-131	V III	溝	—	幅0.7	0.3	古墳時代				
SD-133	V III	溝	—	幅1.0	0.2	古墳時代				
SK-134	V III	土壙	不整方形	3.5	4.5+α	0.15	弥生中期中頃	遺物多量に出土	48、49	6-4
SD-136	V III	溝	—	幅0.6~1.0	0.3	(弥生時代)				
SC-140	V III	竪穴住居跡	隅丸方形	4.1+α	4.6	0.1	弥生時代中期後半		21、22	5-1
SC-141	V III	竪穴住居跡	方形	3.0+α	5.12	0.1	弥生時代中期中頃		23、24	5-2
SC-142	V III	竪穴住居跡	円形	φ 6.6	0.2	(弥生時代中期中頃)	SC-141に先行	25、26	5-3	
SC-144	V III	竪穴住居跡	方形	—	—	0.2	(弥生時代中期)	SK-145に先行	27	
SK-145	V III	土壙	不整形	—	—	0.2	弥生時代中期後半	遺物多量に出土	50~52	6-3
SK-150	V III	土壙	長円形	0.7	1.3	0.2	弥生時代中期後半	SK-145に伴う		
SK-152	V III	土壙	長円形	1.2+α	1.6	0.6	(弥生時代中期)		53	
SK-154	V III	土壙	円形	φ 2.0	0.3	弥生時代中期中頃			53、54	6-5
SC-155	V III	竪穴住居跡	円形	φ 4.3	0.1	(弥生時代中期中頃)	SK-154に先行	28、29	5-4	
SK-157	V III	土壙	双円形	1.1	2.4	0.1	(弥生時代)	SK-159に先行		
SC-158	V III	竪穴住居跡	(円形)	—	—	0.05	(弥生時代)	SC-155に先行	30	
SK-159	V III	土壙	長円形	1.0	1.7	0.2	(弥生時代)			
SK-160	V III	土壙	長円形	1.2	3.7	0.5	弥生時代中期前半		53、55	6-6
SC-169	V III	竪穴住居跡	方形	3.0	4.3	0.15	(弥生時代中期)		32、31	5-5
SC-170	V III	竪穴住居跡	(方形?)	—	—	0.2	(弥生時代)	SC-169に先行	33	5-5
SK-172	V III	土壙	—	—	—	(0.4)	(弥生時代中期)	一部を検出		
SC-174	V III	竪穴住居跡	方形	—	—	0.2	弥生時代中期中頃	一部を検出	34	
SD-175	V III	溝	—	幅0.2	0.05	(弥生時代)				
SC-176	V III	竪穴住居跡	円~隅丸方形	(φ 7.2)	0.1	(弥生時代)	SC-174に先行	35	5-6	
SK-181	V III	土壙	方形	2.1+α	—	0.15	(弥生時代)		56	
SA-182	V III	杭列	—	—	—	—	不明			
SA-183	V III	杭列	—	—	—	—	不明			
SB-184	V III	掘立柱建物	—	2.3	(4.3)	—	弥生時代中期中頃		60	
SB-185	V III	掘立柱建物	—	2.7	(2.8)	—	弥生時代中期中頃		60	

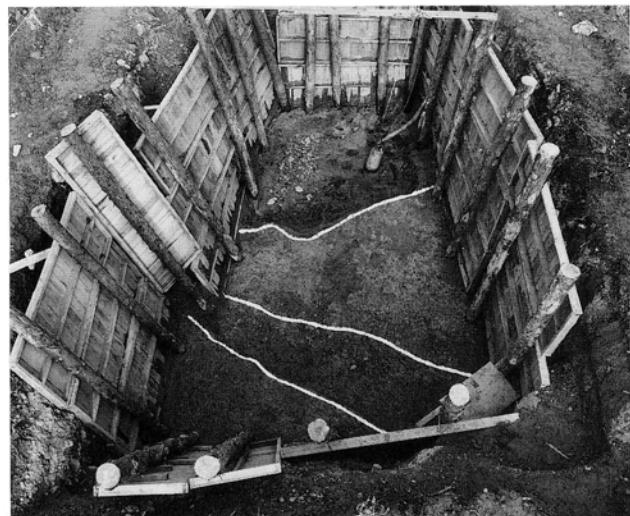
Tab.3 羽根戸原C遺跡群4次調査 遺構一覧表・III

()は、全掘できずに、平面形・法量のはっきりしないもの。また出土土器が少なく、時期を確定できないもの。

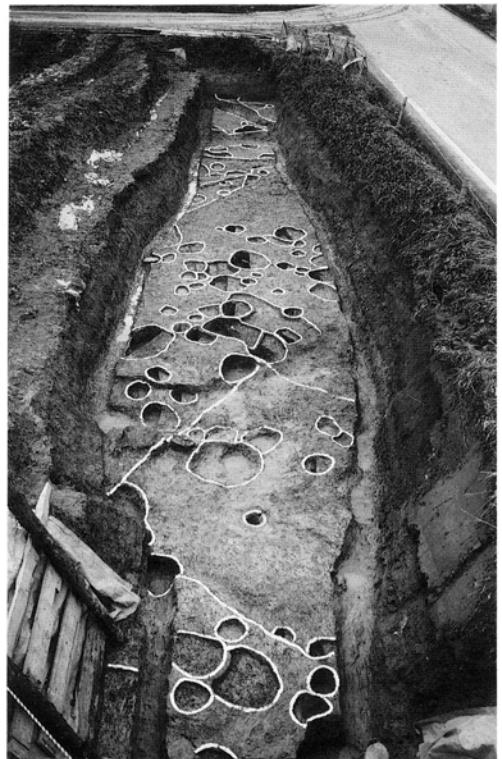
PLATES



1. 羽根戸原C遺跡群遠景 東南から



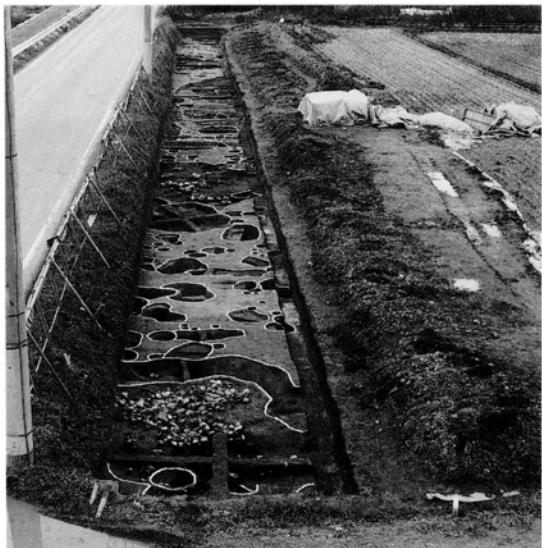
2. I a区全景 南から



3. I b区全景 北から



1. II a 区全景 北から



2. II b 区全景 南から



3. III区全景 北から



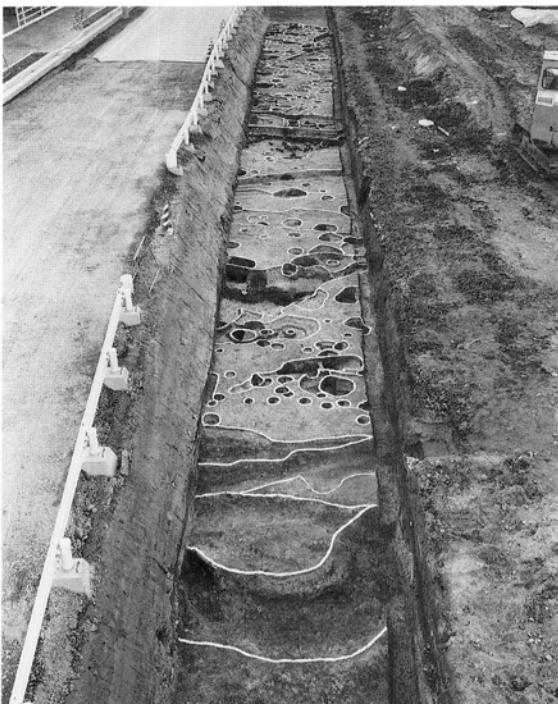
4. IV区北半部 南から



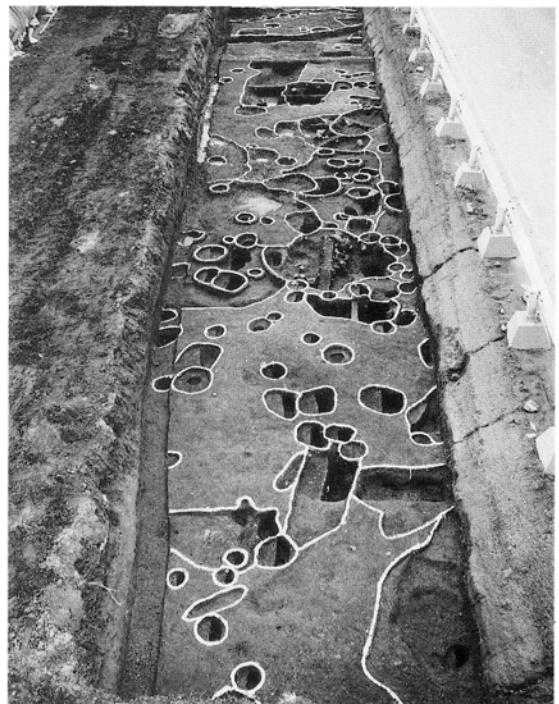
1. VI区全景 北から



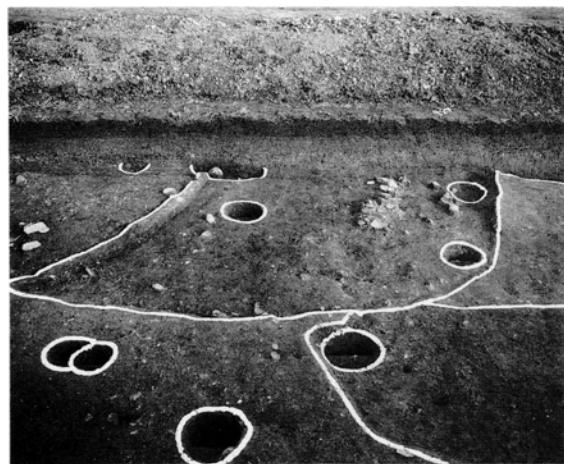
2. VII区全景 南から



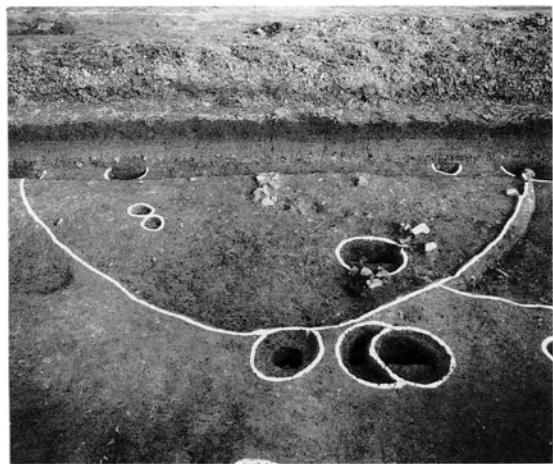
3. VIII区北半部 北から



4. VIII区南半部 南から



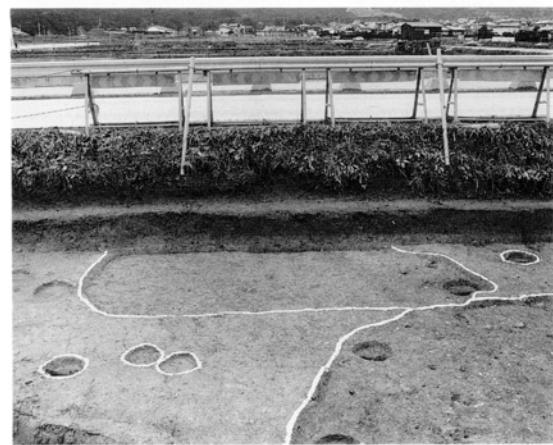
1.19号住居跡 (SC-19) 西から



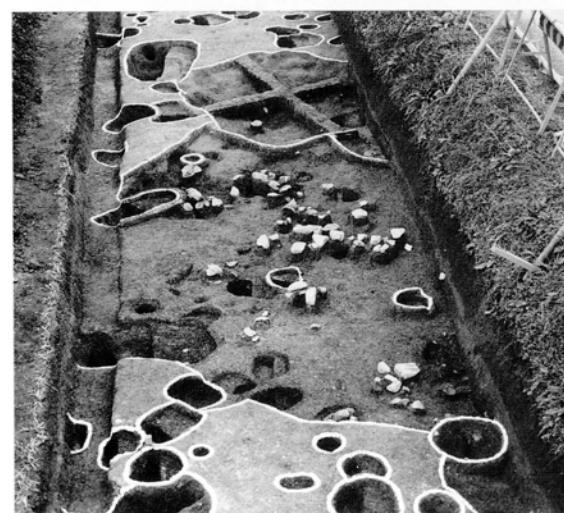
2.20号住居跡 (SC-20) 西から



3.23号住居跡 (SC-23) 西から



4.24号住居跡 (SC-24) 東から



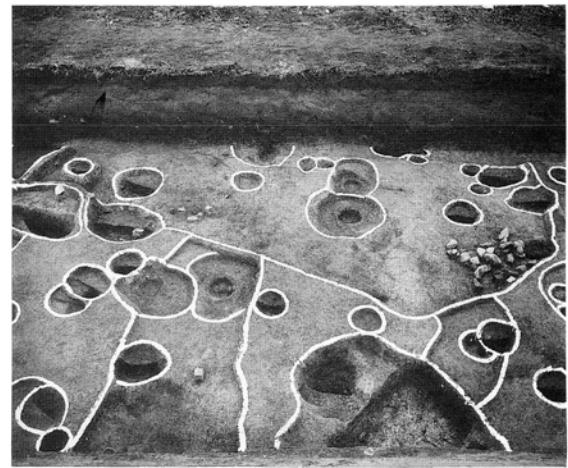
5.36号住居跡 (SC-36) 北から



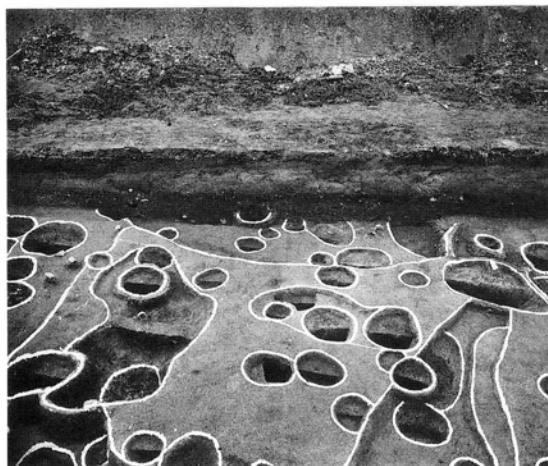
6.56号住居跡 (SC-56) 南から



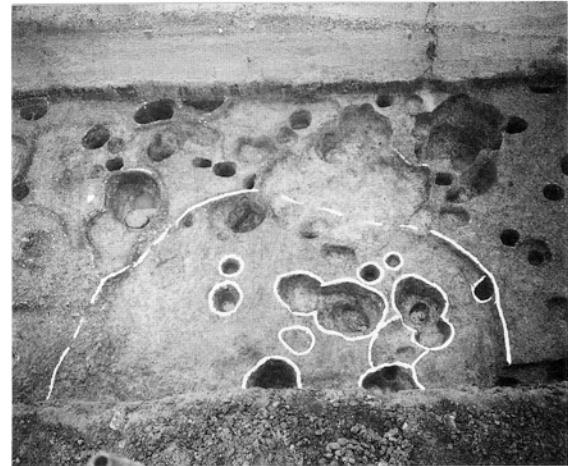
1. 140号住居跡（SC-140）西から



2. 141号住居跡（SC-141）東から



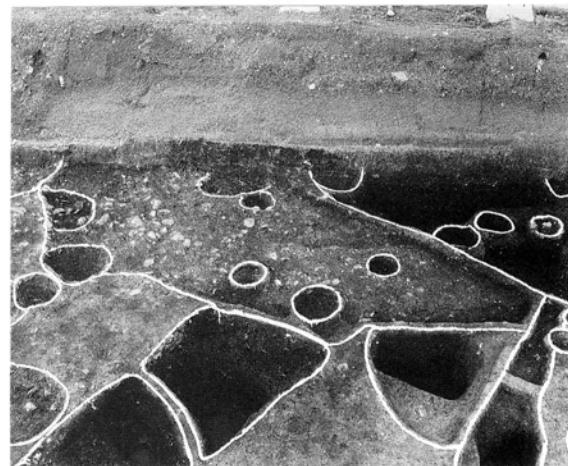
3. 142号住居跡（SC-142）東から



4. 155号住居跡（SC-155）西から



5. 169号・170号住居跡（SC-169・170）北西から



6. 176号住居跡（SC-176）西から



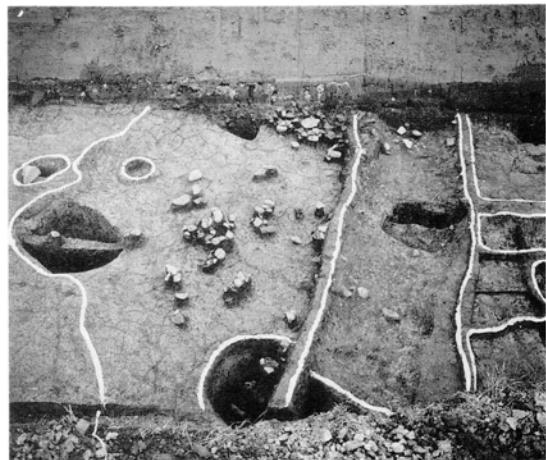
1. 30号土壤 (SK-30) 東から



2. 128号土壤 (SK-128) 西から



3. 145号土壤 (SK-145) 西から



4. 134号土壤 (SK-134) 西から

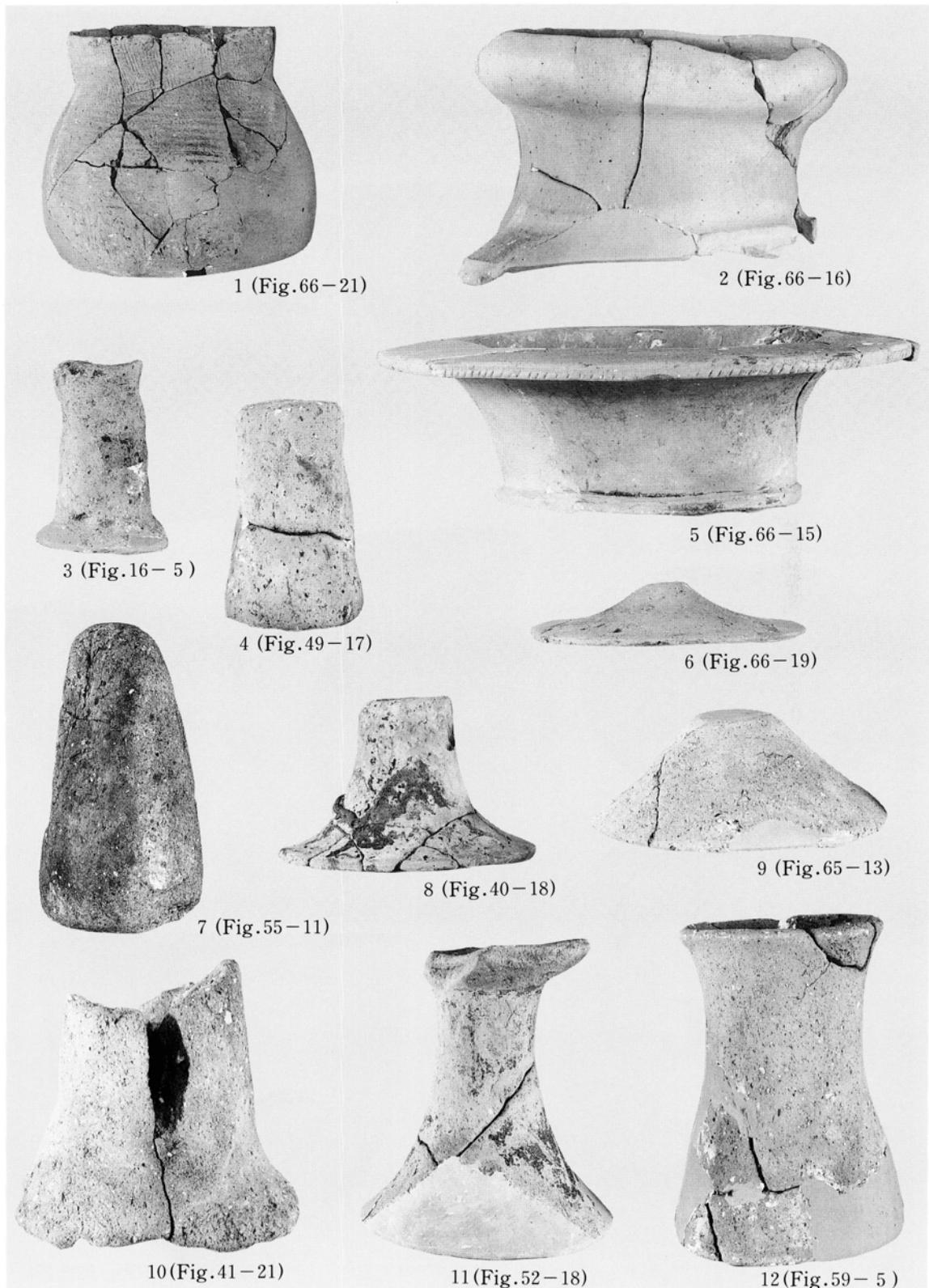


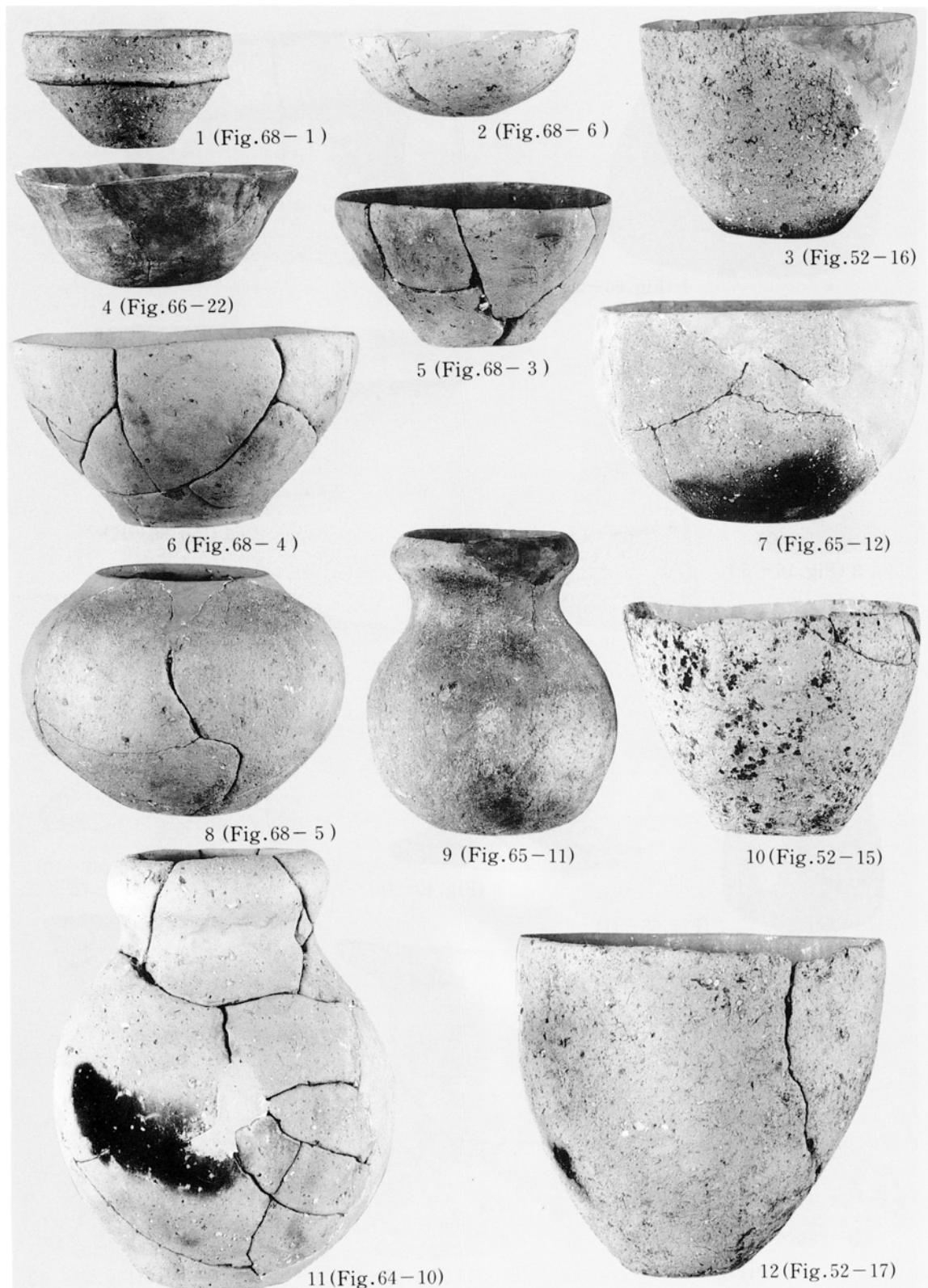
5. 154号土壤 (SK-154) 西から

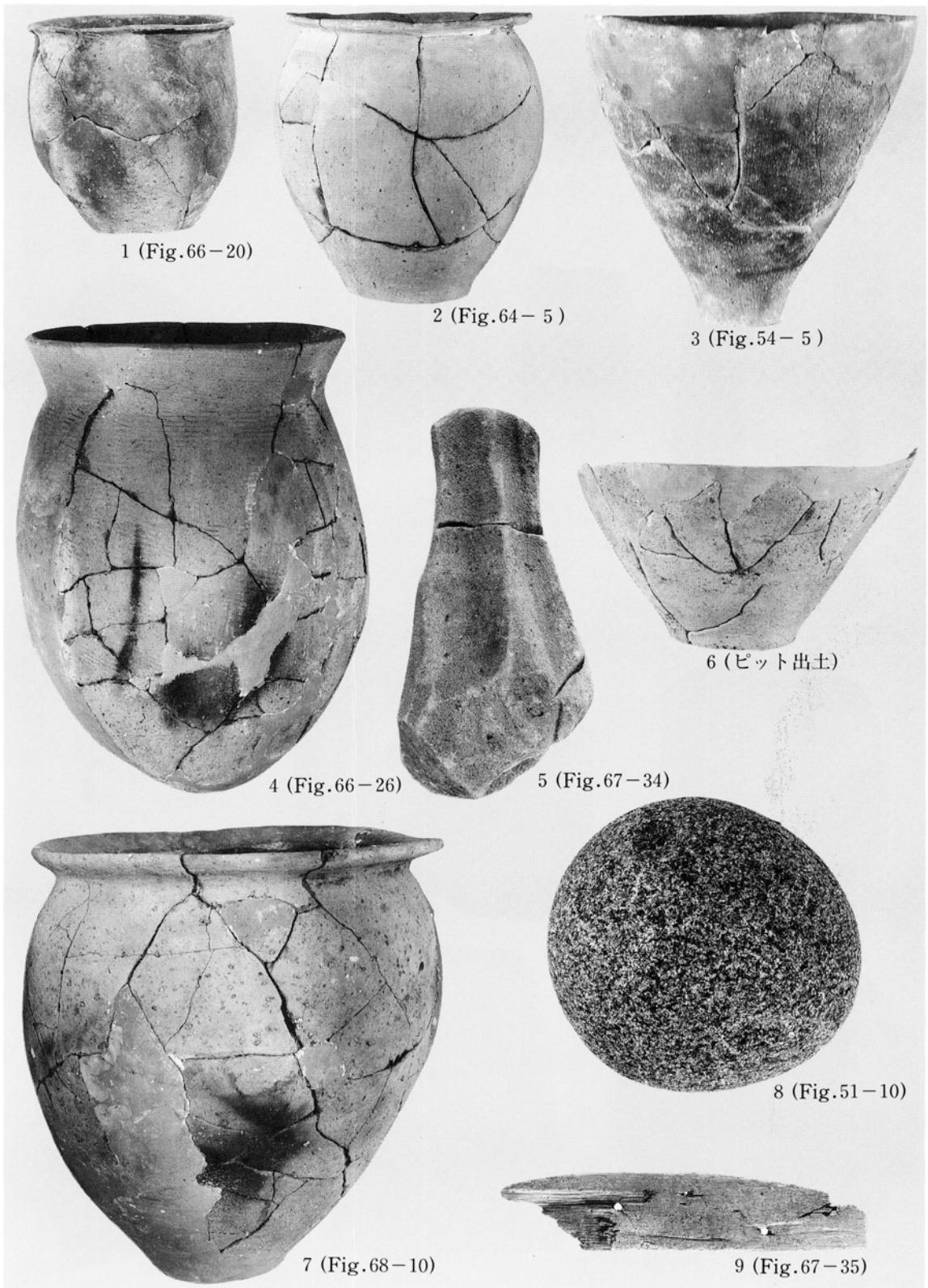


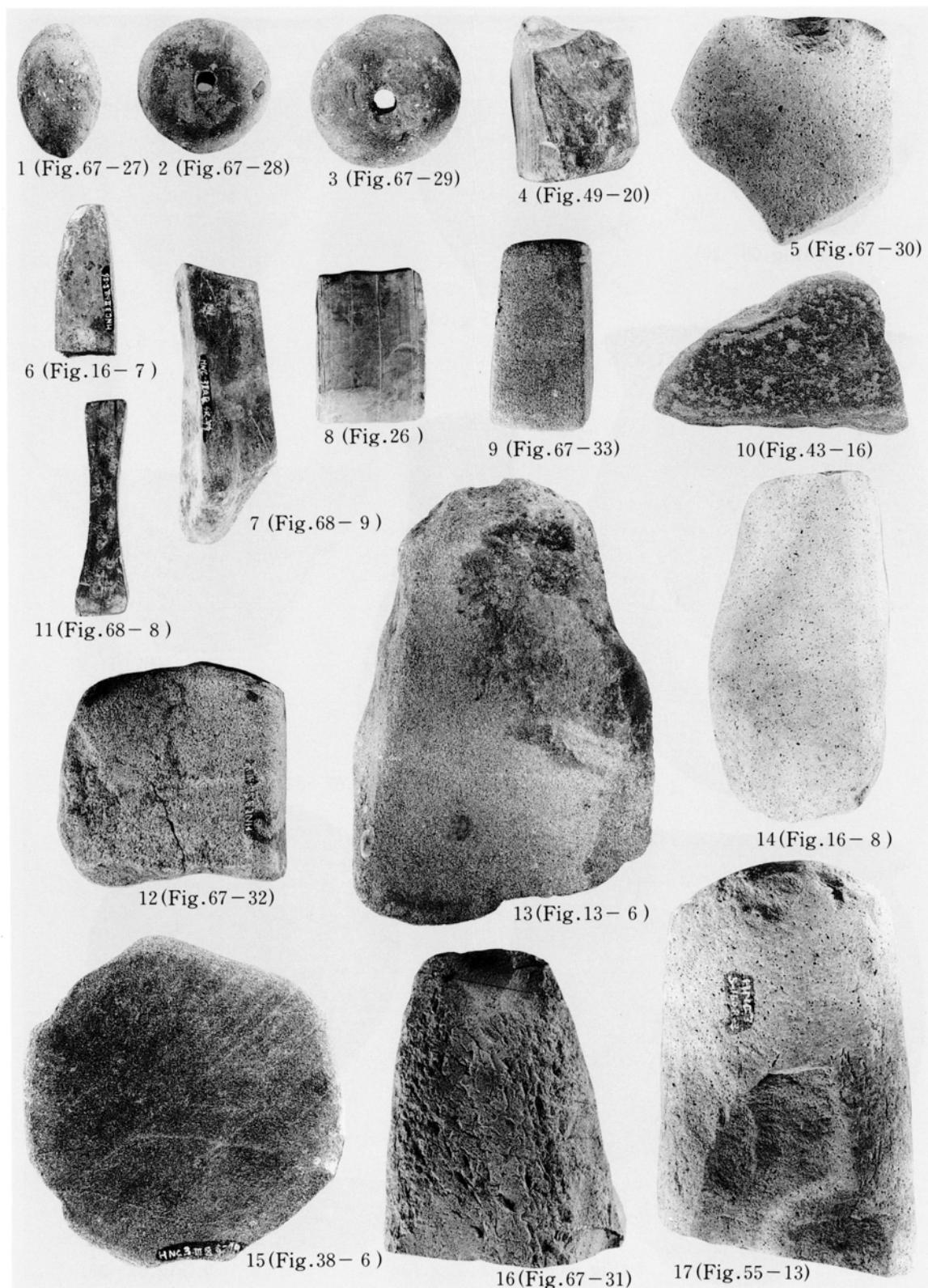
6. 160号土壤 (SK-160) 西から

7. 110号杭列遺物出土状況 北から









羽根戸原C遺跡群III

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第188集

1988年3月31日

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区大名2丁目10番28号 ようきビル

印刷 赤坂印刷株式会社
福岡市中央区大手門1丁目8番34号
